神戸市看護大学

いちかんダイバーシティ看護開発センター

ICHIKAN NURSING DEVELOPMENT CENTER FOR DIVERSITY

2023年度　実績報告書

ご挨拶

神戸市看護大学　学長

江川　幸二

いちかんダイバーシティ看護開発センター（以下、本センター）は南裕子前学長のリーダーシップのもと、ご自身がセンター長となり 2021 年の 4 月に開設されましたが、その約 1 年前の新型コロナウィルス感染症のパンデミックが始まった頃から、開設に向けて学内での話し合いを行ってきました。私はその当時、学部長・研究科長・理事という立場で議論に参加させていただきましたが、本センター開設に向けての基本理念や名称をどうするかなど、熱く真剣な議論を繰り返し行ってきたことが今になって思い出されます。

本センターは現在 3 年目を迎えたところですが、フットケア支援プロジェクトチームが新たに増え、11 グループが継続的に積極的な活動を行い、その成果を研究発表に結び付けています。少しずつですが、着実にその歩みを進めていることが見てとれます。具体的な活動内容や研究発表につきましては、本報告書の内容をご覧いただければと思います。

地域貢献や研究は、教育と同様に高等教育機関である大学の使命ですが、神戸市が設置した公立大学法人である本学としては、神戸市民への貢献が求められています。もちろん大学としては、ローカルな地域貢献を実施するだけでなく、その成果をグローバルに発信し、国際的なネットワークを構築していく必要があります。その中核的な役割を果たしているのが、本センターです。

本学は昨年度、一般財団法人大学教育質保証・評価センターによる大学機関別認証評価を受審致しました。その結果、本学の【優れた点】として３つ挙げられた内容のひとつが、本センターに関することでした。具体的には、『地域連携、生涯教育、国際交流、及び産学官連携、防災・減災支援を５つの柱として、地域の健康課題解決に向けた実装研究を推進するため、「いちかんダイバーシティ看護開発センター」が中心となり、地域のニーズに応じて多様な地域住民や専門職と協働し、「まちの保健室」事業等地域の健康課題解決に向けた活動を実施している』と記載されています。本センターの取り組みが高く評価された証しだと言えるでしょう。評価結果の報告書は本学ホームページ内の「教育情報の公開」の中に「自己点検評価報告書と本学に対する大学機関別認証評価結果」として掲載しておりますので、詳細につきましては是非ご覧いただければ幸いです。

今後も地域に根ざした公立大学法人として、継続的かつ積極的に地域貢献をおこない、それを研究と結び付けて地域の健康課題の解決に寄与して参りたいと考えております。ステークホルダーの皆様におかれましては、今後とも引き続き本センターの取り組みに関しまして忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。

刊行によせて

神戸市看護大学
いちかんダイバシティ―看護開発センター長
岩本　里織

いちかんダイバシティ―看護開発センター（以下、センター）は、2021 年 4 月に開設し、早くも 4 年が経過いたしました。開設から 3 年間は、南裕子前学長がセンター長を務められておりました。この間、教職員のご活躍もあり、センターにおける地域貢献活動は、非常に活発な活動が展開されており、大学機関別認証評価等において、本学の優れた活動として評価されております。

2023 年度からは、わたくしがセンター長を拝命いたしました。南裕子前センター長から引き継ぎ、センター活動の維持・発展を担えるか大変に不安でした。しかし、本実績報告書でご報告させていただきますように、センターの各グループのリーダーのリーダーシップのもと、大変に活発な活動が展開されており、安堵しているところです。

2023 年度の活動において、特筆することの一つは、「山路ふみ子名画上映会」を山路ふみ子文化財団様と本学とで共同開催をしたことです。本上映会の前には、学園都市混声コーラスの皆様からのすばらしい歌声を披露していただきました。学園都市をはじめとする地域からご参加いただいた多くの住民の皆様と、コーラスと名画を鑑賞しながら、久しぶりに交流する機会を持つことができました。

二つ目は、海外との交流の再開です。JICA バングラディッシュ看護サービス人材育成プロジェクト研修について、本学がお引き受けさせていただき、バングラディッシュ国の省庁関係者や看護大学学長および医療機関看護部長ら訪問され学生や教員と交流することもできました。さらに、大邱保健大学の総長らがご来校され、本学との交流についての意向確認書（LOI：Letter of Intent）の締結を行いました。そのほか、ワシントン大学やダナン大学などの MOU の継続などがなされています。

このようにコロナで中断されていた、地域住民との交流や海外との交流が再開されつつあります。これまで述べさせていただいた活動以外にも、多くの活動が通常どおりの活動にもどり、今後の地域貢献活動のさらなる推進が期待されます。本センターが核とする「地元創成」に向けて、学内外のみなさまと協働させていただきながら、活動していきたいと存じます。引き続き、みなさま方のご協力およびご指導をお願い申し上げます。

目　　次

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要　・・・・・・・・・・・・・　2

いちかんダイバーシティ看護開発センターの活動　・・・・・・・・・・・・・　6

グループ・プロジェクトチーム等の活動

Ⅰ　地域連携グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

Ⅱ　健康支援グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38

Ⅲ　在宅ケア支援グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　52

Ⅳ　国際交流グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66

Ⅴ　保健師キャリア支援センターグループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・　70

Ⅵ　地域保健支援グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　77

Ⅶ　臨床看護連携グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　80

Ⅷ　災害看護グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　82

Ⅸ　リカレント教育グループ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　85

業績一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　88

センターの組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

いちかんダイバーシティ

看護開発センターの概要と活動

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要

１．本センター設置の趣旨

我が国では、人口減少、少子高齢化が進行中であり、2040 年に高齢者人口がピークを迎える。2040 年を展望し、誰もがより長く元気に活躍できる社会の実現を目指して、住民の「健康寿命の延伸」と「多様な就労・社会参加」とともに、「医療・福祉サービスの改革による生産性の向上」への取り組みが必要とされている。本センターは、このように多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組み、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与することをめざして設立した。

２．沿革

神戸市看護大学は、阪神淡路大震災発災後 1 年後の 1996 年に開学し、兵庫県及び神戸市の復旧・復興とともに歩んできた歴史を持つ。2006 年度の文部科学省現代 GP の助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に始まり、現在に至るまで地域に根ざした教育・研究・地域連携活動を行ってきた。

2009 年度に、地域社会における健康支援の推進と、教育・研究における地域との交流を発展させることを目的として、「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」が開設された。2012 年度には、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を全学的に展開した。さらに、2013 年度には、文部科学省の拠点事業である地（知）の拠点整備事業（Center of Community:以下 COC 事業）で、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」に取り組み、2014 年度に、地域連携教育・研究センターが開設され、西区を中心に地域貢献活動を継続し、地域住民との交流、健康増進活動等を行ってきた。

これまでの取り組みを発展させ、2021 年 4 月にいちかんダイバーシティ看護開発センターが開設された。尚、これまでの地域連携・教育研究センターの活動は、いちかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行っている。

2006 年～	文部科学省の現代 GP「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の助成を受けた事業の実施（～2008 年度）
2009 年	健康支援地域連携センターの開設
2012 年	健康支援地域連携センターが、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を展開
2013 年	COC 事業における「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」への取り組み（～2017 年度）
2014 年	地域連携教育・研究センターの開設
2021 年	いちかんダイバーシティ看護開発センターの開設

３．理念

本センターは、年齢、性別、人種、国籍、宗教、価値観、ライフスタイルなどが異なる人々が共に生きる地域社会の中で、一人ひとりの生存、生活、尊厳を尊重し、個人と、個人が集まってつくるコミュニティの持つ豊かな可能性を実現することを目指す。そして、センターおよび本学では、日本学術会議で提案されている地元創成看護学の実装を目指している。センターでは、地域連携、生涯教育、国際交流、及び産官学連携、防災・減災支援を 5 つの柱として、多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組む（図 1. センター概念図）。そして、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与する。さらに、地元住民に加え、専門職、自治体、関係機関（職能団体や民間企業）と共にこれらの分野の課題解決に取り組む。コミュニティとの協働を通じ、新たな知見を得て、ローカルに働きかけた経験を蓄積する。そして、この知見をグローバルに展開し、国際的な人・文化交流ネットワークの拠点を構築する。

図１　いちかんダイバーシティ看護開発センターの概念図

４．目標

本センターでは、神戸市を中心としながら、兵庫県下の様々な地域を地元ととらえ、公立大学法人として、教育研究活動の成果を地域社会に還元することを目標とする。

（１）　地域課題の解決や健康創造都市戦略等を担う学術研究の推進

神戸市と地域の抱える保健・医療・福祉分野の様々な政策課題に対して、産官学連携の強化を図り、課題解決に資する研究に取り組む。そして、国内外に向けて研究成果を発信し、各分野の学術的発展に貢献するとともに、政策提言等により、健康寿命の延伸、健康格差の縮小を目指す健康創造都市戦略の一翼を担い、保健・医療・福祉施策の充実に寄与する。

（２）　市民との連携・交流による地域の保健医療への貢献

地域と連携した教育研究活動として、企業、市民、市内の大学、神戸市民病院群をはじめとする医療機関、福祉施設等と連携した教育研究活動、地域貢献活動を推進するとともに、その成果を積極的に市民へ還元する。そして、市民に信頼され、貢献できる大学として、公開講座等の実施、大学施設の開放等を行うことにより、市民の生涯学習に寄与し、市民との交流を促進する。さらに、地域の看護人材の供給のために、看護職者の就業継続支援や復職支援、新たな学びのニーズに対応したリカレント教育を充実させ、看護職者の生涯学習の拠点としての役割を果たす。

（３）　国際都市神戸にある大学として、学生の異文化理解の推進と海外の大学との交流の推進

多様な価値観や文化的背景、生活習慣等に配慮できる国際的な感覚を有した人材育成を行うことを目指す。異文化への理解やグローバルな視点と感覚を培うため、海外研修による異文化体験や地域で暮らす在日外国人との交流、外国の大学との国際交流を推進する。さらに、グローバルな視点を培う国際交流の推進のため、海外からの留学生の受入れを推進するとともに、国際化が進む保健・医療・福祉分野において、医療介護分野等で働く外国人のキャリア開発を支援する。

５．位置づけ

いちかんダイバーシティ看護開発センターは、センター長及び副センター長のもと、地域連携、生涯教育、国際交流、産官学連携、防災・減災支援という大きな 5 つの柱を掲げ、開設時より、８つのグループ事業（地域連携、健康支援、在宅ケア支援、国際交流、保健師キャリア支援センター、地域保健支援、臨床看護連携、災害看護）を展開してきたが、2023 年度からは、リカレント教育が加わり９つのグループ事業が展開された。各グループの活動はプロジェクト型とし、各グループにリーダーを配置して、本学教員が自発的に参画し、全学協働で行っている。グループの他に、ウクライナ支援、フットケア支援については、プロジェクトチームとして活動を行っている。

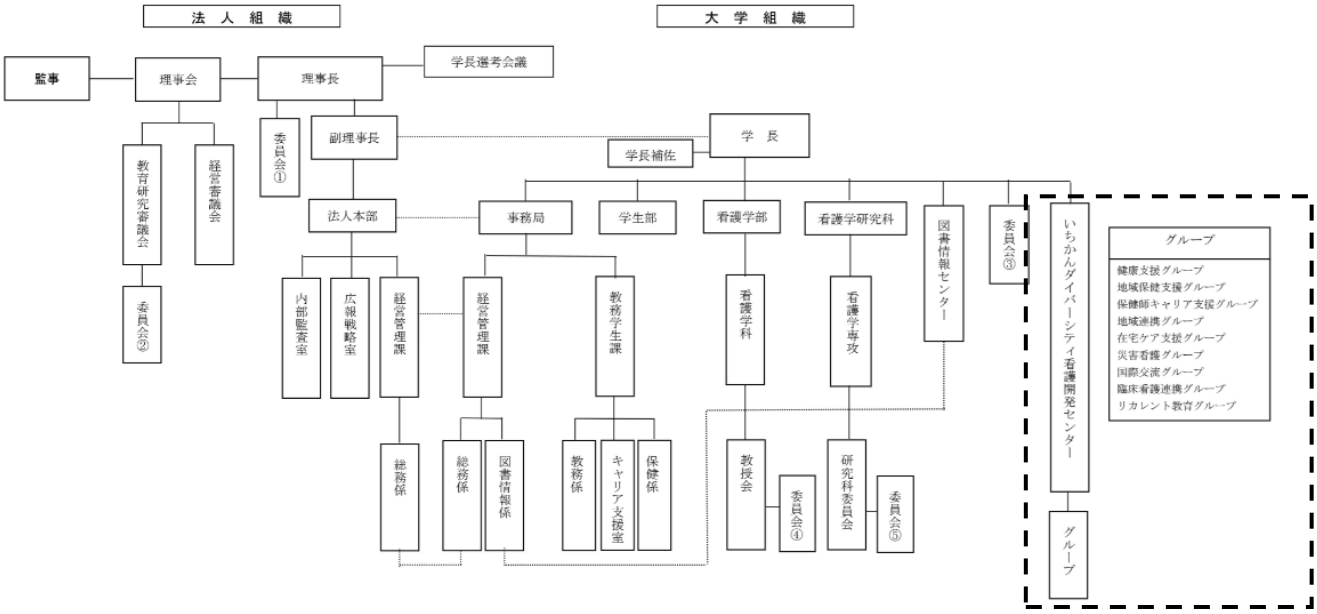


図２　いちかんダイバーシティ看護開発センターの位置づけ

いちかんダイバーシティ看護開発センターの活動

いちかんダイバーシティ看護開発センター　水川真理子

１．センターメンバー

センター長　　岩本里織
副センター長　片倉直子
メンバー　　水川真理子、磯濱亜矢子、宮島朝子、勝田玲子

２．センター事業概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターでは、2023 年度は以下の 2 つの地域貢献、2 つの国際交流活動を展開した。地域貢献として、地域住民を対象とした名画特別上映会、学内外の専門職を対象とした講演会「実装科学とは：エビデンスに基づく介入を現場に根付かせる方法」を開催した。また、国際交流活動としては、国際交流グループと協力しながら JICA のバングラデシュ看護サービス人材育成プロジェクト研修、韓国大邱保健大学校と国際交流に関する意見交換会を開催した。

３．地域貢献事業の実際

（１）山路ふみ子名画特別上映会

1)事業内容・経過

2023 年 9 月 15 日（金）に神戸市看護大学ホールにおいて、神戸市看護大学＆山路ふみ子文化財団主催の名画特別上映会を開催した。神戸市出身の映画女優であった山路ふみ子氏は、私財を投じて山路ふみ子財団を設立し、財団の活動は、日本映画界の振興と教育や、福祉への支援などを主として現在まで継続されている。また、山路氏は看護の博士課程学生に対する研究助成金の制度を創設されており、看護になじみが深い方でもあることから、本学と山路ふみ子財団が共催で名画特別上映会を開催することとなった。そして、本会は名画を上映するだけではなく、地域振興公益事業として開催し、周辺住民の芸術文化振興に寄与できるよう「学園都市混声コーラスによる歌唱披露」を含めてプログラムを企画した。開催にあたっては、山路ふみ子文化財団と本学の教職員の選出メンバー、本学の学生ボランティア、学園西町自治会会長の橋野啓一氏とで協議を重ね、学園西町ふれあいのまちづくり協議会、学園東町ふれあいのまちづくり協議会、学園都市混声コーラスにご協力頂いた。プログラム内容を表 1 に示す。

表 1 プログラム内容

時間	内容
13:00	受付（配布チラシの配布、山路ふみ子著書 100 冊を配布）
13:30～	開会式
13:50～	学園都市混成コーラスによる歌唱披露
14:40～	山路ふみ子氏紹介映画の上映
14:50～	映画「ディア・ドクター」上映
17:10	閉会

写真：受付の様子

写真：配布した山路ふみ子著者

2)事業成果・実績

名画特別上映会の広報は、本学のホームページ上での案内に加え、学園都市地域へのチラシの回覧、学園都市地域の福祉センターやショッピングセンターなどにポスター掲示を行た。当日は、20～90 代の幅広い年代の 219 名（地域住民 99 名、本学の教育・実習ボランティア登録者 39 名、学園都市混声コーラス 32 名、教職員 35 名、本学学生 6 名、山路ふみ子財団理事ら 8 名）が参加した。

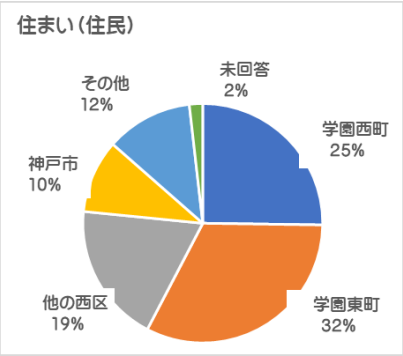
写真：学園都市混成コーラスの歌唱披露

開催後のアンケートには 121 名(住民 111 名、教職員 10 名)から回答を得た(回収率 55.2%)。アンケート回答者の 9 割を超える方が満足したと回答し、「楽しいひとときを過ごすことがで

きた」「今後もこのような機会を希望する」といった感想や、「コーラスはお話しと演奏との流れに惹きこまれ、世界が広がる気持ちになりました」「山路ふみ子さんのお名前は聞き覚えがあり、なつかしい思い出」「山路ふみ子さんを知れて良かった」映画について、「人間として一番のものを再確認できました」や「医療のことを考えさせられた」などの感想をいただいた。ボランティアとして参加した学生は、イベント運営に携わり、地域の皆様と交流ができる機会であったと振り返っていた。以下にアンケート結果の一部を示す。

① 回答者の居住地

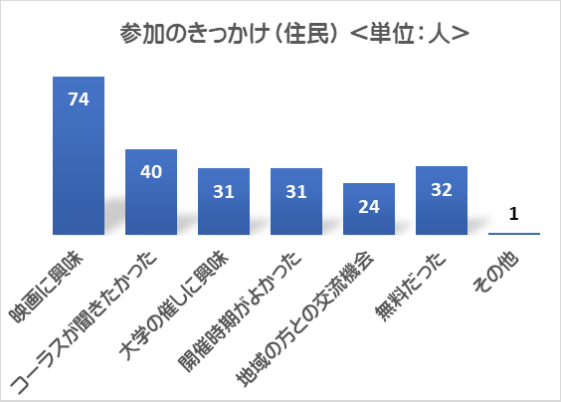
	住　民	%	教職員	%
学園西町	28	25.2	0	0.0
学園東町	36	32.4	1	10.0
上記以外の西区	21	18.9	1	10.0
西区以外の神戸市	11	10.0	6	60.0
その他	13*	11.7	2	20.0
未回答	2	1.8	0	0.0
合　計	111	100.0	10	100.0



*神戸市西区学園西町・東町以外の回答者の居住区：
神戸市：新長田、小東山、井吹台東町(2)、井吹台北町、伊川谷有瀬、秋葉台、平野町、西神中央(4)
その他：明石市

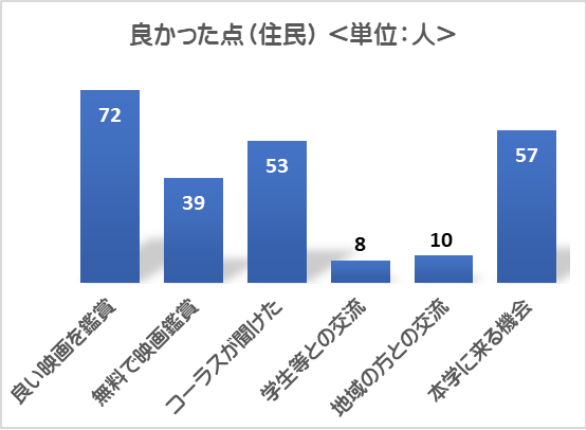
② 名画上映会参加のきっかけ（複数回答）

	住　民	%	教職員	%
映画に興味があった	74	66.7	5	50.0
学園都市混声コーラスが聞きたかった	40	36	4	40.0
大学の催しなので興味があった	31	27.9	4	40.0
開催の時期がよかった（平日・午後から）	31	27.9	4	40.0
地域の方と一緒に参加したり交流できる良い機会と思った	24	21.6	2	20.0
無料だった	32	28.8	1	10.0
その他	1	0.9	0	0.0



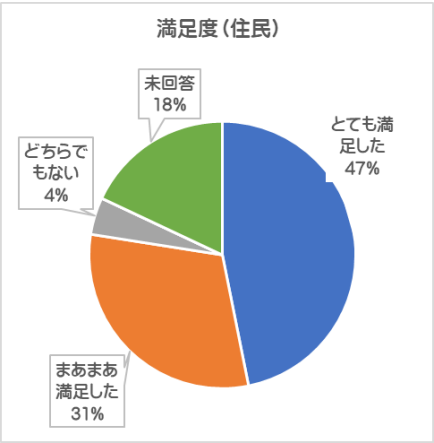
③名画上映会参加のきっかけ（複数回答）

	住　民	%	教職員	%
良い映画を近隣で鑑賞できた	72	64.9	6	60.0
無料で映画を鑑賞できた	39	35.1	2	20.0
学園都市混声コーラスが聞けた	53	47.7	8	80.0
大学の学生などとの交流ができた	8	7.2	1	10.0
地域の方との交流ができた	10	9.0	3	30.0
神戸市看護大学に来る機会となった	57	51.3	0	0.0
その他	0	0.0	0	0.0



④ 名画上映会の満足度

	住　民	%	教職員	%
とても満足した	52	46.9	7	70.0
まあまあ満足した	34	30.6	2	20.0
どちらでもない	5	4.5	1	10.0
あまり満足しなかった	0	0.0	0	0.0
まったく満足しなかった	0	0.0	0	0.0
未回答	20	18.0	0	0.0
合　計	111	100.0	10	100.0



（２）いちかんセンター主催講演会「実装科学とは」

1）事業内容・経過

EBM（Evidence-based Medicine）の浸透に伴い，これまで多くの EBI（Evidence-based intervention：エビデンスに基づく介入）が示されてきた。近年、EBM の次なる一手として、近年「どうやって現場に EBI を定着させるか」を考える実装科学に注目が集まり始めている。いちかんダイバーシティ看護開発センターでは、「実装科学とは何か」、「保健医療従事者が他職種や患者、地域コミュニティなどの多様なステークホルダーと協働して、EBI を臨床活動に落とし込む方法や実際の展開」について、実装科学の推進に注力する講師を招聘し、我々保健医療従事者がどう実装科学に向き合い、EBI の実装に取り組むべきかについて学ぶ機会としたいと考え講演会を企画した。

2024 年 3 月 13 日に、「実装科学とは：エビデンスに基づく介入を現場に根付かせる方法」を、オンラインのライブ配信で開催した国立がん研究センターがん対策研究所の齋藤順子先生より「実装科学とは何か」について、多様なステークホルダーと協働して EBI を臨床活動に落とし込む方法や展開について、実際の事例を交えながらご講義いただいた。

2）事業成果・実績

開催後のアンケートでは 9 割を超える参加者より満足したと回答があり、教育研究機関の参加者からは、「実装科学の理論に基づいたフレームワークをご紹介いただき、アウトカムについて整理がついた」「事例とともに具体的にご説明いただきとてもよく理解できたので、今後の研究計画に役立てたい」と感想が寄せらた。また、医療機関の参加者からは、「病院の実践者の立場で参加した。実装科学や実装研究は実践者の問題解決になると思う」「研究だけでなく臨床実践の考え方につなげられる」「専門看護師の活動にも関係するので、他のスタッフにも伝えたい」との意見をいただき、教育研究者と実践者が共に介し実装研究について考える貴重な機会となった。

画像：開催案内チラシ

４．国際交流の実際

（１）JICA のバングラデシュ看護サービス人材育成プロジェクト研修

1)事業内容・経過

2023 年 11 月 30 日に、独立行政法人国際協力機構（JICA）の「看護サービス人材育成プロジェクト」における研修が本学で開催され、バングラデシュより 14 名の看護系大学の学長と行政担当者が来校された。

研修では、はじめに、江川幸二学長からの来校のご挨拶と交流の後、岩本里織いちかんダイバーシティ看護開発センター長から本学の組織運営、カリキュラムの設置基準、委員会活動などについての説明を行った。

写真：記念撮影

写真：研修オープニング挨拶・自己紹介

その後、学内視察で学部生の講義と演習の見学を行った。演習で学生 2 名がペアでそれぞれ患者役と看護師役となって洗髪の実技を行っているところを見学したバングラデシュの研修参加者からは「実技は人形が足りないために十分に行えないと思っていたが、このように学生同士で行えることが分かって良かった、これから本国でも取り入れたい」との感想が聞かれた。本学看護系教授と研修参加者との交流会では、組織や委員会運営についての質問に本学の学長や看護系教授が時間の許す限りお答えし、研修参加者より、「様々な研修の中でも大学の教育現場を視察することができた本研修はとても有意義だった」とのご意見を頂いた。本学の参加者にとってもバングラデシュの看護教育の実状や今後の課題に触れることのできる貴重な機会となった。

写真：洗髪演習の見学風景

写真：交流会の様子

（２）韓国の大邱保健大学との国際交流に関する意見交換会

1)事業内容・経過

2024 年 2 月 21 日に、大邱保健大学のイ・ジョンヨン総長ら 4 名の教職員と、神戸朝日病院の金守良院長が来校され、両大学間の国際交流に関する意見交換を行った。大邱保健大学とは、以前より交流が続いていたものの、コロナ禍で長く来日が延期しており、数年ぶりに来学いただくことが叶った。本学の江川幸二学長より、歓迎のご挨拶と本学の教育体制などについて紹介を行った後、大邱保健大学の教育理念や体制の紹介があった。大邱保健大学総長は、「コロナ禍で交流が難しかったが、両校の交流の再スタートとしたい。地域（ローカル）と国際化（グローバル）をあわせたグローカルという概念をもとに発展していこうという理念を持っている。両校で手をつなぎ、ともにグローカルの理念のもと発展していきたい。」と話された。大邱保健大学のグローカル大学 30 プロジェクトについて、本学が参加・連携を行うこととなり、意向確認書(LOI: Letter of Intent)に双方が署名を行い協定の締結を行った。今後は、学生の交流や研究面での教員間の交流などを行うために協議を進める予定である。

写真：意見交換会の様子

写真：連携協定

写真：江川学長と大邱保健大学校総長

写真：記念撮影

５．事業評価と来年度の展望

2023 年度は 4 つの地域貢献・国際交流事業を開催した。住民対象の名画特別上映会と、専門職対象の講演会参加者からは高い満足度が得られた。また、国際交流活動の JICA のバングラデシュ看護サービス人材育成プロジェクトでは、看護系大学の教育・研究活動について講義・見学会・交流会を通じて、活発な意見交換が行え、実状と今後の課題を見出すことができ、大邱保健大学とは交流が行えた。来年度の地域貢献活動は、今年度の事後アンケート結果で寄せられた要望や意見を参考に、ニーズの高い講演会などを企画する。

グループの活動

Ⅰ　地域連携グループ

１．グループ概要

神戸市看護大学は、2006 年に文部科学省現代 GP の助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に採択された後、2009 年に「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」を開設し、2012 年には国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」へ、2014 年には「地域連携教育・研究センター」へと、名称の変更とその活動を発展させながら、地域住民との交流や健康増進活動等の教育・研究・地域貢献活動を継続して行ってきた。

2021 年 4 月にこれまでの本学の取り組みをさらに発展させるために「いちかんダイバーシティ看護開発センター」が開設されたことに伴い、これまで行ってきた地域連携・教育研究センターの活動は、いちかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行うこととなり、2023 年度は 3 年目である。

２．グループメンバー

リーダー　　片倉直子
メンバー　　片山修、神原咲子、丸尾智実、水川真理子、中川恵津子、勝田玲子

３．地域連携活動

（１）コラボカフェ

いちかんダイバーシティ看護開発センター　水川真理子

1)　概要

本事業は、大学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」として運営されている。現在、本学を含め神戸市内の 8 大学が本事業に参画している。本学は、2012 年にコラボカフェを開設した。名称である「コラボ」は、Collaboration の略であり、「大学の教職員と学生が地域住民および関連機関と共に」を意味し、「カフェ」は「子育て中の親子が一休みできる」場として機能することを目指して名づけられている。

2)　目的

コラボカフェは、大学施設を利用した学生と住民の参加を通して親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および学生が生活を支援できる看護職として成長すること、また、それらにより大学の発展に寄与することを目的としている。

3)　実施事業

a)子育て親子への場の提供と交流の促進
b)子育て等に関する相談、援助等
c)地域の子育て関連情報の提供
d)子育て及び子育て支援に関する講習
e)コラボカフェを活用した授業及び研究の実施

4)　運営方法

対象：生後 2 か月かつ、首がしっかりすわってから 3 歳児までの未就園児と、その保護者
開催日時：毎週　火・木・金　9 時 45 分～12 時 15 分、13 時～15 時 30 分

2020 年より新型コロナウイルスの感染拡大防止のために予約制とし、感染状況に応じた利用人数の制限を行い、感染予防策を講じて来所型のコラボカフェを開催していたが、2024 年 1 月より予約制と人数制限をふれあい遊び（木曜日午前中）の開催時以外は廃止した。
スタッフ：保育士 3 名が見守りを行い、保護者からの相談に応じている。

5)　実績（利用状況）

表 1　月別の延べ利用者数（人）（2023 年 1 月～2023 年 12 月）

	保護者	子ども	新規登録	学生
1 月	27	29	9	2
2 月	40	43	12	0
3 月	79	82	6	2
4 月	36	35	10	11
5 月	44	43	7	5
6 月	44	45	12	12
7 月	61	61	11	0
8 月	50	32	7	5
9 月	57	59	10	0
10 月	88	91	21	9
11 月	94	101	20	3
12 月	99	109	15	0
2023 年　計	719	730	140	49

2023 年 1 月から 12 月末までのコラボカフェの開催日数は 138 日、年間の延べ利用者数は、保護者が 719 名、子どもが 730 名であった（表 1）。このうち新規登録者は 140 組で、1 日平均利用者数は、保護者が 5.2 人、子どもが 5.3 人であった。2020 年より新型コロナウイルスの感染拡大防止のために予約制とし、感染状況に応じた利用人数の制限を行い、

感染予防策を講じて来所型のコラボカフェを開催していたが、2023 年 5 月 8 日より新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが 5 類に移行したため、利用者の人数制限を 1 日 5 組から 15 組に緩和した。その後、2024 年 1 月からは人数制限と予約制をふれあい遊び（火曜日午前中）の開催時以外は廃止した。経年別にみるとコロナ禍で一日平均利用者数と新規登録者は激減したが（図 1、2）、一日平均利用者数は 2023 年度に微増している。保護者から保育士への相談は随時受け付けており、23 件の相談があった。保育園や幼稚園への入園に対する不安、子どもの友達との関わり方、ミルクの飲ませ方、赤ちゃんがえり、睡眠などについて保護者から保育士に質問があり、保育士が都度相談に応じている。

学生の延べ参加者数は 49 名で、大学院生が授業や研究で活用している。新生児乳幼児援助の授業では、乳幼児の発育発達の観察や、乳幼児を育児する親の思いを理解するために、コラボカフェ利用者に一人 30 分程度話を聞いて助産師の役割について学び、親子との交流を深めていた。また、学部生がボランティアで授業の合間などに、コラボカフェに訪れ来所中の子どもと遊んだり、見守りを行ったりしている。

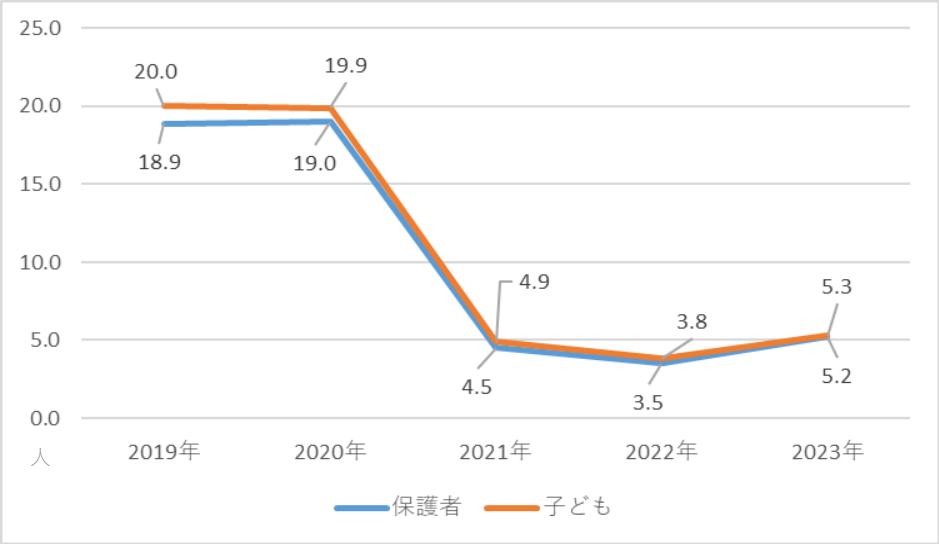


図 1　一日あたりの平均利用者数の推移（2019～2023 年）

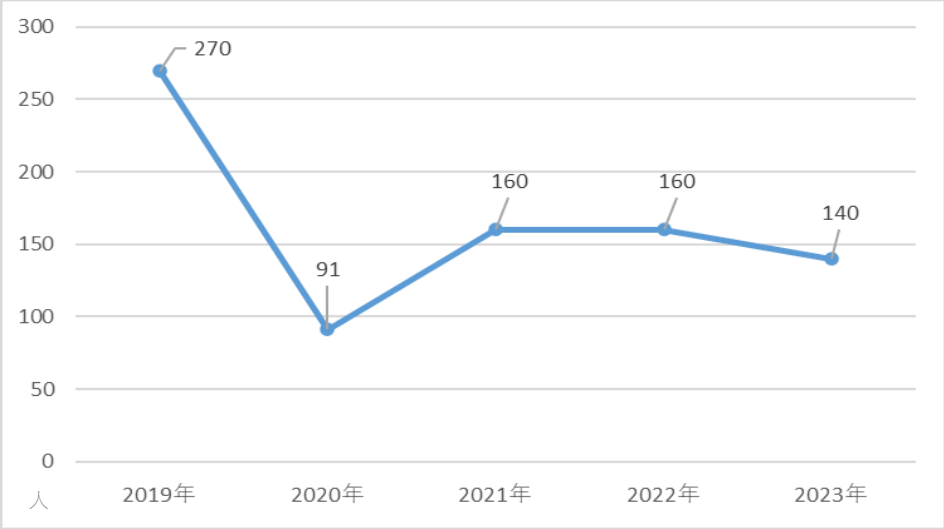


図 2　新規登録者数の推移（2019～2023 年）

6）　教員と保育士が企画・運営したプログラム

2023 年度は、来所型イベントを 3 回、オンラインイベントを 1 回開催した。

・「子どもの靴選び」

5 月 22 日に「靴の選び方」のイベントを、保護者が講義を聴いている間に保育士が子どもの遊びを見守る体制をとって体育館で開催した。椎野啓三講師（足と靴のプラウド：代表取締役・店長）からの講義後、全員の子どもの足の長さや幅を計測して、実際に履いている子どもの靴をみながら、買い替え時期や選び方についてアドバイスを行った。参加者は 12 組 25 名であった。参加者より、「靴のサイズがあっているかわからなかったので、それがわかって良かった」「靴選びの基準（踵の固い、しっかりした靴、甲ベルトのある靴を選ぶ）を参考にしたい」という感想がきかれた。

・「母乳と卒乳、離乳食の話」

8 月 2 日に「母乳と卒乳、離乳食の話」についてオンラインでのライブ配信と、録画のオンデマンド配信で行い、保護者及び本学大学院生 23 名が参加した。産業医科大学の広域･発達看護学講座教員の井上ちはる先生が講義に続いて、事前に頂いた質問に回答した。「卒乳について知りたいことが全て聞けた」「本にとらわれず、こどもに合わせて大丈夫と安心させてもらえた」という感想をいただいた。また、オンデマンド配信について、「子供が昼寝をしている時や夜寝てから動画を視聴でき、とめたり巻き戻して聞き直しできるところがよかった」と好評で、参加者の満足度の高いイベントとなった。

・「ベビーマッサージ」

6 月 7 日にコラボカフェにおいて「ベビーマッサージ」のイベントを開催し 4 組 8 人が参加された。野田まゆみ保健師（ベビーマッサージ：kokko）からベビーマッサージの方法、注意点などについての説明を受けた後、「リラックスのためのベビーマッサージ」「便秘と消化吸収のためのマッサージ」「背中のマッサージ」について、講師と一緒に実演を行った。参加者は熱心に講師の話を聞いて、子どもまたは人形でマッサージの練習をされた。「ベビーマッサージは初めてだったが、説明がとても分かりやすく手軽に行えるマッサージばかりでとてもありがたかった」「マッサージの内容を書いた紙をいただけたので、家でもできそう。また、根拠などを教えていただけたのもよかった」という感想をいただいた。当日は、トライやるウィークで星稜台中学校の学生 3 名が職業体験中で本会に参加した。「日ごろこんなに近くで赤ちゃんをみることがないのでとても可愛かった。今日の体験から自分も子育て支援で何かお手伝いがしたいと思った」と貴重な体験となったことがうかがえた。

・「医療のかかり方」

10 月 18 にコラボカフェにおいて、「医療のかかり方」のイベントを開催し、6 組 12 名が参加した。講師の阿真京子氏（非営利活動法人日本医療政策機構　フェロー）から、子どもの「いつも」を知ることや、全身状態の見方、病院に行く前にメモや写真など症状を記録しておく時のポイントの他、感染・誤飲予防などについてもお話しいただきいた。参加者から「ちょうど、どの程度の症状で子どもを病院に連れていくべきなのか悩んでいたので、知りたかったお話を聞くことができ勉強になった」「いざ体調が急変した時や事故があった時に、今日のお話をもとにおちついて対応をしたい」「子供のふだんの様子『食う、寝る、遊ぶ、出す』をよく観察し、何か病気になった時、記録をしておいて、冷静に病院の先生に、『いつもと違う症状』と伝えられれようにしたい」との感想が寄せられた。当日は本学の学部生 3 名が参加し、保護者が講義に集中できるように、子どもと遊んだり、見守りを行った。参加者から、「子どもを見ていただけたので、しっかりお話を聴くことができた」と感想をいただき好評であった。

7）　保育士が企画・運営したプログラムについて

毎週木曜日にふれあい遊びとして、手遊び、絵本の読みきかせ、紙芝居、パネルシアター、楽器遊び、ダンスなどを保育士が実施している。その他に、来所型の季節のイベントとして、7 月 5 日に七夕、7～8 月の火・木の午前中に水遊びを行った。12 月 6 日には、クリスマス会、3 月 1 日にはひなまつりを開催した。保育士によるイベントは親子から人気が高く、受付開始後すぐに予約枠 15 組が埋まる状況である。

8）　評価

今年度は新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが 5 類に移行したことにより、感染症対策で実施してきた人数制限や予約制を緩和したため、利用人数が増加した。SNS での広報に加え、西区役所の保健師や保育士と連携して本学のコラボカフェの利用の促進を行ったことにより、利用者が増加したと考えられる。新規登録者数の減少は、日本全体の出生数の減少や、周辺地域における新規の子育て支援事業所の開設などの影響も考えられる。イベントは人気が高いため、引き続き人数制限と予約制としているが、予約開始とともに申し込みの連絡があり親子が楽しみに参加している。

9）　今後の課題

新型コロナウイルスの収束に合わせ、運営形態を適宜変更し、必要時は感染予防策を引き続き講じながら、安全に安心して利用できる子育ての場の提供を継続する。イベントの開催方法は、コロナ禍で培ったオンラインも継続し、コラボカフェでの対面開催とあわせて最適な開催方法をイベントの内容や目的に応じて検討する。イベント内容としては、これまでに行っていないテーマについても検討し、幅広いニーズにそえるように企画する。

（２）　まちの保健室

災害看護・国際看護学分野　神原咲子

神戸市看護大学「まちの保健室」は、兵庫県看護協会神戸西部支部の活動として、2005 年 12 月から地域住民を対象に実施している。出産・子育て、生活習慣病やこころの健康、介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、協力分野の看護教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的としている。現在は、地域住民一般の方々を対象にした『健康支援』、子育て中の保護者とその子どもを対象に健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進を支援する『子育て支援』、こころの悩みを抱えている方を対象に看護相談を行う『こころと身体の看護相談』、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援を行う『もの忘れ看護相談』の 4 拠点で活動している。今年度、兵庫県看護協会のまちの保健室の趣旨に賛同し、神戸西部支部のまちの保健室のボランティアに登録した者は 24 名であった。以下、表 2 に今年度担当した教員を示す。

表 2 2023 年度まちの保健室担当者一覧

拠点活動	担当教員
健康支援	第 1 回：神原、花井 第 2 回：佐藤(隆)、佐藤(智)、石関、松尾 第 3 回：岩本、山下、遠藤、山田 第 4 回：畑中、池田（清） 第 5 回：片倉、丸尾、中川
子育て支援	原、二宮、清水、原口
こころと身体の看護相談	船越、田中、関口、角田
もの忘れ看護相談	秋定、坪井、石橋、蒲谷
まちの保健室運営委員会	神原、池田（清）、秋定、石関、角田、片山、原、丸尾、山田

※ 担当教員はボランティアに登録していない協賛ボランティアを含む

『健康支援』

健康支援は、予定通りすべての講座を開催することができた。以下、表 4 に今年度の開催状況および概要を記す。また、各活動の概要を以下に報告する。

表 3　2023 年度の『健康支援』開催状況

回	日程	テーマ	参加数（人）	ｽﾀｯﾌ数（ 人）※院生・学生含
1	6 月 16 日	防災の日常化～日頃からできる安心づくり～	11	2
2	9 月 15 日	やってみよう！心肺蘇生	10	4
3	11 月 2 日	生活体力を測ってみませんか？	43	24
4	2 月 9 日	「フットケアの日～歩ける足をいつまでも！～」講義「足のとっておきの話」･体験コーナー「足をみる/足をまもる/足をうごかす」	44	16
5	3 月 8 日	訪問看護 Part.7 はじめての在宅療養～介護保険制度をやさしく解説～	13	4
		合計	121	50

第 1 回：防災の日常化

全体のスケジュールは、参加者それぞれの自己紹介と参加目的、居住地域の特徴の共有（20 分）、神原講師による講義（60 分）、質疑応答（10 分）とした。参加者には、

配付資料に「いちかん減災セルフケアシート」を用意した。このシートは 10 ページ構成の小冊子で、東京大学の目黒公郎教授が考案した「目黒巻」を参考に、災害状況を想像する力（災害イマジネーション）を高め、災害を自分事として捉えられることを目的に、今回のまちの保健室に向けて作成した。内容は、マイタイムラインを記入できたり、「目黒巻」を部分的に作成できるワークシート部分と、神戸市の防災情報、避難所情報、ハザードマ ップを確認し、情報を整理できる部分とで構成した。当初は、まち保の時間内にこのセルフケアシートを記入することを予定していたが、参加者の居住地が西区から須磨区にかけて広範囲で、想定される災害リスクが様々だったため、グループワーク形式ではなく講義を中心とした構成に変更した。加えて、各自が自宅でセルフケアシートの作成に取り組めるよう、内容の説明を行った。

終了後のアンケートには、「自分を守らなければ他人は守れない」、「高齢者だけでなく、地域全体で防災に取り組んでいく必要があると改めて思った」などの記載が見られ、災害を自分事として捉え、地域の防災力を高める重要性が伝わっていた。また、参加者全員が「今回の内容を生活に取り入れられそう」と回答し、セルフケアを高める具体的な方策を考える機会になったことが窺えた。加えて、先述したセルフケアシートが参加者から大変好評で、知人、友人用にと数冊持って帰る方がおられたことから、まち保をきっかけに防災への取り組みが拡がることを期待したい。　（文責：神原咲子）

第 2 回：『やってみよう！心肺蘇生』

前日に 2 名のキャンセルがあり、10 名の参加での実施となった。講座開催にあたってはコロナ感染予防対策（不織布マスクの着用確認、受付での手指アルコール消毒、講座中の不用意な参加者の交差を避けるなど）のご協力依頼、場所におけるソーシャルディスタンス確保、換気を徹底した環境のもと実施した。

今回の講座は、心肺蘇生トレーニングツールあっぱくんライトとそれに関する DVD（G2020 準拠　たたかう！救急アニメ　救え！ボジョレー！！ Ver.5.0）を使用し、胸骨圧迫と AED の使い方を、短時間で効率よく学習することを目的に講義と演習を組み合わせて実施した。参加者は比較的高齢の方が多かったが、参加動機には心肺蘇生の講習を過去に受けたことがあるがその復習をしたい、突然意識を失って人が倒れる場面に遭遇した経験がある、心臓病を患うご家族と同居しているからなどが聞かれ、心肺蘇生のトレーニングを真剣に習得・再学習したいと、心肺蘇生法のスキル習得に意欲の高い方がばかりであった。講座の冒頭では、過去に突然死でなくなった野球少年やプロサッカー選手のメッセージビデオを流したが、若き尊い命が失われている現実に思いを馳せる様子も見られた。実際の胸骨圧迫では、適切な手技で行えている場合に圧迫くんライトから音が鳴るため、参加者は自分のスキル習得を確認することができ満足感に繋がっていたと思う。参加後にご回答いただいたアンケートには今回の教材を使用したことに対して、胸骨圧迫が正しく行えているかの確認ができ、また動画が多く用いられている DVD であり説明も内容も大変わかりやすかったという声が多く聞かれた。実技演習を含めた講座であったが、体調不良者が出ることもなく安全に終えることができた。　（文責：石関美津子）

第 3 回：生活体力を測ってみませんか？

本企画では、本学の教員や保健師選択課程の 4 年生が参加者の身体計測や体力測定を行い、測定結果をもとに各参加者へ健康づくりについてアドバイスを行った。参加者は血圧・脈拍測定と問診を受けた後ストレッチを行い、身長、体重、体組成、握力、足指力、長坐位、開眼（閉眼）片足立ちや 5m歩行（座位ステッピングテスト）を測定した。

終了後に参加者からは、「毎年測って体力の状態を確かめられてよいです」、「今までできていたことができなくなり、不安な日々でしたが、今日の測定で自分の体調が客観的に確認できて自信を取り戻すことができました」、「学生さんの若く明るい態度に身のひきしまる思いがしました」「今後の体力維持のため来年も受けたいです」など、企画に満足を得られた内容の意見が多数みられた。実施後のアンケートでも、本企画に対し約 8 割の方が「とても満足」あるいは「まあ満足」と答えたことから、参加者にとって満足できる内容であったと考えられるが、測定項目をもっと増やしてほしいといった意見も少数みられた。

（ 写真：血圧測定の様子）

今回の参加者は約 6 割が過去に本企画に参加経験のあるリピーターであることから、本企画の需要は本学周辺の地域で高いことがうかがえる。毎年体力測定を行い、自身の体力の経年変化を見ていくことが必要であるが、測定項目については、参加者のニーズを踏まえて、来年度の実施に向けて検討をしていきたい。

（文責：山田暢子）

第 4 回：足のとっておきの話

2 月 10 日の「フットの日」にちなみ、足のヘルスプロモーションを促進するため、「足のとっておきの話」をテーマに講義と演習を行った。構成は 2 部制で、前半は、「足のとっておきの話」の講義、後半は、体験コーナーで「足をみる」「足をまもる」「足をうごかす」の３つのグループに分かれて、スタッフによる講義と個別の足と靴のチェックを行った。最後に個別に相談を希望する方に残ってもらい相談を受けた。

参加者のアンケート結果（40 人）は、「とても満足」63%（25 人）、「まあ満足」20%（8 人）・「少し不満」「とても不満」5%（2 人：理由は時間が短い）、「無回答」12%（5 人）で概ね満足されていた。アンケートの自由記述より、「ケア方法を知りたい」「足のトラブルがあり受講した」「ずっといつまでも歩いていたい」「実際に足を見てもらえる・相談に乗ってもらえる」などが良かった理由であったことから満足の理由は個別であることが伺えた。実施については予想以上に各ブースで時間を要したため、最後の個別相談にほとんどの参加者が残る結果となったため、次回は時間配分を検討する必要がある。内容では「歩き方を教えてほしい」と希望される方が多いため、他の上記の項目とともに「歩き方講座」も一緒に展開していきたいと考える。

（文責：池田清子）

第 5 回：訪問看護 Part.7 はじめての在宅療養～介護保険制度をやさしく解説～

本講座では、片倉直子教授から、「病気になって身体が不自由になっても、どのような人が自宅で生活が続けられますか？」「自宅で療養するためにどのような準備が必要ですか？」「どのような制度がありますか？」「最後まで自宅で療養することはできますか？」といった問いに沿って、在宅療養に関する映像や介護保険に関する資料を用いて解説があり、その後に参加者と意見交換をした。意見交換では、講座の内容を受けて参加者の家族の経験について話や、かかりつけ医やケアマネジャーの探し方や自宅で介護保険サービスを利用するとどのくらいの金額がかかるのか、家族ができることは何か等のたくさんの質問が寄せられた。参加者からのアンケート結果からは本講座の満足度が高く、参加者の関心のあるテーマであったと考えられた。また、自由記載には、家族が在宅療養が必要になるので知りたかった、家族の介護の改善につなげたいと思った、一人暮らしなので介護のことを理解したいと思ったなどの感想や、今後も在宅療養に関する講座を続けてほしいという意見があったことから、在宅療養に関する関心や家族への介護に不安を抱いて生活されている方が多いと考えられた。今後益々増加すると予測される在宅療養について、次年度以降も継続してわかりやすく地域の方に伝えていく機会を作っていくことが必要と考えられた。　（文責：丸尾智実）

『子育て支援』

地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、子どもに関する相談を行うともに、参加した親子同士の交流が図れる機会を提供することを目的に 2006 年から年 6 回実施してきた。2020 年度からは新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に併せて、オンラインでの相談対応なども実施してきたが、今年度は前年度に引き続き、全て対面での子育て相談を行った。また、前年度から開催時間内であればいつでも参加してもらえる対応へと変更し、対応した。

今年度も利用者は少ない状況ではあるが、毎回継続して参加してくださるため、月齢に応じた子育て相談が行えたのではないかと考える。昨年度より、事前の予約を不要としたことも参加しやすい状況であると考えられるが、さらなる広報活動を検討し、保護者同士が出会える場として活用を促すことが必要と考える。タイムリーな開催情報や、参加しやすい広報活動について検討していきたい。

表 4　2023 年度の『子育て支援』活動状況

年	日程	活動	参加者数（予約数）
2023 年	5 月 10 日	対面での子育て相談 （コラボカフェ内）	1 組 2 人
	6 月 28 日	対面での子育て相談	2 組 3 人（1 人）
	9 月 13 日	対面での子育て相談	2 組 4 人
	11 月 15 日	対面での子育て相談	2 組 4 人
2024 年	2 月 14 日	対面での子育て相談	2 組 4 人
	3 月 6 日	対面での子育て相談	本学工事のため中止

（文責：原朱美）

『こころと身体の看護相談』

「こころと身体の看護相談（以下、看護相談）」は、心身に不調のある方とそのご家族が気軽に相談できる地域の場および精神看護専門看護師を目指す大学院生の教育の場として、2007 年 6 月より月 1 回（木曜日の午後・都合により曜日の変更有）、完全予約制の 1 回 12 人の相談枠で実施している。今年度より、新型コロナウイルス感染症の感染症の分類は 5 類に引き下げられたが、引き続き新型コロナウイルス感染症対策として、昨年度と同様に手指消毒への協力依頼と会場の換気、ソーシャルディスタンスの確保は継続して行った。

今年度の相談件数は 37 件、うち新規相談は 6 件、一旦終結していたが再開した相談は 5 件、継続の相談は 26 件であった。相談者の年代の内訳は 30 歳代が 4.5%、40 歳代が 11.4%、50 歳代が 15.9%、60 歳代が 6.8%、70 歳代が 61.4%であった。性別の内訳は男性が 27.9%、女性が 72.1%であった。

相談内容は自分の心身の悩みが最も多く、次いで家族の心身の悩み、家族関係の悩みが多くみられた。今年度は例年と比較して新規申込者の数が少なく、継続の割合が高かった。また、年代別では 70 歳代以上の相談者が最も多く、継続の割合も高いことから看護相談は社会との繋がりの場の 1 つとしての役割もあるのではないかと考えられる。一方で、10 歳代と 20 歳代の若年者からの相談は無く、周知方法の見直しも含めて検討することが求められる。悩みを抱えながらも日々の生活を送り、適切な支援へと繋がらない若年者への看護支援の在り方を再考していくことが必要であるとうかがえた。

表 5　2023 年度相談件数（37 件）の内訳

相談申し込み（件）			相談終結（件）	相談人数（延べ）
新規	再開	継続		
6	5	26	1	44

表 6　2023 年度相談者（44 件）の年代内訳

年代	10 歳代	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代
件数 （%）	0	0	2 （4.5）	5 （11.4）	7 （15.9）	3 （6.8）	27 （61.4）

表 7　2023 年度相談内容内訳　（複数回答）

相談内容	対人関係の悩み	家族関係の悩み	自分の心身の悩み	家族の心身の悩み	日常生活について	その他
件数 （%）	2 （5.1）	5 （12.8）	23 （59.0）	7 （17.9）	2 （5.1）	0 （0）

（文責：角田響介）

『もの忘れ看護相談』

「もの忘れ看護相談」は 2012 年 3 月より開設し、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう、知識の普及啓発のための 30 分間のミニ講義と希望者には教員が対応する個別相談を実施している。2023 年度の「もの忘れ看護相談」は、4 回開催し、参加者数は延べ 13 名であった。

表 8　「もの忘れ看護相談」開催概要

開催日	ミニ講義参加者数			運営人数			
	65 歳以上	65 歳未満	計	教員	ボランティア		計
5 月 18 日(木)	4　(3)	1 (0)	5 (3)	4	学部生 1	あんしんすこやかセンター職員 1	6
7 月 20 日(木)	3　(2)	0 (0)	3 (2)	4	－	あんしんすこやかセンター職員 2	6
9 月 28 日(木)	2 (1)	0 (0)	2 (1)	4	学部生 3	あんしんすこやかセンター職員 1	8
11 月 16 日(木)	2 (1)	1 (1)	3 (2)	4	学部生 1	あんしんすこやかセンター職員 2	7

ミニ講義では、「物や人の名前がすぐに出てこない」「物を置いた場所を忘れる」といった自身のもの忘れが気になりはじめた方に加え、そのご家族の参加も多く見られた。
個別相談では、延べ 8 名（6 組）の参加者のうち 75%が新規の相談者であった。主な相談内容は、生活のなかでもの忘れを自覚、あるいは他者から指摘されたことによるもの忘れに対する不安、認知症にならないために取り組めることを知りたいといった内容や、認知症の家族との接し方など多岐に渡っていた。また、神戸市の認知症診断助成制度を利用したが、結果に関わらずその後の生活に不安を感じる人が少なくないことがうかがえた。したがって、もの忘れ看

護相談は、次年度以降も地域の人々と家族がもの忘れと共に安心して生活するための１つの相談先としての役割が求められていることが伺えた。

今年度も、感染や熱中症予防に配慮しながら、開催時期を検討し年４回開催した。しかしながら、コロナ禍を経て、昨年度より参加者数が半減していた。年次経過としても、参加者数は徐々に減少しており、その理由の一つとして、近年それぞれの地域で認知症に関する様々な講義や事業が数多く展開されてきていることも考えられた。今後も状況や地域のニーズに合わせた内容を盛り込み、出前開催を実施するなど開催方法を工夫し、地域の人々にとってのもの忘れや認知症に関する相談が身近にできる場となるよう、活動を継続していきたいと考える。

（文責:秋定真有）

（３）トライやる・ウィーク

人間科学領域 自然科学分野 片山 修

1）概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校２年生が地域を学びの場に、体験を通して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人ひとりの興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動を５日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高め、自分なりの生き方を見つけることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

2）実績

2023年度トライやる・ウィークでは、本学において、6月に星陵台中学校および11月に太山寺中学からの受け入れを行った。受け入れ人数はそれぞれ3名（2年生）である。いずれも3日間の日程で実施された。

表９　星陵台中学校スケジュール

日程	内容
6月5日（月）	ガイダンス・キャリア支援室業務補助体験
	「在宅看護論」授業補助体験
6月6日（火）	図書館事務業務体験
	子育て支援事業「コラボカフェ」保育士業務補助
6月7日（水）	「コラボカフェ」イベント業務補助体験
	「コラボカフェ」イベントアンケート集計作業補助

体験者の感想：コラボカフェ業務補助より

- 保育士、保健師の先生方の話を聞いて、子育てや子どもを楽しませる工夫について学んだ。折紙による装飾作りもいい経験になった。明日のコラボカフェイベントも頑張りたい。

- コラボカフェの部屋が綺麗に彩られていて、先生方が工夫されているのが分かった。看護は医療だけでなく、子どもの気持ちも考えて向き合っていくことが大切だと思った。
- 保育士の先生方が声をかけて、優しく接していただいた。明日のコラボカフェイベントも頑張ります。

「在宅看護論」授業補助体験より

「コラボカフェ」イベント業務補助体験より

表10　太山寺中学校スケジュール

日程	内容
11月6日（月）	ガイダンス・事務局作業補助
	「在宅看護学実習」業務補助体験
11月7日（火）	子育て支援事業「コラボカフェ」保育士業務補助
	キャリア支援室業務補助体験
11月8日（水）	図書館事務業務体験
	「まちの保健室」生活体力測定アンケート集計作業補助

「在宅看護学実習」業務補助体験より

図書館事務業務体験より

体験者の感想：3日間の振り返りより

- 最終日でとても悲しい気持ちですが、緊張も解けたのでよかった。学食も美味しくて最高の大学だと思った。3日間どうもありがとうございました。
- 図書館はとてもキレイにされていて、冊数も多かった。本にフィルムを貼る作業はと

ても難しかった。図書館の方が時間をかけて、全部の本にそれをしていること考えると大変な作業だと感じた。この3日間、ここでしかできない経験をたくさんさせてもらって、とても良い機会になった。この経験を将来につなげたい。図書館がとても大きくて驚いた。アンケート集計はとても大変で疲れた。初めて食べた学食がとても美味しかった。3日間は大変だったが、もう終わってしまうと思うと寂しい。将来の参考にもなったので、本当にありがとうございました。

（４）　こうべ生涯学習カレッジ（コミスタ神戸）

専門基礎科学領域　健康科学分野　神谷訓康

神戸市内にある 12 大学による大学連携セミナーとして、各校の教員の様々な専門分野を生かした講義を「こうべ生涯学習カレッジ」として提供しており、本学も 2012 年から参加している。

今年度は、2024 年 2 月 9 日（金）13:30～15:00 に「予防医学の視点」をテーマに講義を行った。参加者は 60 名程度であった。講義の冒頭、公衆衛生学の特徴を紹介した。臨床医学では、患者さん個人を対象に診断と治療が行われる。一方、予防医学を担う公衆衛生学では、健康な人を含むすべての人を対象に、集団レベルで予防が行われる。病気になる人を減らすためには、臨床医学だけでなく公衆衛生学の視点も重要で、住民全員で健康づくりをする意識が重要であることをお伝えした。次に、フレイルが注目された背景として、病気が無いことと同等かそれ以上に､体力レベル高いことが重要であることをお伝えした。個人の生活習慣に加え、地域全体での健康づくりの重要性について再認識していただけたようであった。

（５）　UNITY 講座

看護管理学分野　花井理紗

神戸研究学園都市大学交流促進協議会（UNITY）の公開講座は、市民の生涯教育を振興するとともに、加盟校の最新の研究成果を市民に還元することを目的として、1999 年度から毎年、各校 1 講座（5 回シリーズ）ずつ企画・開催している。最終年となった 2023 年度の本学の担当領域は、基盤看護学であった。

以下、概要を報告する。

1）講座テーマ

講座テーマは、「自分を守る、周りの人を守る　～セルフケアから防災まで～」とし、自分と周りの人の生活を慈しむために活用できるいくつかの概念を、4 名の教員が分かりやすく解説した。

2）開催概要

表 11　UNITY 講座開催概要

	日時	講座名	担当教員
第 1 回	11/18（土）	マインドフルネス（前半） 自分をケアするこころのトレーニング	助教　新澤 由佳
第 2 回	11/25（土）	マインドフルネス（後半） 自分をケアするこころのトレーニング	
第 3 回	12/2（土）	睡眠を整える ～眠る門には福来たる！？～	神戸常磐大学 特任教授　柴田しおり
第 4 回	12/9（土）	アサーション ～自分と相手を大切にする自己表現～	助教　花井 理紗
第 5 回	12/16（土）	地域防災に参加しよう	教授　神原 咲子

3）受講者の反応

UNITY が実施したアンケートの結果には、受講者の声として「看護大学ということもあってか、身近なテーマで大変良かった」、「マインドフルネスが実践的でわかりやすく非常に良かった」、「防災のことは忘れがち後回しがちですが、今回話を聞けて良かった」、「今回のような自分や周りの人の心の中でケアやストレスとの向き合い方などもっと勉強してみたい」などの記載が見られた。

（６）　もの忘れ看護電話相談・もの忘れ看護相談オンラインミニ講義

『もの忘れ看護電話相談』

老年看護学分野：坪井桂子、石橋信江、秋定真有、蒲谷苑子

「もの忘れ看護電話相談」は、認知症患者およびその家族が社会から孤立することなく、安心して自宅での生活を継続できることを目指し、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、2020 年度から新たに取り組みを開始した活動である。2023 年度の「もの忘れ看護電話相談」は、2 ヶ月に 1 回の相談日を設定し、1 人 20 分の事前予約制として広報した。しかし、相談者は 0 名であった。

相談件数が少なかった背景として、新型コロナウイルス感染症が 5 類になり、人々が、これまで通り、活動できるようになったことが大きいと考えられる。ただ、昨年までの相談者のニーズを考えると、いろいろな手段で相談できるということに意味はあるため、相談の場として、次年度も継続していく予定である。

『もの忘れ看護相談オンラインミニ講義』

老年看護学分野：坪井桂子、石橋信江、秋定真有、蒲谷苑子
いちかんダイバーシティ看護開発センター：水川真理子

「もの忘れ看護相談オンラインミニ講義」は、新型コロナウイルス感染症の流行による外出自粛が続く中で、もの忘れや認知症に不安がある人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるように 2021 年 3 月に開始した活動である。2023 年度の「もの忘れ看護相談オンラインミニ講義」は下記日程で 14 時～14 時 45 分に開催した（表 2)。30 分間のミニ講義後に、質疑応答や参加者同士の交流の時間を設け、実施した。2023 年度の「もの忘れ看護相談」は、参加者数は延べ 21 名であった。

表 12　『もの忘れ看護相談オンラインミニ講義』テーマおよび参加者数

開催日	テーマ	参加者数		
		70 歳以上	70 歳未満	計
6／28（水）	最期まで自分らしく生きるために今から始めること	8	3	11
7／26（水）	認知症予防の考え方と生活上のひと工夫	2	2	4
10／20（金）	認知症にやさしいまちに暮らすこと やさしいまちづくりの実際	2	2	4
12／1（金）	自分や家族のもの忘れとうまくつき合うためにできること	2	1	3

アンケート結果から、オンラインを活用して実施した講義は、感染拡大の中でも安心して参加できることに加え、移動時間が短縮できるなど気軽に参加できる利点が示されていた。また、参加者は本講義にもの忘れや認知症に関する知識や最新の情報の習得のみならず、オンライン上で参加者同士の交流や意見交換の機会を求めており、参加者同士の意見交換により有益な情報が得られたという意見もあった。

新型コロナウイルス感染症が 5 類になり、人々が、これまで通り、活動できるようになった中、参加者は、この数年、ほぼ決まったメンバーとなっており、認知症に関するテーマについても、ほぼ網羅しており、一定の役割を果たしたと考える。そのため、次年度以降は、ミニ講義という形ではなく、個別相談という形で、電話相談と併せて実施していく予定である。

（７）神戸市フレイルサポーターによるフレイルチェック事業

公衆衛生看護学分野　岩本里織、山下正、遠藤真澄、山田暢子

1）概要

本事業は、神戸市（公益財団法人こうべ市民福祉振興協会に委託）がフレイルサポーター（市民）を育成し、フレイルサポーターが地域の中でフレイルのリスクがある高齢者を把握し、早期に予防活動を支援することにより、将来的に要介護状態に陥ることを予防する目的で開催している。 本学では、公衆衛生看護学分野が共同で開催しており、保健師課程４年生が参加することで、「a. 地域住民の介護予防事業において、保健師による介護予防の事業・施策の立案、実施における関係機関との連携や調整、評価の役割を学ぶ」、「b. フレイル事業に参加・協働し、住民の主体的介護予防実施について学び、住民の主体的活動の推進のために保健師がどのような役割を担うかを考える」、「c. フレイル事業に参加した地域住民に対して、介護予防に関する相談を実施できる」の３点を目的としている。

2）実績

2023 年 12 月 7 日、神戸市介護保険課、こうべ市民福祉振興協会、神戸市フレイルサポーターとの共催により開催した。昨年度までは新型コロナウイルスの影響を受け、参加者が例年の約半数と減少していたが、今年度は 22 名と多くの神戸市民にご参加いただき、学生も多くの経験を得た。

内容は、フレイル予防の講話、自己簡易チェック（サルコペニアの簡易指標である指輪っかテスト、栄養・運動・口腔・社会性・こころのチェック）、深堀チェック（口腔・運動・社会参加のフレイルチェック）等である。

実施後のアンケートでは、本企画に対しては参加者の 90.9%（20 人/22 人）、学生の態度や声かけに対しては参加者の 95.5%（21 人/22 人）が「とても満足」あるいは「まあ満足」と答えており、参加者にとって満足できる内容であったと考えられる。

3）教育上の効果

学生は、事前に神戸市介護保険課の保健師より講義を受け、神戸市の高齢者を取り巻く現状と課題、介護予防事業・施策の立案、関係機関との連携や調整、効果検証等の保健師の役割について学んだ。

当日、学生は、フレイルサポーターとともに参加者の健康測定やフレイルチェック項目のサポート等に参加し、フレイルサポーターが参加者へ丁寧に声をかけて関わっている姿を見て、参加者に寄り添う姿勢や、前向きな声かけの仕方を学んでいた。また、健康相談では、実習等で培った看護の知識を十分に活かしながら、参加者の健康状態や生活状況を踏まえ、自信を持って実践することができた。そのため、参加者の満足度が高い結果となった。

また、学生は保健師として、事前の計画から当日の実施、評価までの一連の過程を通じて、フレイルサポーター個々の専門性や経験を尊重しながら主体的な活動を促し、フレイルサポーターを組織として支援する方法についても学ぶことができた。さらに、学生は、

フレイルサポーターが地域で健康づくりの担い手として役割を持って活動することが、自らの健康や生きがいにつながっていることも学び、事業の必要性を多角的に理解することにつながった。

（８）プレパパプレママセミナー

ウィメンズヘルス看護学助産学分野　高田昌代　井上理絵　池田智子
蚊口理恵　林　由紀　田中美紗

1）概要

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環として毎年実施している。セミナーの目的は、神戸市の地域住民（妊婦とそのパートナー）が、妊娠期から子育て期を見越したセルフケア力獲得に向けて意識を高められるような、集団教育の実践的技術を助産学実践コースの学生が習得することである。

2）実績

今年度は第 1 回目を 2023 年 9 月 2 日（土）、第 2 回目を 2024 年 2 月 17 日（土）に開催した。第 1 回目のテーマは『“つなぐ”～妊娠中の今、できること～』として、大学院 2 年生が中心となり、大学院 1 年生、学部学生とともに実施した。開催当日は、新型コロナウイルス感染症防止対策を徹底した上で対面開催とした。16 組の参加者からは「コロナの影響でこういうセミナーがなく、やっと参加できてよかった」「内容もわかりやすくて食事や運動を取り入れていこうと思った」「参加したくても定員オーバーで受けられない人も多いだろうから回数を増やしていろんな方に参加してほしいと思った」などの意見が寄せられ、コロナ禍における妊婦への出産・育児準備教育の場として活用いただいた。第 2 回目のテーマは「赤ちゃんとのつながりと、身体の変化を感じる」として、大学院 1 年生が中心となり開催した。16 組の参加があり、参加者からは、「夫と一緒に児心音を聞くことができ、赤ちゃんがおなかにいることを実感できた」と概ね好評であった。

3）教育上の効果

各セミナーの目的・目標、テーマについては、院生が授業で学んだ健康教育の手法と、助産学実習で妊産褥婦の援助を通じて考えたことである。特に妊婦の求めるニーズは何かに焦点を当て内容を熟考した。そのため、院生同士で意見交換を十分に行い、一貫性のある内容に構成することで、全員が同じ方向を向いて実践・評価まで行うことができ、集団教育の実践的技術を習得することにつながった。

（９）命の出前講座

ウィメンズヘルス看護学分野　井上理絵

1）概要

命の出前講座は、思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動として始まっており、大学院助産学実践コースの学生が「思春期健康教育論」の授業の一環として毎年実施している。対象者は小寺小学校 4 年生、5 年生の児童である。

2）活動内容

①４年生への健康教育

a）実施日　2023 年 10 月 19 日

b）対　象　4 年生 61 人

c）内　容

個人差があることを前提に、二次性徴の仕組みを知り、自分のからだを大切に思うことができることを目標に授業計画を立て実施した。大学院 2 年生が中心となり、大学院１年生、学部生も一緒となって取り組んだ。まず、クイズで授業に参加しやすい雰囲気を作ったのち､体の成長や男女の体に変化について大学院２年生が講義形式で話をした。その後、月経時の対応について、ナプキンの当て方などを小グループにわかれて演習を行った。小学生たちは、大学生が話すことで体の変化をより身近に感じている様子が伺えた。特に女子からはナプキンを当てる演習について「最初は難しそうと思ったけれどやってみたらいがいに簡単で楽しかった」という感想があり、月経に対する準備となる授業になった。男子は「大人になるにつれて体が変化することが知れた」という感想があり、自分たちの変化を自覚するきっかけとなった。

②５年生への健康教育

a）実施日　2023 年 10 月 26 日

b）対　象　5 年生 67 人

c）内　容

二次性徴を経験する、または、していることを通じて、人として変化する自分や他の人の身体や命の大切さを考える機会をもつことを目的に、生命誕生や命について考える授業を実施した。最初に担当教員が子宮内での胎児の発育について話しを行い、その後、大学院１，２年生による分娩の劇を実施した。分娩が 10 時間以上かかることに小学生は驚き、自分たちが長い時間かかってお腹の中で成長したことについて「すごい」と話していた。授業後の感想には、「お母さんも赤ちゃんも頑張っている」「お母さんに感謝しようと思った」など感謝の気持ちを表現していた。

3）活動の成果

小学生は、大学院生が授業を行うことで楽しんで受講することができ、性や成長に対する肯定的な捉えの一助になった。また、大学院生は、小学生の授業を立案・実施することで対象理解の重要性が鮮明となり、対象に応じた授業方法の工夫ができていた。

4）今後の課題

小学生４，５年生に向けた命の授業は、自分の成長・変化について知る重要な授業である。今後も引き続きわかりやすい授業展開を考えたい。また、成長に影響を及ぼす日常生活についても考えていきたい。

（１０）竹の台ふれあいまつり

ウィメンズヘルス看護学助産学分野　高田昌代　井上理絵　池田智子
蚊口理恵　林　由紀　田中美紗

1）概要

竹の台ふれあいまつりとは、地域住民の一体化を願って住民主体で開催されているお祭りである。ウィメンズヘルス看護学分野では大学院生・学部生が、健康に関する出し物を考え、地域住民の方を対象に健康支援を行っている。目的は、地域の様々な世代の方と触れ合うことで、世代に応じた健康課題を習得することである。また、妊娠出産だけでなく、女性の一生の健康課題や家族を含めた健康課題について地域住民の方と触れ合いながら学びを深めることである。

2)実績

今年度は 2023 年 11 月 2 日（土）に開催され、大学院 2 年生 5 名、学部生 6 名が中心となり、「体組成計による骨密度測定」「血圧測定」「妊婦ジャケット体験」「赤ちゃん人形の抱っこ体験」を行った。神戸市看護大学のコーナーに参加された方は約 80 名で、大部分の方が体組成計による骨密度測定を希望された。測定値が低値の場合は、食事内容の見直しや日常生活で運動を取り入れることなど、学生による健康教育を行った。参加者からは、「骨密度を測定することがなかったので、測定し値が正常で安心した」などの感想をいただき好評であった。

3）教育上の効果

参加者は高齢の男性も多かったので、学生は、女性の健康だけでなく家族を含めた健康教育が大切だと学ぶことができた。また、実際に触れあうことで、地域で生活をしている人の健康課題に目を向けることができ、個別の健康教育も実践できたため、個人のニーズを踏まえた思考と実践力を培うことができた。

４．教育ボランティアとのコラボ教育

在宅看護学分野　丸尾智実

（１）教育ボランティア登録状況

毎年 4 月に、前年度の教育ボランティアとして登録していただいた方に教育ボランティア継続の意思確認をおこなっている。2023 年の教育ボランティア登録者は 71 人であった。

（２）教育ボランティア導入授業

2023 年度に実施した教育ボランティア導入授業は、1 年生科目では「多職種連携I」、2 年生科目では「フィジカルアセスメント」「老年健康生活支援論」「慢性看護論」、3 年生科目では「災害看護論I」「健康学習論」「在宅看護論」、そして、神戸市西区 15 地区、須磨区 5 地区で実施している 1・2 年生が同時におこなう「地元創成看護学実習Ia」「地元創成看護学実習II」（これらの実習科目は、各地区で学生の教育を担っていただくことから、実習ボランティアとして教育ボランティアとは別に登録をしていただいている）の合計 9 科目であった。

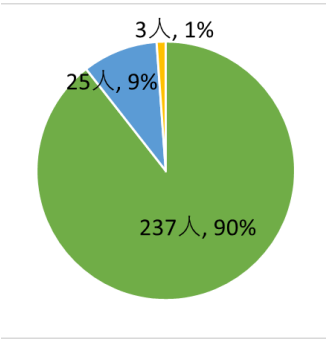
（３）教育ボランティア導入授業の学生評価

法人中期計画の中で、「教育ボランティアの方々との連携をさらに強化し、学生と地域住民とのコラボ教育を推進する」ことを掲げていることから、202 年度から教育ボランティア導入授業を受けた学生による「コラボ教育学生評価」を実施し、教育ボランティアニュースレター等でその結果を報告している。

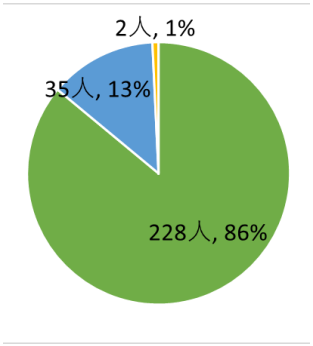
2023 年度は、実習ボランティアを除く 7 科目、延べ 265 人の学生が回答した結果を以下の通りまとめて報告する。

※ 円グラフの凡例
黄緑：「とてもそう思う」と回答した者
青　：「まあまあそう思う」と回答した者
黄　：「あまりそう思わない」と回答した者
緑　：「全くそう思わない」と回答した者

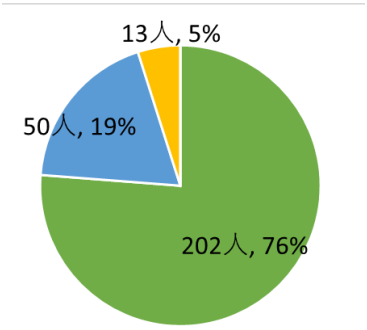
【設問 1】
教育ボランティアさんが授業に参加されることで、いつもよりことば使いや態度に気を付けましたか



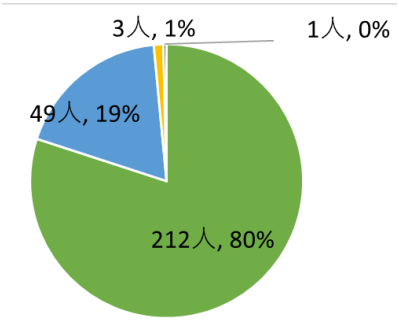
【設問 2】
教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
いつもより良い意味で緊張して授業に臨めましたか



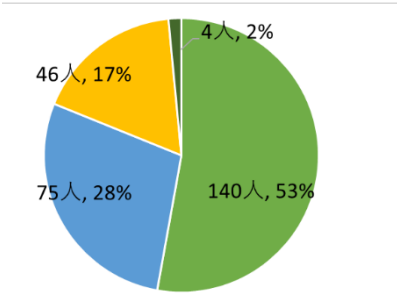
【設問 3】
教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
地域で生活する人々の理解がより深まりましたか



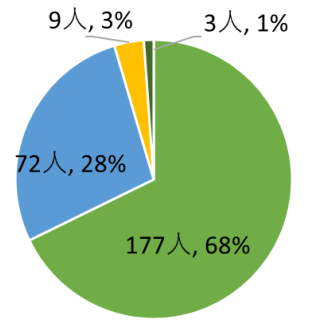
【設問 4】
教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
看護を提供する人々をケアする際に心がけることに
ついての理解が深まりましたか



【設問 5】
教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
大学や自宅近隣における地域のイベントに
参加してみようという気持ちが膨らみましたか



【設問 6】
教育ボランティアさんの講演や意見、感想によって、
看護職を目指すモチベーションがあがりましたか

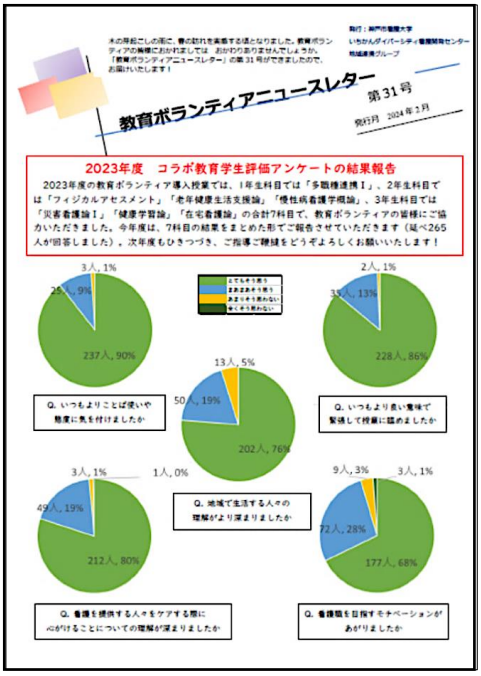


（４）教育ボランティア交流会

2024 年 2 月 29 日（木）13 時 30 分から 15 時 30 分まで、「2023 年度教育ボランティア交流会」を本学ホールで実施した。教育ボランティア 24 人、実習ボランティア 14 人、教職員 36 人、学生 3 人の計 75 人が参加した。

2023 年度に教育ボランティア導入授業を実施した健康学習論、災害看護論Iの担当教員より授業の概要と学生の学びについて報告した後、2、3、4 年生の学生が、教育ボランティア導入授業の学びについて発表した。また、地域連携グループ長より 2022 年度に実施した教育ボランティアアンケートの結果から、多くの教育ボランティアが本学のボランティア活動によって達成感を得ていることやボランティア経験が非常に有意義であったと回答していたことが報告された。さらに、神谷訓康准教授が「体力が重要視される理由を知っていますか？～予防医学の視点から～」のミニ講演を行った。その後の質疑応答では、教育ボランティアより、学生との関わりが自身の健康に良い影響を与えていることや講演内容である動くことの重要性を再認識したこと等が述べられた。

写真：ボランティア交流会の様子



（５）教育ボランティアニュースレター

毎年、教育ボランティアの方々に関連した話題を掲載した、教育ボランティアニュースレターを不定期で発行している。2023 年度は 2024 年の 2 月と 3 月に、第 31 号と第 32 号の計 2 回発行した。内容は、第 31 号では学生によるコラボ教育学生評価アンケートの結果を抜粋したものを、第 32 号では教育ボランティア交流会の開催概要とした。

Ⅱ　健康支援グループ

いちかんダイバーシティ看護開発センター　　水川 真理子
公衆衛生看護学分野　　岩本 里織

１．グループの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの健康支援グループは、2021 年度に神戸市からの委託を受け、「オンライン健康相談(看護相談)」事業と「オンラインナーシングによる慢性疾患重症化予防」事業を担いプログラムやシステムの開発と展開を行った。委託期間を終えた 2023 年度からは大学の事業として、オンラインを活用した看護を継続している。

コロナ禍において、地域住民は、受診や健康診断、訪問・通所サービスなどを控える傾向があり、慢性疾患の重症化や、介護負担の増加、子育て期の母親のストレスの増加などさまざまな健康課題を抱えていた。本学は、コロナ禍における地域貢献活動として、2020 年度に、オンライン保育やオンラインもの忘れ看護相談などを開催し、ICT を用いた看護の展開をいち早く取り入れてきた。2021 年度からは、神戸市の委託事業の一環として、ICT を用いた看護を開発・展開し、2023 年度からは、大学の事業として活動を継続している。ポストコロナの時代においても医療アクセスの改善手法である遠隔医療の普及や発展は欠かせない。デジタル化社会の中で看護が果たせる役割を明らかにするために、オンラインを活用した看護技術の開発と展開を行いその効果を検証する。

２．オンライン健康相談(看護相談)班メンバー

リーダー　　岩本里織
メンバー　　坪井桂子、林千冬、井上理絵、片山修、小山富美子、磯濱亜矢子、畑中あかね、水川真理子、山下正、遠藤真澄、関口瑛里、山田暢子、宮島朝子、勝田玲子

３．オンライン健康相談（看護相談）の実績

（１）事業概要

2020 年 2 月頃からの新型コロナウイルス感染症(以下、コロナ)の大流行により、人々は医療機関・介護施設への通院・通所を控えたり、健康支援・地域連携活動、医療講演会や患者同士の情報交換・経験交流を行う患者の会、子育て支援サークルなど、地域福祉において重要な役割を担っていた活動が困難となり、病状の重症化や要介護度の重度化、漠然とした不安の増大、コミュニケーション不足による孤立化など、健康リスクの増大が生じ

た。2023 年 5 月にはコロナは 5 類感染症に移行し、人々の生活はコロナ前に戻ってきているが、コロナ禍で制限された生活様式による健康への影響は遷延したり、遅延して発現したりすることも予測される。

コロナの流行によって、人々の ICT（情報通信技術）の利用状況は増大し、オンラインによる医療機関の診療などが行われたり、オンライン会議の開催など多様な場面において、ICT が活用されるようになってきた。スマートフォンの所有率は 79.7%（令和 2 年通信利用動向調査／世帯構成員層、総務省）であり、これは 13 歳から 50 歳代は 90%以上であるが、60 歳代 79.5%、70 歳代 48.4%である。一方、インターネットの利用率も 83.4%であり（「令和 3 年版情報通信白書」(総務省))、13 歳から 50 歳代では 90%以上、60 歳代 82.7%、70 歳代 59.6%である。このように多様な世代が、ICT の活用をしている。

以上のような、市民のコロナの影響による健康リスクの増大に対応するために、オンラインを活用して自宅に居ながらでも気軽に健康に関して看護専門家に相談できるオンライン健康（看護）相談を、2021 年度から開設し、2024 年 3 月まで継続実施している。本事業は、オンライン掲示板による相談システムを開発・運用し、市民への相談に応えるとともに、神戸市民の健康相談へのニーズを把握し、看護相談システムの評価を行うことを目的としている。健康支援グループのオンライン看護相談班の看護教員が、健康に関する悩みや不安などの相談に応じることで、疾病予防や、子育て、介護の負担感の軽減につながると考える。

（２）2023 年度の主な活動

2023 年度には、2021 年度に構築したオンライン健康(相談)の周知の拡大を目指して活動した。学内の地域住民向けイベントや、西区・須磨区実習ボランティアの方へのチラシ配布などを行った。

また、KOBE スマートシティ推進コンソーシアムに参画し、神戸市のスマートシティ事業「kobe Sports & Well-being City Project（asics、NTT 西日本、神戸新聞社、神戸みなと温泉、神戸学院大学)」と連携を行い、事業参加者（20～40 代女性）100 人に看護相談を紹介して利用促進を行った。その後も神戸市の企画調整局調整課スマートシティ担当者と神戸市の政策課題に関する情報交換と検討を行っている。

参考：オンライン看護相談のチラシ

（３）相談実績

１）相談実績

2021 年 12 月から健康相談（看護相談）を実施している。2023 年 4 月から 2024 年 3 月までの相談実績を表 1 に示す。

表 1　令和 5（2023）年度オンライン健康相談（看護相談）実績

相談受付日	新　規			終　了		継　続　中	
	新規登録	相談者数	相談件数	終了者数	終了件数	継続者数	継続件数
4月	3	4	4	4	4	11	13
5 月	0	0	0	0	0	11	13
6 月	0	1	1	1	1	11	13
7月	1	1	1	8	8	5	6
8月	0	0	0	0	0	5	6
9月	0	0	0	2	3	3	3
10月	3	3	3	2	2	4	4
11月	5	6	6	4	4	6	6
12月	0	1	1	0	0	7	7
1月	2	2	2	0	0	9	9
2月	0	0	0	0	0	9	9
3月	0	0	0	1	1	9	9

２）相談者の概要

相談者の概要を表 2 に示す。2023 年 4 月から 2024 年 3 月までの相談者の総数は 15 人であった。相談者の性別は、女性が 14 人（93.3%）、男性が 1 人（6.71%）と、2023 年度は女性が圧倒的に多かった。2023 年度の相談者の年代は、20 歳代が 5 人（33.3%）と最も多く、次いで 60 歳代 3 人（20.0%）、30 歳代、40 歳代、70 歳代がそれぞれ 2 人（13.3%）で、2022 年度までに比べて若い世代の相談が増える傾向にあった。居住地別では大学が所在する西区が 4 人（26.7%）と最も多く、次いで灘区が 3 人（20.0%）で、神戸市以外からの相談者が 2 人（13.3%）含まれていた。

表 2　相談者の概要

相談者の性別

性別	2021年度		2022年度		2023年度	
	人	%	人	%	人	%
男性	5	45.5	5	31.3	1	6.7
女性	6	54.5	11	68.8	14	93.3
計	11	100.0	16	100.0	15	100.0

相談者の年代

年代	2021年度		2022年度		2023年度	
	人	%	人	%	人	%
70－79歳	0	0.0	2	12.5	2	13.3
60－69歳	1	9.1	4	25.0	3	20.1
50－59歳	4	36.3	3	18.8	1	6.7
40－49歳	2	18.2	4	25.0	2	13.3
30－39歳	2	18.2	2	12.5	2	13.3
20－29歳	1	9.1	1	6.2	5	33.3
20歳未満	1	9.1	0	0.0	0	0.0
計	11	100.0	16	100.0	15	100.0

相談者の居住地

地区	2021年度		2022年度		2023年度	
	人	%	人	%	人	%
西区	4	36.4	5	31.2	4	26.7
東灘区	3	27.2	5	31.2	1	6.7
長田区	0	0.0	1	6.3	1	6.7
中央区	1	9.1	2	12.4	1	6.7
垂水区	1	9.1	0	0.0	1	6.7
兵庫区	1	9.1	1	6.3	0	0.0
須磨区	0	0.0	1	6.3	2	13.3
灘区	0	0.0	1	6.3	3	19.9
その他	1	9.1	0	0.0	2	13.3
計	11	100.0	16	100.0	15	100.0

３）相談内容

相談内容を表 3 に示す。相談内容は、「病気や受診などに関する相談」が 11 人（57.9%）と最も多く、次いで「健康づくりや健康に関する相談」が 3 人（15.8%）、であった。

相談内容をみると、医療機関への受診に関する相談が最も多く、症状があるが医療機関を受診した方が良いか、受診するなら何科が良いか」という相談の他に、すでに医療機関

に受診しているが、服用中の薬の副作用と思われる症状が出現していることに対し、その対応や医療機関の受診の必要性について判断を求める相談がみられた。また、さまざまな症状が見られたために複数の医療機関を受診したが、いずれも異常がないといわれた事に対し、どのように対応したらよいか知りたいという相談もみられた。一方で、メンタルヘルスに関する相談や介護・認知症に関する相談は減少傾向にあった。

表 3　相談内容

相談内容

相談内容	2021年度		2022年度		2023年度	
	件	%	件	%	件	%
病気や受診などに関する相談	6	42.9	11	50.0	11	57.9
健康づくりや健康に関する相談	4	28.6	6	27.3	3	15.8
こころの悩みに関する相談	2	14.3	3	13.6	2	10.5
介護予防・介護・認知症などに関する相談	0	0.0	1	4.5	0	0.0
子育てや妊娠などに関する相談	0	0.0	1	4.5	2	10.5
感染症（新型コロナ/海外渡航関連感染症）	2	14.3	0	0.0	1	5.3
計	14	100.0	22	100.0	19	100.0

（４）相談者のアンケート結果

相談者 15 人のうち、アンケートに回答したのは 4 人（26.7%）と少数であった。オンライン看護相談について知った理由は、インターネット検索が 2 人(50.0%)、ちらし、その他がそれぞれ 1 人（25.0%）であった。その他の 1 人は、令和 4 年の西区制 40 周年記念事業の際に、本学が出したオンライン健康相談のブースで紹介を受けたことがきっかけとなり相談をしていた。

オンライン相談を利用した動機は(複数回答式)、「オンラインで気軽に相談できるから」「匿人で相談できるから」、「看護大学が実施しているから信頼できるから」「無料だから」がそれぞれ 3 人（75.0%）、「他に相談できるところがなかった」が 2 人（50.0%）であった。利用者は、オンラインで気軽に相談できるという利便性を感じていること、匿人性や無料であることが相談につながっているようである。看護大学が実施していることが理由になっている者も多く信頼が得られているといえよう。

相談により課題解決や示唆が得られたかについての問いは、全員ができたと回答していた。また、オンライン健康相談を再度利用する可能性、オンライン看護相談の回答者の対応、オンライン健康相談を友人・同僚に勧める可能性についても、4 人全員があると回答していた。

オンライン看護相談に対する満足度（10 段階）は、最も高い「10」が 3 人（75.0%）、「8」が 1 人（25.0%）で、非常に満足度が高かった。

以上の結果より、オンライン看護相談を活用した者にとって、相談者のニーズにあった回答ができており、課題の解決につながる満足度の高い相談ができていたと考える。

（５）まとめと今後の展望

2021 年 12 月から 2024 年 3 月現在、オンライン看護相談を継続実施している。2023 年度の利用者数は前年度と比べても横ばいであった。チラシの配布、スマートシティ神戸と連携した PR を行ったが、今年度の相談者数の伸びはみられなかった。今年度は若年層の女性の相談が増えたのは、スマートシティと連携した事業の参加者が 20～40 代の女性であったことと関連している可能性がある。大規模にチラシを配布した後など PR 後には相談がみられているため、今後も広報の拡大を行い、相談したくても相談先が分からないといった声に届くような工夫が必要である。

オンライン看護相談の利用者については、非常に高い満足感が得られていると考えられる。一度相談をされた方は、何度も相談を繰り返される方も複数おられ、健康に関するちょっとした悩みを気軽に相談できる場として活用していただいているようである。

オンラインの相談の場の意義としては、市民がちょっとしたことだが気になっている健康の疑問を相談し早期の受診に繋がっていること、あるいは疑問を相談し回答により解決している場合もある。
また医療を既に受けているがそれを補佐する情報を得たいと思い相談している場合もある。
いずれにしても、市民の健康の保持増進や、疾病の早期発見などに繋がっていると考えられる。

オンライン相談の場としての有効性は高いものの、課題としては、相談数の少なさである。今後、ターゲットとする層は 20-60 歳代と考えられ、その年代にアクセスできる方法を検討していきたい。また、匿人で無料、オンラインで活用できる本相談は、医療や保健へのアクセスが難しい層（例えば、無職者、自営業者、フリーターなど）が、相談しやすい場ともいえると考える。そのような方々へオンライン看護相談に関する情報が行き届く方策を検討していきたい。

今後のオンライン看護相談の発展としては、市民がより簡易に相談ができる場として、周知していくこと、さらに、オンライン看護相談の相談者として、本学の大学院生(看護師免許を取得している)などの学習の機会として活用していくことを検討していきたい。

３．慢性疾患重症化予防オンラインナーシング班メンバー

リーダー　　水川真理子

メンバー　　片倉直子、谷知子、石橋信江、磯濱亜矢子、畑中あかね、宮島朝子、勝田玲子

４．慢性疾患重症化予防オンラインナーシングの実績

健康支援グループのオンライン慢性疾患重症化予防班の医師、看護教員は、医療機関と連携し、コロナ禍で通院を控える傾向のある心不全患者など重症化リスクの高い慢性疾患患者を対象として、医師と看護師がオンラインで患者の症状および血圧・脈拍などの健康状態を把握し、異常の早期発見、必要時に健康指導などを行うことで、重症化予防につながるプログラムの開発と展開を行っている。本取り組みにより、慢性疾患患者の重症化予防に向けた「オンライン看護」のモデルが構築されることを目指している。本取り組みは、2021～2022 年度は神戸市の委託事業（「コロナ禍を契機とした健康問題の増加への先行的対策事業」）の中の慢性疾患患者の重症化予防に向けた「オンライン看護」のモデル構築事業として展開を行い、2023 年度からは大学の事業として継続している。

（１）オンライン慢性疾患重症化予防疾病管理プログラムの概要

慢性心不全や糖尿病など重症化リスクの高い慢性疾患を有し、神戸市内の医療機関に通院中の方を対象として、遠隔モニタリングで看護大学の医療職者が対象者の症状および血圧・脈拍などの健康状態を把握し異常時に状態確認を行う。必要に応じて主治医に報告し早期受診につなげ、オンラインで生活上の指導を実施して慢性疾患患者の重症化を予防する(図 1)。介入 6 ヶ月とフォローアップ 6 ヶ月の 12 ヵ月間のプログラムである（図 2)。

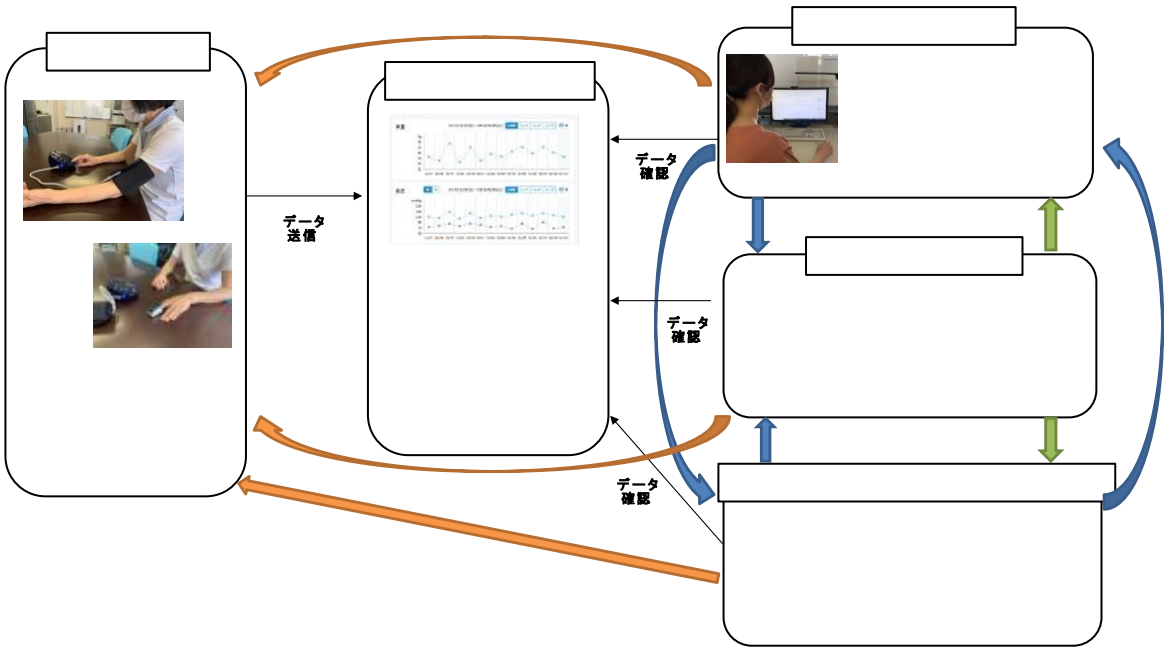


図 1　ICT を活用した慢性疾患重症化予防疾病管理プログラムの概要

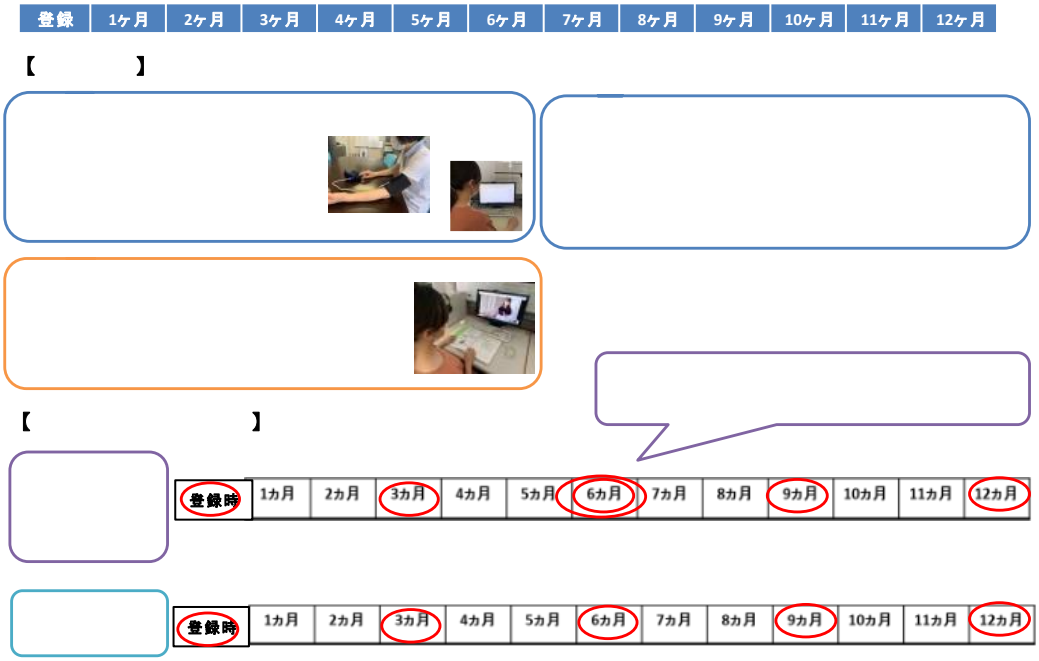


図 2　ICT を活用した慢性疾患重症化予防疾病管理プログラムの内容

（２）活動経過とリクルート状況

2022 年 4 月より、プログラム協力医療機関の募集・説明会を行い、2 つの診療所と 2 つ訪問看護ステーションより協力が得られた。2022 年 7 月から患者リクルートを開始し、医療機関より、慢性心不全の重症化予防プログラムの適格基準を満たす対象者を 10 人紹介頂き、2023 年 3 月末までに慢性心不全患者 7 人より参加同意が得られたが、その内 1 人が参加を辞退された。

（３）プログラム参加者背景

プログラム参加者の平均年齢は 84.5±4.5 歳で、男性 4 名、女性 2 名で、心不全の基礎疾患としては、心臓弁膜症 2 名、心房細動 2 名、心筋梗塞 1 名、高血圧 1 名であった。高齢者で多疾患を有する方が多くを占めている。要介護認定は 4 名が受けており、区分は要支援 2 が 2 名、要介護 2 が 2 名であった。また、プログラム導入時に 2 名が訪問看護を受けており、プログラムの途中で 1 名の訪問看護が開始された。

（４）プログラムにおけるオンライン看護実践と多職種連携の実際

2024 年 3 月末までに、6 人全員が 12 ヶ月のプログラム期間を終えた。プログラム登録時に、病歴とともに生活背景などの聞き取りを行って状態をアセスメントし、個別の看護計画を立案している。また、ガイドラインに基づいて作成した心不全重症化予防教育パンフレットを用いたオンラインでの面談・教育を毎月 1 回 6 カ月間実施した。ご本人と一緒に家族も同席されたのは 5 名であった。オンライン教育時には、参加者とともに 1 ヵ月で実践する療養行動の目標を設定している。

参加者 6 人の 6 ヶ月間のモニタリング期間中、データの異常や逸脱のために、看護大学担当者から 4 人の参加者に電話連絡をして状態確認を行ったのは計 33 回であった。その理由としては、測定値の異常(体重の増加や減少、血圧高値、頻脈、酸素飽和度低値)や送信された写真記録からの異常（帯状疱疹、転倒）などであった。データ異常時の介入は延べ 46 回で、息切れや浮腫の有無などの状態確認の他、減塩・節酒・バランスのとれた食事指導や服薬指導、自宅でできる呼吸リハビリテーションや筋力トレーニング療養指導等を必要に応じて行った。そして、状況に応じて主治医のほか診療所看護師、訪問看護師、ケアマネジャーなどの多職種と連携を行った。

また、介入期間中に高齢独居者より、ふらつきや転倒、内服薬紛失、もの忘れ、熱傷など延べ 28 回の様々な相談があり、その都度対応を行った。

参加者からのデータ入力・送信・通信エラーに対する介入は全 6 人に必要であった。高齢独居者からの問い合わせが多く、データの未送信時への対応は延べ 40 回行った。データ未送信の内訳は、Wi-Fi 接続方法やアプリへのログイン方法が不明や、測定値や症状の入力方法を忘れたなどであった。

（５）プログラムの効果

慢性心不全プログラム参加者 6 人全員の 6 ヵ月のモニタリング介入期間中に心不全の増悪や入院はなかった。異常を早期に発見することにより、訪問看護師、クリニックの看護師、医師、看護大学教員が連携して心不全の重症化および再入院を予防することが可能であった。その後のフォローアップ期間中に 1 人が心筋梗塞を発症し入院された。

介入期間中はオンラインで身体の状態（浮腫や息切れの有無、帯状疱疹の発症など）を確認することができ、電話では難しかったフィジカルアセスメントが可能となった。虚弱高齢者の病状の進行、認知機能低下、転倒などの問題については、適宜多職種と連携し、訪問看護の導入やケアプランの変更につなげることができた。また、月に 1 回のオンラインでの患者教育では日頃は通院に同行できない家族も同席を希望される方が多い。病状や生活上の困りごとを共有することで対処法を共に考えることができる利点もみられた。

（６）プログラム参加者と家族のプログラム満足度調査結果

プログラム参加者への満足度アンケートには本人・家族の計 6 人からの回答が得られた。プログラム参加の感想としては、8 割以上の方が「大変良かった」または「良かった」と回答した。データの異常時や症状の出現時に、看護師がオンラインや電話でからだの状態を確認し、日常生活の過ごし方について説明することについては、全員が「大変良かった」または「良かった」と回答した。健康管理に役立ったかについては、全員が「大変役にたった」または「役にたった」と回答した。また、疾患管理アプリの使い勝手についても、全員が「良かった」または「まあ良かった」と回答した。このようなプログラムの必要性については、8 割を超える人が「必要」と回答した。

オンライン疾患管理プログラムの良かった点は、「見守られている安心感がある」、「オンラインや電話で看護師と話すことができる」「担当看護師はモニタリングを通じて自分の身体の状態や問題をよく理解している」「将来的に医療の中にとりいれられると良い」、「看護師に連絡しやすい」などが挙げられた。

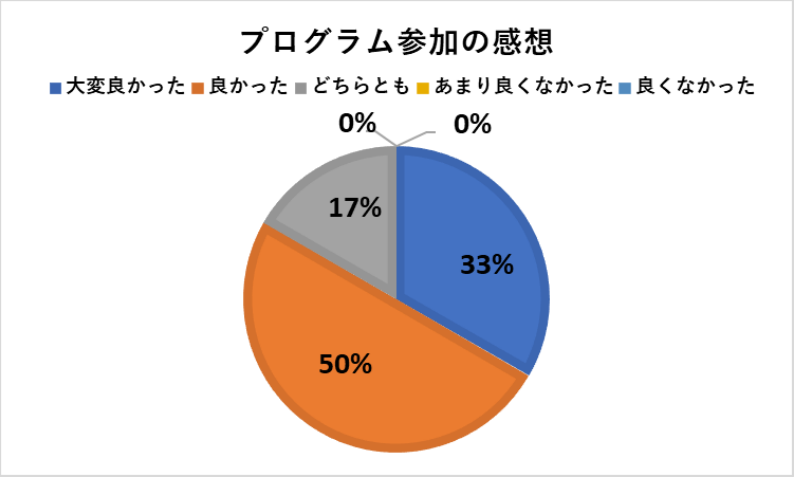


図 3 プログラム参加の感想

悪かった点（複数回答）は、「医師と直接連絡が取れないのが不満」「Wi-Fi の接続で苦労した」がそれぞれ 1 人ずつから意見が挙げられた。

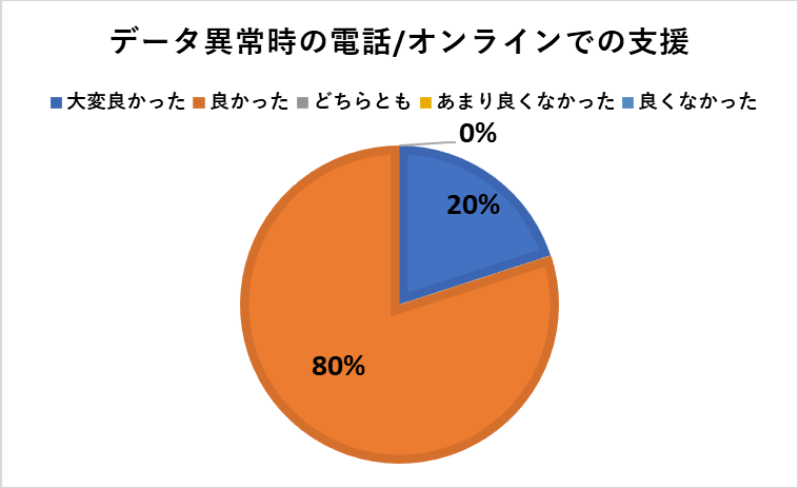


図 4 データ異常時の電話/オンラインでの支援

プログラムに参加して気付いた点・改善が必要な点について（自由記載）、参加者本人からは「とにかく安心だった。他の人に聞けないことを聞けるし、他人に相談できない身体のことを相談できる。心配なことがあったら尋ねられる」、本人の代理でアプリにデータを入力・送信した 80 代の家族からは、「はじめは、どうしたらいいか分からなかったが、色々教えてもらって慣れたら便利だった。年がいってからの機械の操作が難しい。できるかなと思った。写真送信の方法を教えてもらったが送るのが難しい。機械に変な数字や言葉がでた時に OK を押していいか分からない。分からない時、訪問看護師に聞いて分かった。どうにかこなした」などの意見を頂いた。

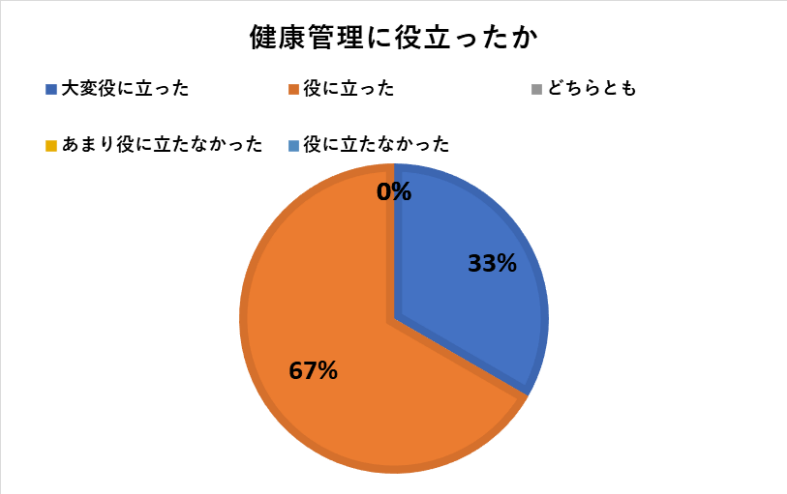


図 5 健康管理に役立ったか

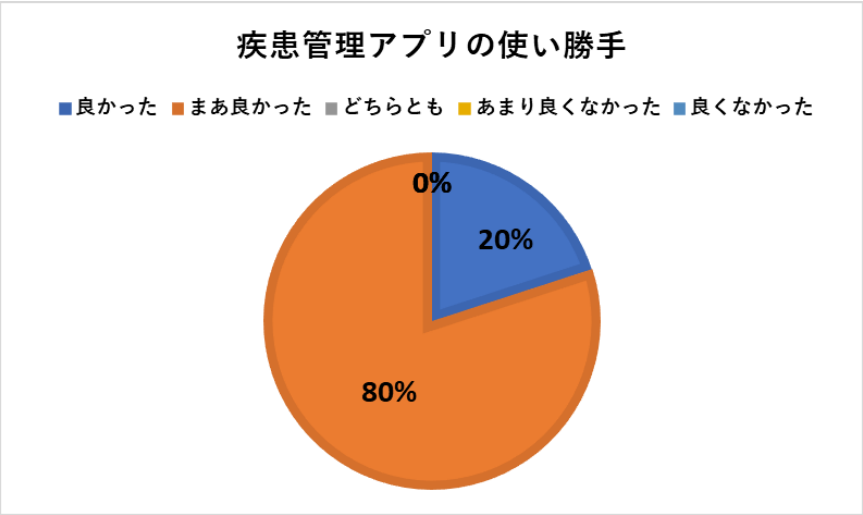


図 6 疾患管理アプリの使い勝手

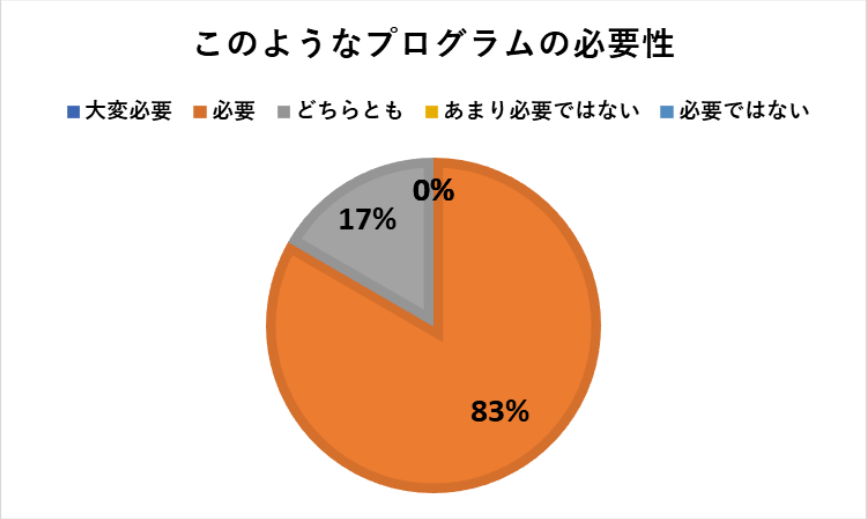


図 7 プログラムの必要性

（７）医師・訪問看護師の満足度調査結果

プログラム参加者毎に、主治医、及び訪問看護師にアンケートへの協力を依頼したところ、アンケートの回収数は、5 件であった。看護師による遠隔モニタリングシステムを用いた疾病管理プログラムの必要性について、全員が「大変必要」と回答し、日頃の診療や看護に役立ったかについても、全員が「大変役に立った」と回答した。患者に利益があったかについては、全員が「大変あった」または「あった」と回答した。「看護大学教員」が患者に行った指導については、全員が「大変良かった」、「医師、多職種、看護大学教員との連携」については、全員が「よくとれた」または、「とれた」と回答した。

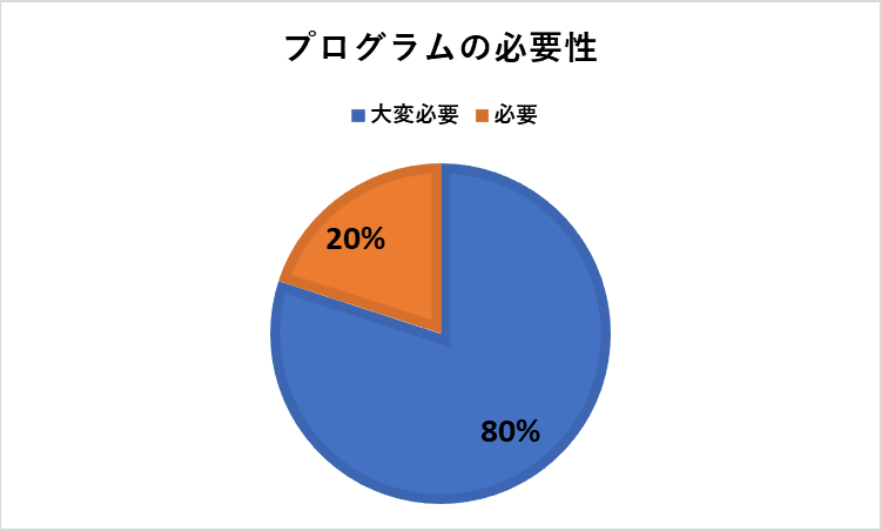


図 8 プログラムの必要性

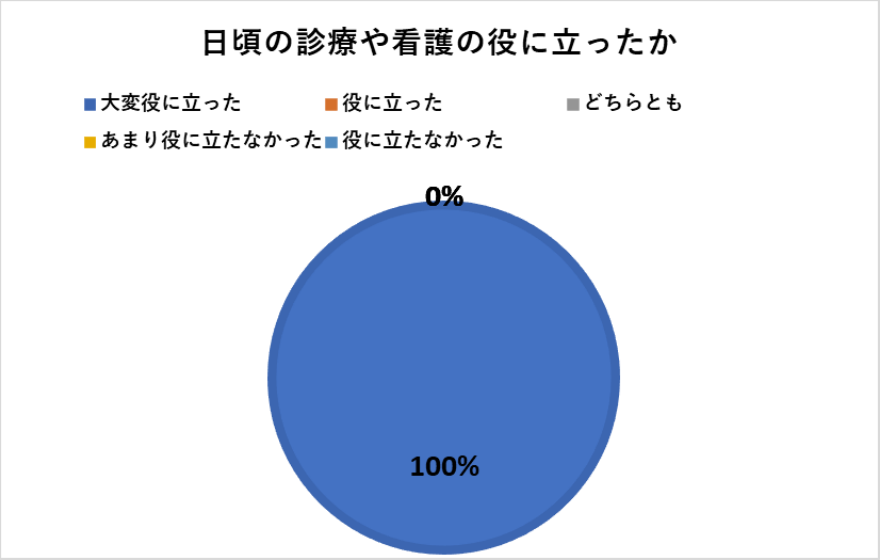


図 9 日頃の診療や看護に役立ったか

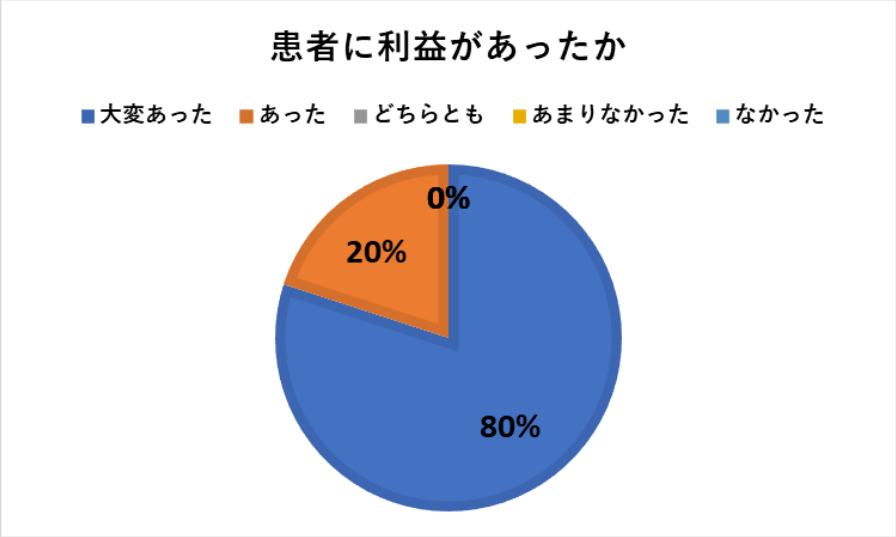


図 10 患者の利益

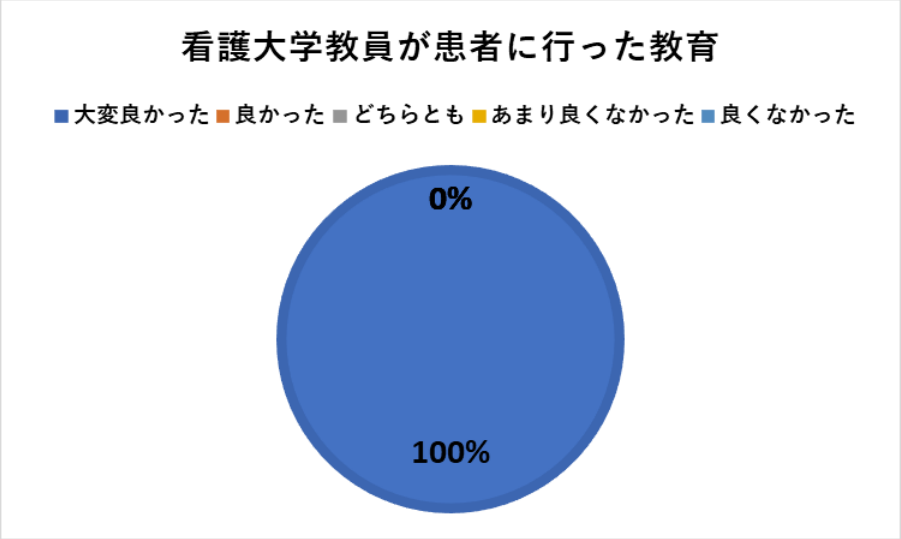


図 11 看護大学教員が患者に行った指導

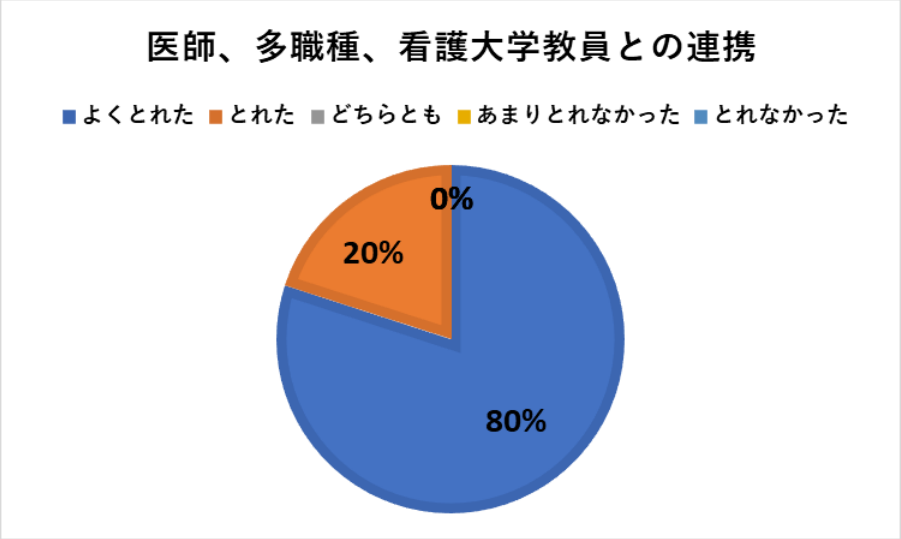


図 12 医師、多職種、看護大学教員との連携

「遠隔モニタリングを用いた疾病管理プログラム」について、「心不全を悪化させないための日常生活管理に必要である」「担当看護師（看護大学教員）はモニタリングを通じて患者の状態や問題を良く理解している」、「診療に際し時間や費用の節約になる」、「将来的に医療システムの標準になりうる」、「医療費を減らすことができる」という意見が挙げられた。

プログラムに協力して気づいた点や改善が必要な点については（自由記載）、医師からは、「プログラムの途中で引っ越しがあり、環境が激変する中、当プログラムに参加していたので、心不全が悪化することなく次の環境にスムーズに移行することができた。ネットへのつながりにくさや、使い方が解らなくなることがあるのは今後の課題である。スマホやパソコンに慣れているとご自身で思っていても、高齢者は難しいこともあった」「今後薬局での本システムへの活用を検討する必要があるのではと感じた」「患者さんにとって入力の時間のことで、最初はストレスがあったようだが、それをクリアされた後はとても楽しく参加されていた。このプログラムのようにオンラインで患者さんとつながれるのは、患者さんが安心して自宅で過ごすことができ、大変有用だと感じた」という意見を頂いた。

訪問看護師からは、「モニタリングした内容がタイムリーにわかり、便利なツールだと思った。疾病管理アプリが高機能で、写真や状況も遠隔にいても共有することができ、本人・家族が使いこなせたら、オンライン診察やオンライン看護への将来性があるように思った」「高齢（80 代）の妻でも、プログラム導入時の訪問看護の際に入力・送信の操作支援を行ったことで操作に慣れ、使いこなせるようになって、自信もついた」という意見を頂いた。

（８）事業の評価と今後の課題

開発・展開してきた多職種によるオンラインでの疾患管理は、安全に運用することができ、実践することによる利点が多くある一方で、独居高齢者については、初期の機器設定や操作説明、データ送信練習、通信エラーが生じた際の支援に時間を要するという課題がみられた。今後の課題は、前記課題について検討し、さらに新たな協力医療機関とプログラム参加者を募集し、参加人数を増やしてプログラムの効果検証を継続することである。

Ⅲ　在宅ケア支援グループ

１．グループ概要

在宅ケア支援グループは、在宅サービス提供者への支援を目指して活動しており、2021 から 2022 年度まで神戸市健康局の委託事業を中心に行ってきた。神戸市の委託は、当初、①兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会等との協働による感染症防止対策や、患者や家族へのケアを提供する体制づくりに関する研修の実施及びマニュアル・教育動画の作成、②多職種連携会議や事例検討会の開催支援、③医療介護従事者を対象とする個別相談窓口の開設となっていた。その後、神戸市と協議を重ねた結果、2021 年度の事業として、①訪問看護ステーション連絡協議会等との協働による研修事業、②オンラインを使用した多職種による退院時協働指導モデルの検討、③COVID-19 禍における神戸市訪問看護事業所調査を実施することになった。2022 年度は、継続の必要性がある 2 研修と、2021 年度調査の結果にもとづき必要が生じた 1 研修を、神戸市内訪問看護事業所または在宅療養を支援する事業所へ提供した。

2023 年度は、「研修 3 事業」および「研究助成事業」の事業報告をする。

２．グループメンバー

リーダー　片倉直子

メンバー　船越明子、片山修、小山富美子、丸尾智実、水川真理子、勝田玲子

３．　研修事業

（１）「もとある災害対策を BCP へ！大雪・大雨災害で再構築！」訪問看護ステーション BCP 策定過程講演会

在宅看護学分野　片倉　直子

1）背景

2021 年 4 月施行「令和３年度介護報酬改定における改定事項について」内で、2024 年度から介護サービス業での事業継続計画（Business Continuity Plan：BCP）策定が義務づけられ、今年度は経過措置の最終年度である。在宅ケア支援グループでは、2021 年度は、リスクマネジメントや運営管理と BCP の位置づけや必要性などの総論と、実際に作成した訪問看護ステーション担当者から、作成過程などについて学んだ。2022 年度は 2021 年度に本学研修を受けた神戸市内の訪問看護ステーション管理者が、作成した BCP を市内の訪問看護ステーションへ情報提供し、地域特性などを加味した BCP 作成や、BCP

作成過程における工夫に関する理解を深めた。

2）事業内容・経過

2023 年度は、BCP を作成した神戸市内の訪問看護ステーション管理者が、BCP 作成過程とともに、2022 年の台風時や 2023 年 1 月の大雪等の自然災害時に活用した実践を紹介した。また、BCP 発動ごとに内容の見直しを行った例を講義した。兵庫県と大阪府から 37 訪問看護ステーションから複数人の参加者があった。日時、方法、講師と講演内容は下記のとおりである。

日時：2023 年 8 月 26 日（土）13 時 30 分から 16 時 30 分
方法：ZOOM によるオンラインライブ研修
講師：神戸健康共和会東神戸訪問看護ステーションあじさい
　　所長　在宅看護専門看護師　井上　久美子　氏

なお、井上氏の講演の後、「こころの支援プロジェクト」の活動内容について、神戸市看護大学名誉教授　南裕子氏、星槎大学教授　松枝美智子氏から説明があった。

3）業務成果・実績

①研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

本研修は、兵庫県内訪問看護ステーションで BCP 作成に関わっている看護職を対象として参加を募集した。事前参加申込みは 55 施設で、申込施設の所在地区は、「大阪」が最も多く 14 施設（25.5%）、次いで「神戸」が 13 施設（23.6%）であった（図 1）。当日の参加施設数は 40 施設であり、研修後に実施したアンケートの回答者は 37 人であった。

回答者の事業所の勤務先所在地区は「神戸」9 人（24.3%）、「大阪」8 人（21.6%）、次いで「東播磨」6 人（16.2%）であった（図 2）。回答者の訪問看護に従事した経験年数は、「10 年以上」が 16 人（43.2%）、「10 年未満」と「5 年未満」が 5 人（13.5%）であった。また、職場での立場は「管理者」20 人（54.1%）、「スタッフ」が 11 人（29.7%）であった（図 3）。

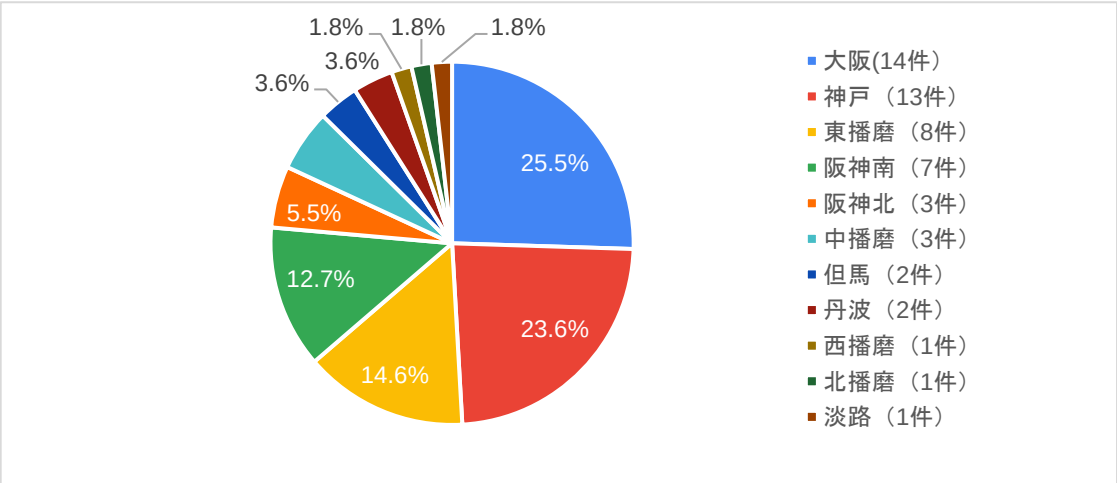


図 1　事前参加申込事業所の所在地区

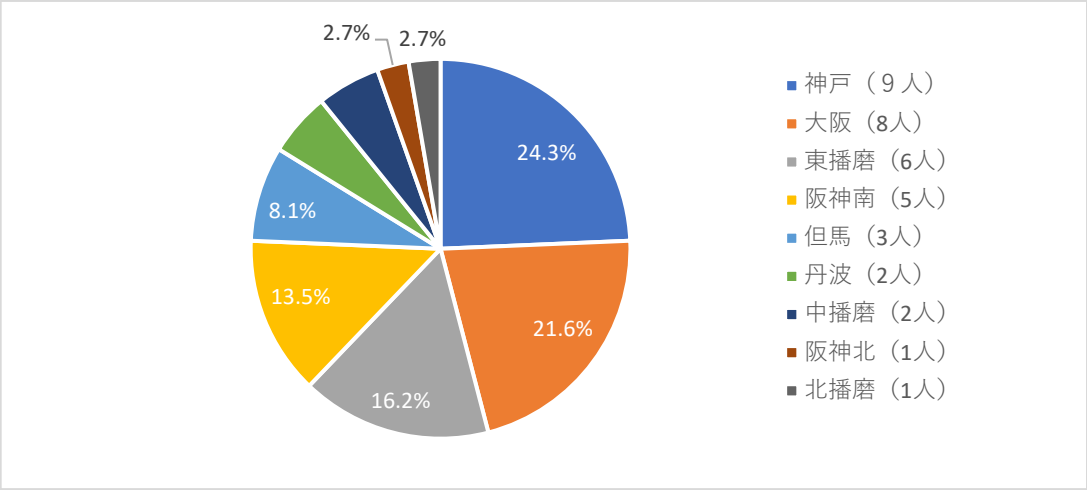


図 2　アンケート回答者の勤務先所在地区

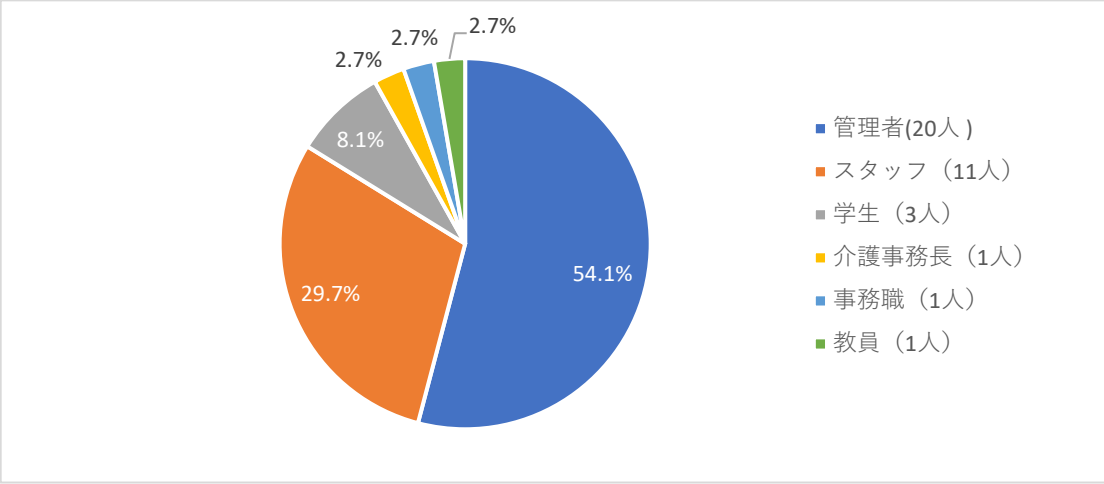


図 3　現在の職場での立場

②参加理由・参加後の意見や感想

参加理由は「テーマに興味があったから」が最も多く 21 人（56.8%）、ついで「実際に活用できると思ったから」が 12 人（32.4%）、「オンライン研修だったから」が 3 人（8.1%）であり、研修のテーマに高い関心をもつ参加者が多かったことが伺えた（図 4）。

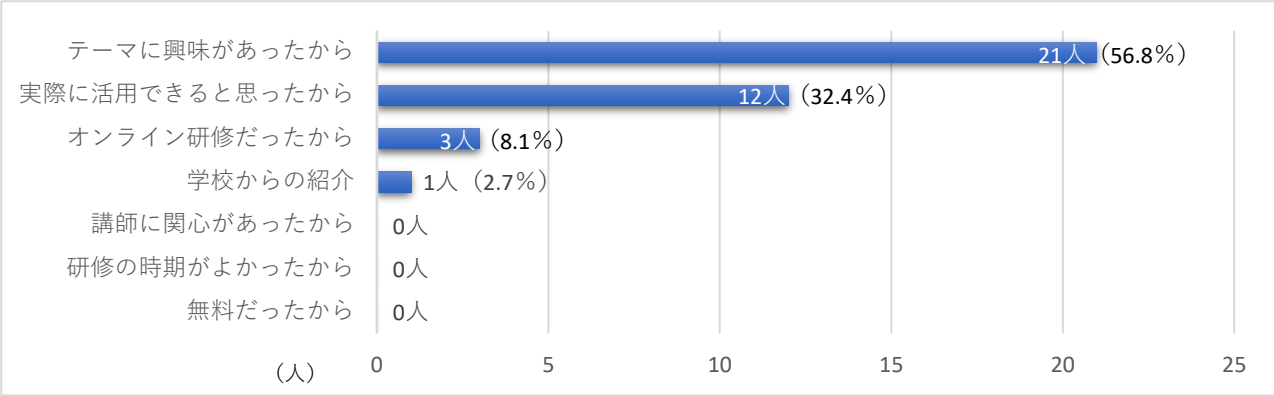


図 4　研修の参加理由

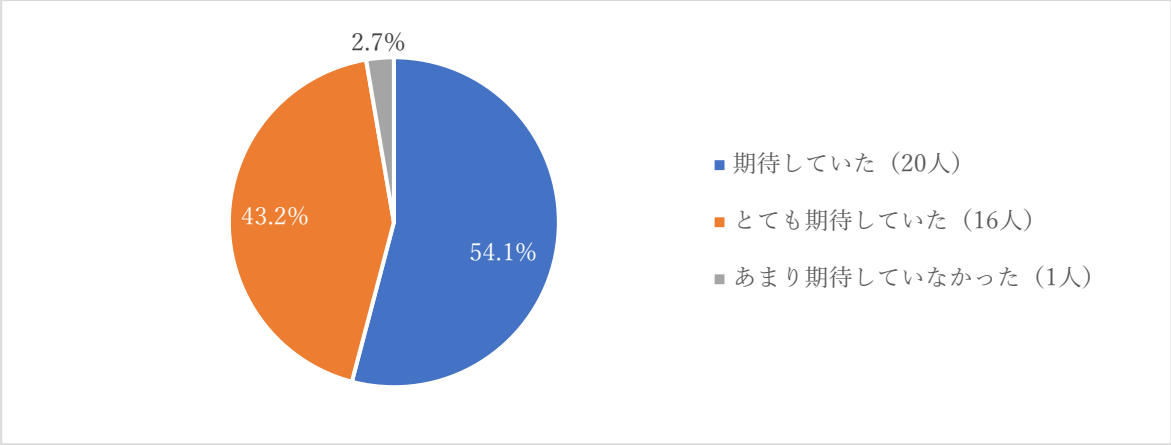


図 5　研修前の期待度

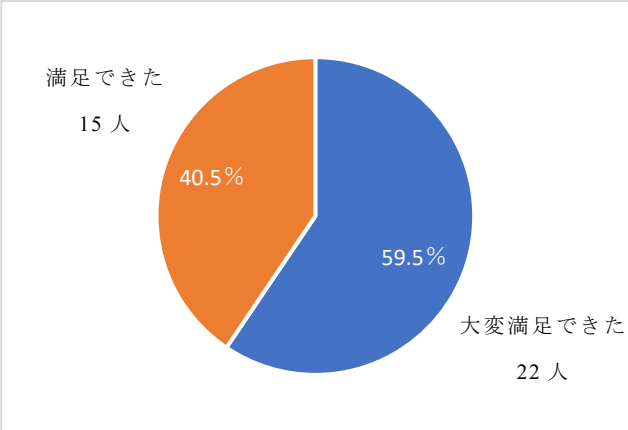


図 6　研修の満足度

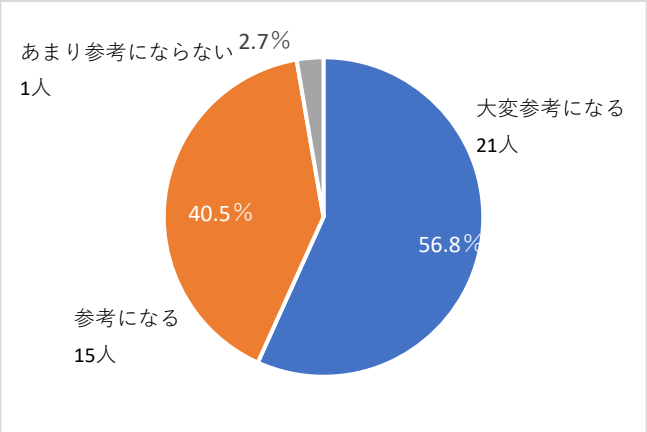


図 7　研修の役立ち度

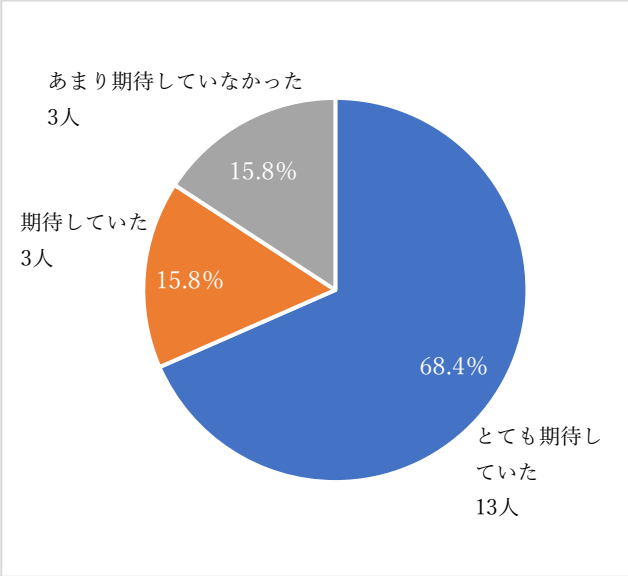
研修前の期待度は、「期待していた」20 人（54.1%）、「とても期待していた」16 人（43.2%）であった（図 5）。研修後の満足度は「大変満足できた」22 人（59.5%）、「満足できた」が 15 人（40.5%）で、「あまり満足できなかった」「満足できなかった」の回答はなかった（図 6）。また、各施設における研修の役立ち度について、「大変参考になる」が 21 人（56.8%）、「参考になる」が 15 人（40.5%）であった。「あまり参考にならなかった」が 1 人（2.7%）であり、作成事例をもっと紹介してほしかったとの意見があり、自施設での BCP 作成に取り組む具体的な参考例をさらに知りたかったと推測される（図 7）。

③今後の本学への要望

「BCP に関するさらなる内容の研修」「在宅看護に関わる内容の研修」「BCP 作成過程で生じるスタッフとの意見のくい違いからのメンタルヘルスやハラスメント研修」等の要望が寄せられた。

④こころの支援プロジェクトのご案内

本研修の終了後に、「こころの支援プロジェクト」のご案内が行われ、参加者は 21 人であった。「こころの支援プロジェクト」の案内への期待は「とても期待していた」が 13 人（68.4%）、「期待していた」が 3 人（15.8%）（図 8）、内容が「役立てられる」15 人（75.0%）、「とても役立てられる」4 人（20.0%）であった（図 9）。



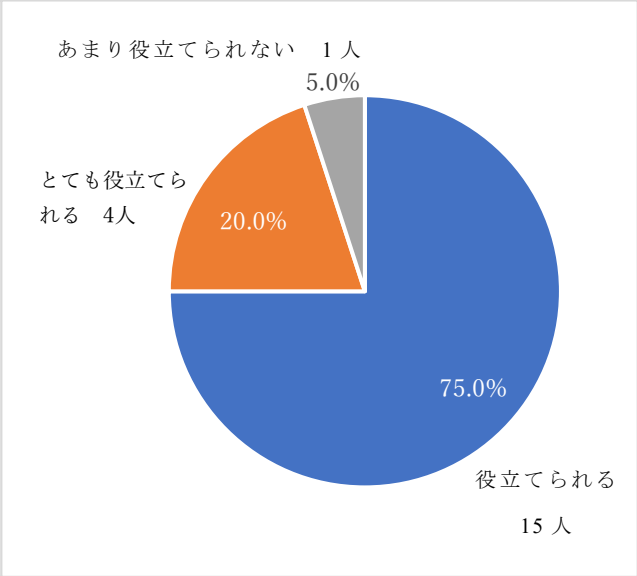


図 8　こころの支援プロジェクト案内の期待度　図 9　こころの支援プロジェクトの内容の役立ち度

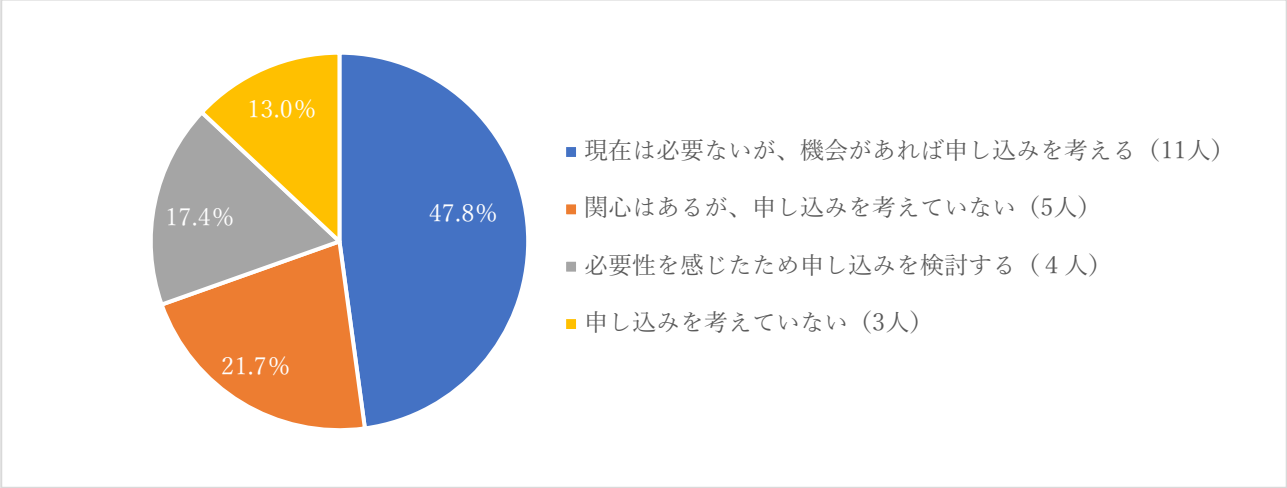


図 10　こころの支援プロジェクトの活用

「こころの支援プロジェクト」に今後申し込みを考えるかでは、「現在は必要ないが、機会があれば申し込みを考える」が 11 人（47.8%）で、「必要性を感じたため申し込みを検討する」4 人（17.4%）であった。「関心はあるが、申し込みを考えていない」が 5 人（21.7%）と「申し込みを考えていない」3 人（13.0%）であり、自由記載で「現状では自身や周囲での必要性は感じていない」、「悩みを抱えているスタッフに支援の紹介をしたい」の声が聞かれた（図 10）。

（２）在宅療養者の精神状態のアセスメント～精神看護専門看護師に学ぶ Mental States Examination

精神看護学分野　船越　明子

1）背景

不安、うつ、希死念慮、不眠などの精神的不調を経験する在宅療養者は多く、訪問看護師は身体疾患のケアだけでなく精神的なケアも担うこととなる。Mental Status Examination（精神状態の査定）は、精神機能の状態や心理的反応について、観察から得られた臨床的に意義ある所見を記述することであり、精神看護を専門とする者の基礎的な技術とされている。

2）事業内容・経過

本研修では、主要な精神機能・心理的反応について実際の臨床事例も紹介しながら講義を行い、在宅療養者の精神状態をアセスメントする際の実践的な知識を身につけることを目的としたオンライン研修を実施した。研修の到達目標は、以下の２点である。

・主要な精神機能・心理的反応について、身体疾患のある人の特徴を理解することができる。
・在宅療養者の精神状態をアセスメントする際のポイントを理解することができる。

研修では、Mental Status Examination（精神状態の査定）についての導入的な講義と架空事例を用いたミニワークを行った。日時と講師は以下の通りである。

日時：2023 年 10 月 7 日（土）　14:00-16:00
講師：武藤　教志（むとう　たかし）氏（宝塚市立病院リエゾンナース）
精神看護専門看護師。著書に、「他科に誇れる精神科看護の専門技術 メンタルステータスイグザミネーション Vol.1, vol.2.　第 2 版(精神看護出版, 2021 年)」、「改訂 専門的な思考を鍛える 看護のためのフレームワーク（精神看護出版, 2016)」、「コンコーダンス-患者の気持ちに寄り添うためのスキル（2010 年医学書院)」。
方法：ZOOM によるリアルタイムのオンライン研修

3）業務成果・実績

兵庫県内外訪問看護ステーション 86 施設、94 人が参加した。研修後のアンケートでは、61 人の回答があり、研修内容に大変満足が 29 人（47.5%）、満足が 31 人（50.8%）であり、訪問看護ステーションのニーズに概ね応じた研修であった。

① 研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

本研修は、全国の訪問看護ステーションに勤務するスタッフを対象として参加を募集した。事前参加申し込みは 98 施設であった。当日の参加施設数は 86 施設であり、研修後に実施したアンケートの回答者は 61 人であった。参加者の所属勤務地域は、「兵庫県外」が 41 人（67.2%）、「兵庫県内」が 20 人（32.8%）であった。「兵庫県内」は、「神戸」が最も多く 11 人（55.0%）、次いで「阪神南」が 5 人（25.0%）であった（図 1）。「兵庫県外」では、「南関東」が 14 人（34.1%）、「兵庫県以外の近畿」13 人（31.7%）であり、「北海道」や「九州」等からの参加もあった（図 2）。参加者の職種は、「看護師」50 人（82.0%）、「看護師・保健師」（4.9%）、「看護師・保健師・精神保健福祉士」3 人（4.9%）、「作業療法士」2 人（3.3%）、「助産師・保育士」、「精神福祉士」、「理学療法士・作業療法士」がそれぞれ 1 人（1.6%）であった（図 3）。精神科訪問看護を「行っている」は 47 人（77.0%）、「行っていない」が 14 人（23.0%）であった。訪問看護の経験年数は「10 年以上」が 20 人（32.8%）、「5 年以上 10 年未満」が 13 人（21.3%）であった。

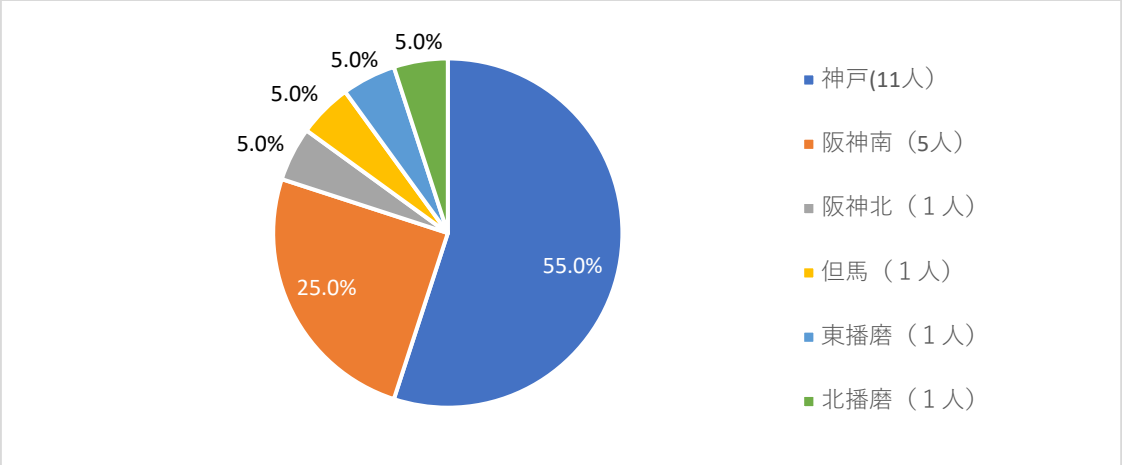


図 1　兵庫県内所属先

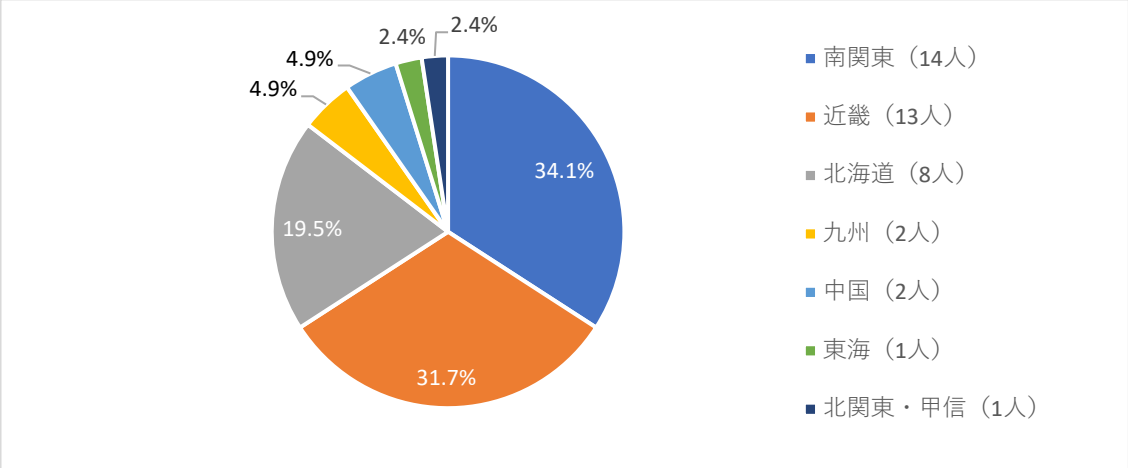


図 2　兵庫県外の参加者所属先地区

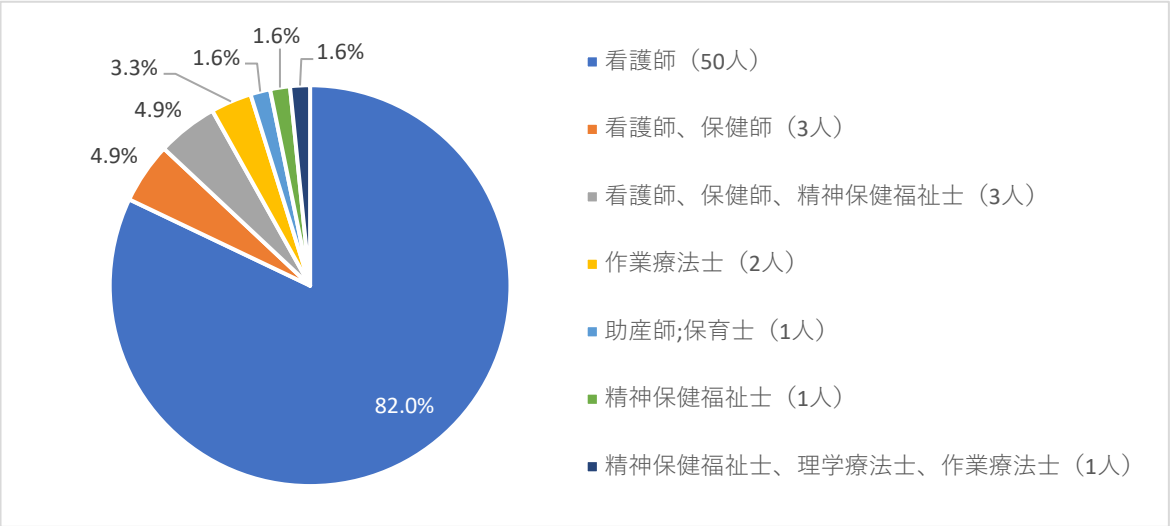


図 3　参加者の職種

②参加理由・参加後の意見や感想

研修参加の理由は、「MSE に興味があったから」30 人（49.2%）、「実際に活用できると思ったから」14 人（23.0%）、「講師に興味があったから」6 人（9.8%）であった（図 4）。

研修内容の期待度では、「期待していた」30 人（49.2%）、「とても期待していた」29 人（47.5%）であった（図 5）。研修の満足度は「満足できた」31 人（50.8%）、「大変満足できた」29 人（47.5%）で、「満足できなかった」の 1 人（3.3%）は、「2 時間で MSE を学ぶには無理がある。」との自由記載があった（図 6）。研修内容の活用は、「参考になる」32 人（52.5%）、「大変参考になる」28 人（45.9%）で、「あまり参考にならない」1 人（1.6%）は「実際の活用方法がよくわからない。」と自施設で活用するための具体的な活用についての自由記載があった（図 7）。

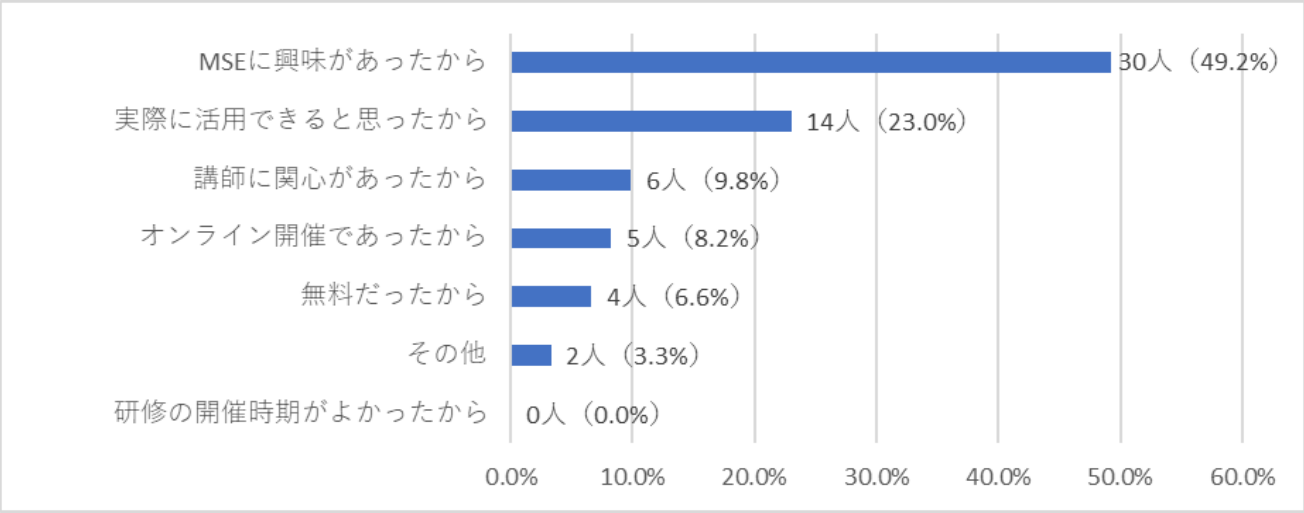


図 4　研修の参加理由

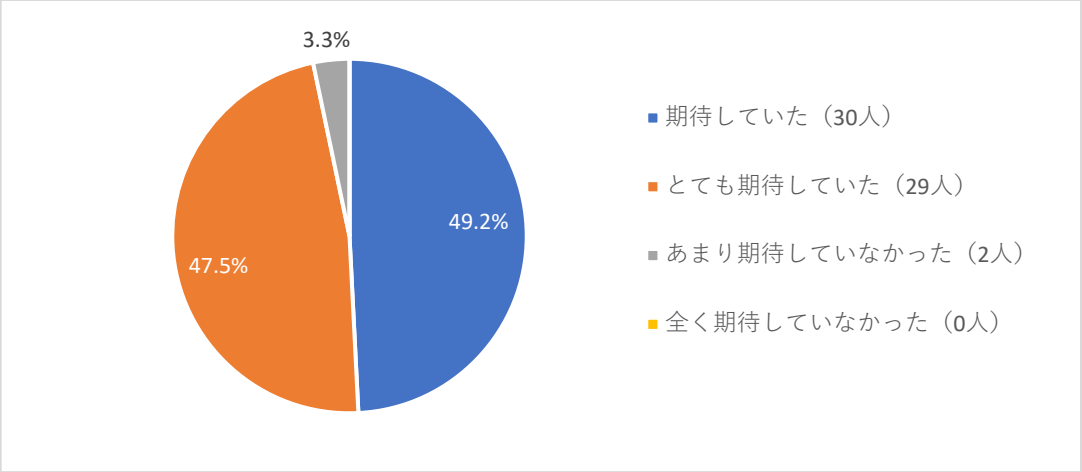


図 5　研修の期待

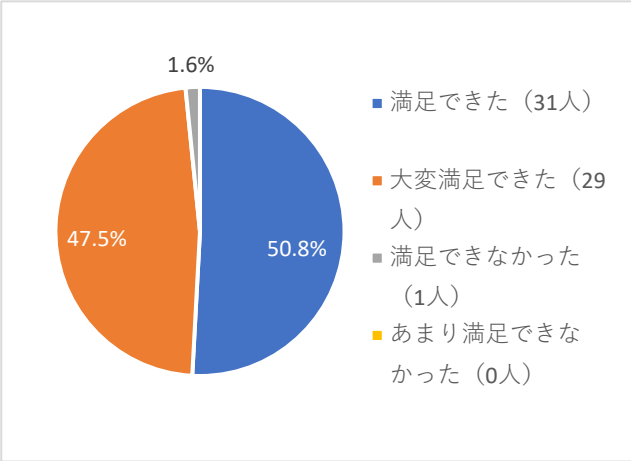


図 6　研修の満足度

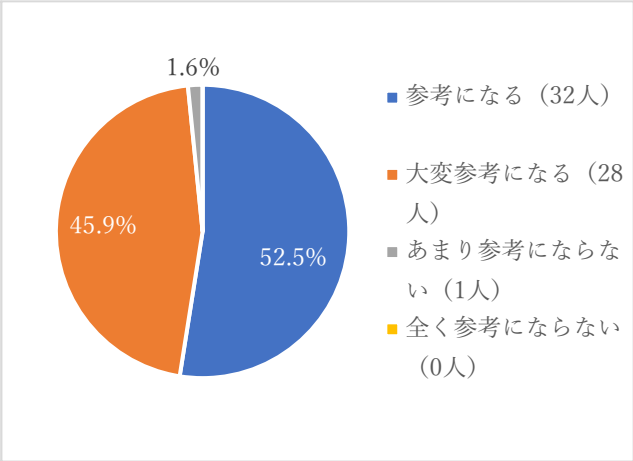


図 7　研修内容の活用

③今後の要望

今後の大学への要望について、「困難事例など具体的な内容のアセスメント方法について知りたい」や「精神疾患を抱えている利用者への的確なケアにつながる関わり方について学びたい」など意見が寄せられた。また、「MSE の続編を開催してほしい」という意見もあった。

4）来年度の展望

精神科訪問看護に限らず、利用者の精神面へのケアについての研修のニーズは高い。来年度は、MSE の発展的内容または睡眠へのケアなど多くの看護師が関心をもつテーマで、実践的な研修の実施が求められていると考えた。

（３）「在宅療養支援のグローバル化が迫る兵庫県！安心して定住外国人が在宅サービスを受けられるネットワーク拡大を目指す」研修

在宅看護学分野　　片倉　直子

1）背景

定住外国人高齢者割合は近畿圏の方が多く、兵庫県は約 16.0%、神戸市は約 17.5%である。したがって、定住外国人が要介護状態になる割合が多いと言え、保健医療福祉現場でもその対応が求められ、人々の多様な価値観や文化的感受性を高めていく必要性がある。

神戸市は意思疎通が困難な定住外国人が介護保険サービスを利用する際にサポートする、「コミュニケーション・サポート」事業を行っている。そこで、要介護認定やケアプラン作成時のコミュニケーション・サポーター派遣や養成研修を行っているが、現行の研修は介護保険制度の説明にとどまっており、在宅療養者とのコミュニケーション方法等には触れていない。

2022 年度は、外国人の在宅療養時の価値観にそったサービス提供やケアをしていくための意思決定の支援方法を学ぶ機会として、NPO 法人神戸定住外国人支援センター（Kobe Foreigners Friendship Center、以下 KFC）に依頼して研修を実施した。

2）事業内容・経過

2023 年度は、下記の目的のために、KFC の講師を再び招聘して、定住外国人の在宅療養支援は益々身近なことになっていくことを理解し、保健医療福祉従事者が適切な支援の必要性を学ぶ機会とした。

①近畿圏内は在宅療養を必要とする定住外国人の高齢者の占める割合が多いので、今後、兵庫県内で定住外国人に在宅サービスを提供するスキルが必要になってくること、また必要なスキルの内容を学ぶことができる。

②実際に在宅サービスを受けている定住外国人の家族の生の声を聴き、必要とされている在宅サービス提供時の姿勢を学ぶことができる。

兵庫県、大阪府内等の看護系大学・学校の教員・学生、居宅介護支援センター・地域包括支援センター・訪問看護ステーション・医療機関等、計 12 施設が参加した。日時、方法、講師と講演内容は下記のとおりである。

日時：2023 年 2 月 17 日（土）13 時 30 分から 16 時 20 分
方法：ZOOM によるオンラインライブ研修
講師：

・KFC 居宅介護支援事業所ハナ介護サービスゼネラルマネジャー
　　ケアマネジャー　　呼和徳力根(フフデルゲル)氏

今後、兵庫県内で定住外国人に在宅サービスを提供するスキルが必要になってくること、また必要なスキルや具体的な事例について講義した。

・KFC 小規模多機能型居宅介護ハナ職員　姜竜平（カンリュウヘイ）氏

KFC のスタッフでもあり、実際にデイサービスセンターハナの会や小規模多機能型居宅介護ハナの在宅サービスを受けていた定住外国人の家族の立場から、在宅サービス提供時

の必要とされている姿勢について講義した。

3）業務成果・実績

①研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

事前参加申込は 23 施設 29 人であり、申込施設の在籍地区は、「神戸」が最も多く 15 施設（65.2%）、次いで「大阪府」が 3 施設（13.0%）、「西播磨」が 2 施設（8.7%）であった（図 1）。

当日の参加は21施設であり、研修後に実施したアンケートへの回答数は12人であった。回答者の所属先在籍地区は、「神戸」が 8 人（66.7%）、「大阪」が 2 人（13.0%）、「西播磨」と「東京」がそれぞれ 1 人（8.3%）だった（図 2）。回答者の所属施設は、「大学」が 6 人（50.0%）、「訪問看護ステーション」、「居宅介護支援事務所」、「地域包括センター」、「看護専門学校教員」、「個人事業主」、「学生」がそれぞれ 1 人であった（図 3）。回答者の職場での立場は、「大学教員」が 6 人（50.0%）、「スタッフ」が 3 人（25.0%）で「管理者」、「専門学校教員」、「学生」がそれぞれ 1 人（8.3%）であった。

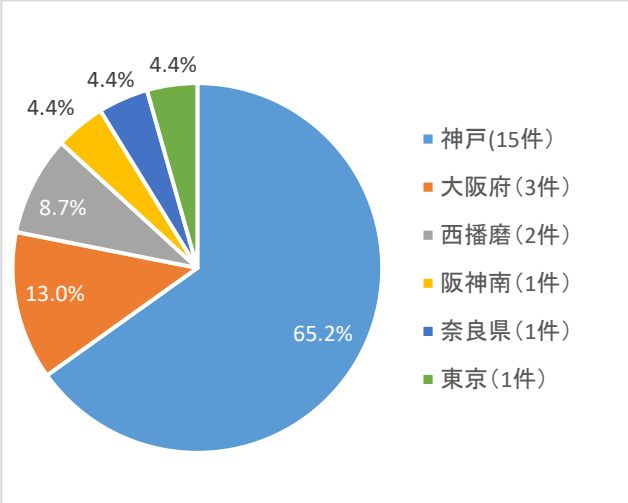


図 1　事前参加申込施設の在籍地区

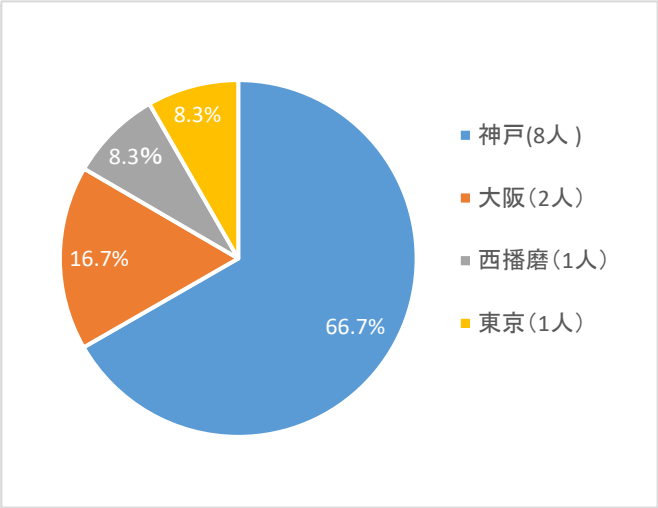


図 2　回答者の所属先在籍地区

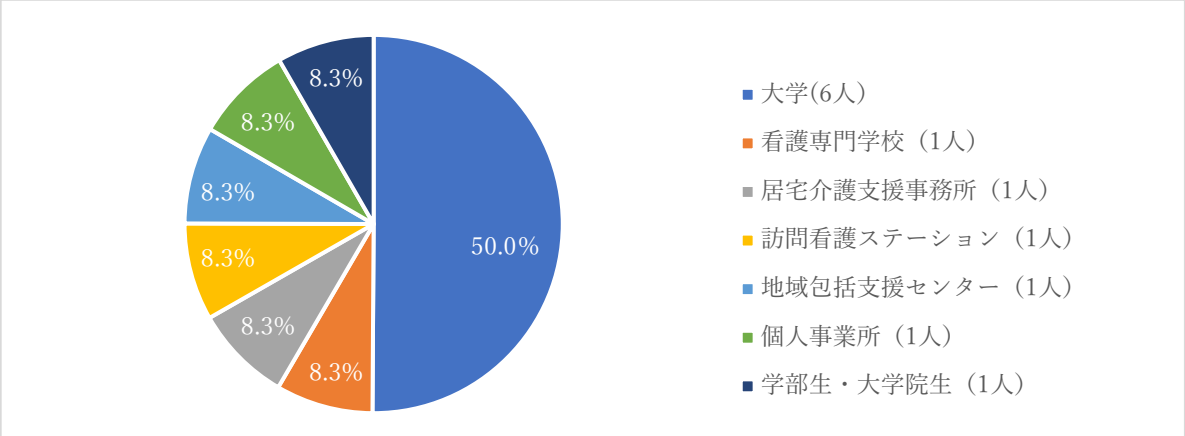


図 3　参加者の所属施設

②参加理由・参加後の意見や感想

研修を知った方法は、「神戸市看護大学のホームページ」からが 3 人（25.0%）、「職場の同僚」と「職場の上司」が 2 人（16.7）%、「メーリングリストからのメール」、「送付されたチラシ」、「いちかんからのメール」、「知人から」、「兵庫県訪問看護総合支援センター」がそれぞれ 1 人（8.3%）であった（図 4）。参加理由は、「テーマに興味があった」が最も多く 11 人（91.7%）、ついで「実際に活用できると思ったから」が 1 人（8.3%）であった。

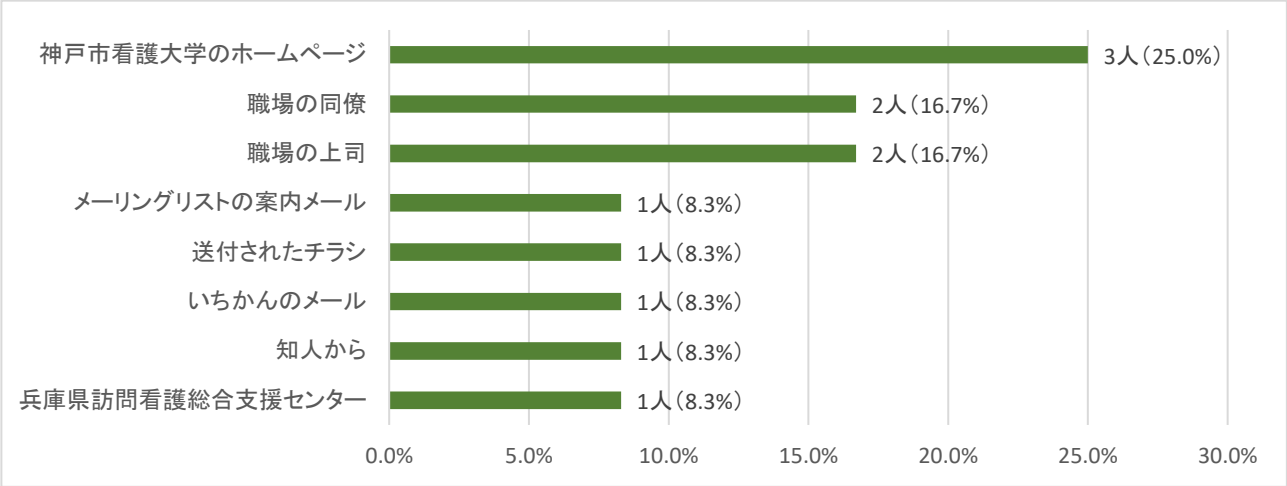


図 4　研修を知った方法

研修の期待度は、「期待していた」が 6 人（50.0%）、「とても期待していた」が 5 人（41.7%）、「あまり期待していなかった」が 1 人（8.3%）であった（図 5）。研修後の満足度は「大変満足できた」が 8 人（66.7%）、「満足できた」が 4 人（33.3%）で、「あまり満足できなかった」「満足できなかった」の回答はなかった（図 6）。また、各施設における研修の役立ち度について、「参考になる」7 人（58.3%）、「大変参考になる」5 人（41.7%）、で、「あまり参考にならなかった」「まったく参考にならなかった」の回答はなかった（図 7）。研修に満足したことに関する自由記載では、「その人の人生を理解することが大切だと講義を通して理解した」「外国にルーツのあるケアマネジャー、介護職員、介護者家族の実際を知ることができた」等があげられた。したがって、研修への期待をある程度満足させる、参考になる研修内容であったと推測できる。

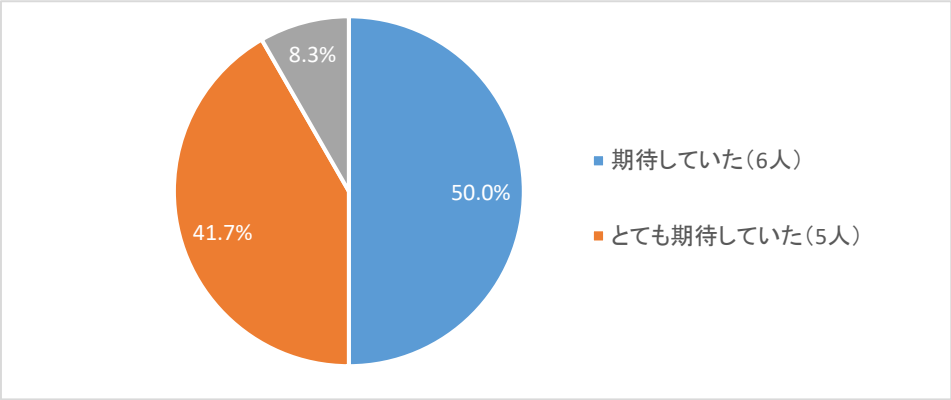


図 5　研修の期待度

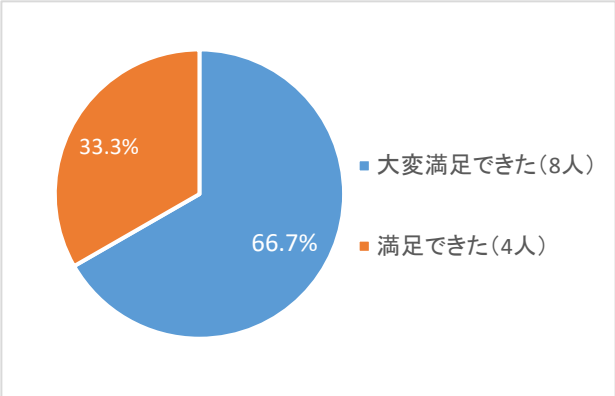


図 6 研修の満足度

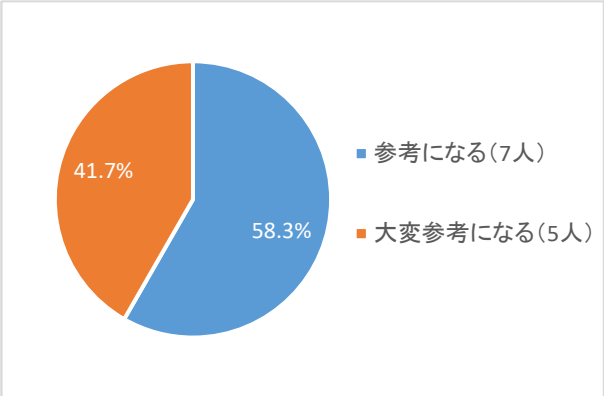


図 7　研修内容の役立ち度

③今後の要望

今後の大学への要望では、「制度の狭間の課題を抱えた方への援助の実際について」の研修や、地域看護・在宅看護の研修を希望する意見があった。

（３）訪問看護師を支援する研修内容の検討

在宅看護学分野　丸尾智実

1）背景

急速な少子高齢化を背景に、地域包括ケアシステムの推進が求められており、その中で訪問看護師が果たす役割が期待されている。また、開設期間が長く常勤換算看護職員数が多い訪問看護ステーションでは新規採用者への教育体制が充実している一方で、そうでない訪問看護ステーションへの教育支援の必要性が指摘されている。

このような背景を踏まえ、一昨年度、昨年度と、「臨床判断モデル」を活用した研修を実施してきた。その結果、参加者の満足度が高かったことから、訪問看護の経験が浅い訪問看護師を対象とした研修の必要性が示唆された。また、今後も継続して、訪問看護師を対象とした効果的な支援内容について検討していく必要があると考えられた。

2）　事業内容・経過

今年度は、神戸市内を中心とした訪問看護ステーションにとって、効果的な研修内容は何かを検討することにした。そのために、訪問看護師の研修に関する課題を明確にするために文献検討を行い、外部研究費の獲得を目指すこととした。

3）　事業成果・実績

文献検討の結果、新任訪問看護師（病院等で勤務後に訪問看護ステーションで勤務した看護師）が抱く職務上の困難感には、新任訪問看護師がこれまで臨床で身に着けてきた自己のスキルだけでは在宅では対応できないというリアリティショックがあり（伊藤，2021）、新任訪問看護師への教育支援では、病院とは異なる訪問看護の特殊性および相違点に関す

る内容を教示したうえで、訪問看護実践の介入方法を模索できるための教育支援が必要であること（楢原・谷水，2020）や、研修において訪問看護ステーション側の研修への期待やニーズについても検討する必要性があること（西村・竹森・山田，2022）が明らかとなった。したがって、これらを考慮して、よりよい研修内容を検討することとした。

そして、これらの研修内容を検討するにあたり、2023 年度 ななーる訪問看護研究助成プロジェクトに応募し、採択された。

4） 来年度の展望

研究助成を活用して、訪問看護ステーションの管理者を対象としたインタビュー調査を実施し、その結果を踏まえて、訪問看護師の実践に役立つ効果的な研修内容について検討することとしている。

Ⅳ　国際交流グループ

災害看護・国際看護学分野　神原 咲子

１．　グループ概要

いちかんダイバーシティ看護開発センター内の国際交流グループにおいて企画・運営が実施された。

「海外看護学研修」については、本学と学術協定を締結している米国ワシントン大学（シアトル）において、1～2 週間程度の短期間、学生らが現地に赴いて見学・視察や語学研修、看護演習を含めて自分の目で見たり聞いたり触れたりするという形で海外を経験することができた。危機管理マニュアルの見直しを昨年度に続き行った。一方、ベトナム・ダナン大学については、昨年度に引き続き、オンラインセミナーという形で実施した。コロナ禍を経てもオンライン形式のニーズがあり、オンラインとオフラインでの授業での国際交流、課外の English Extra などを含めた多様な国際交流を展開できた。

以下はそれらを含めた 2023 年度国際交流グループ活動報告である。

２．グループメンバー

リーダー　　神原咲子

メンバー　　髙木廣文、林千冬、山内理惠、クロスビ・アダム、佐藤隆平、樋口佳耶

３．今年度の実施内容及び実施結果

（１）学術協定の更新手続きとあらたな協定に向けた活動

本学の学術協定（MOU）提携校の一つであるベトナム・ダナン大学との協定が満 5 年を超え、このたび更新手続きを開始した。同大学との交流は年々活発化しており、コロナ禍において本学の国際交流の基軸となっている。

韓国大邱大学との協定と学生交流に向けた議論を進めており、2 月 20 日には、幹部が 4 名本学に来校され、Glocal 大学構想への推進に向けた交流に関する議論が交わされ LOI を締結した（詳細は 12 ページ参照）。

台北護理健康大学との学術交流に向けて、オンライン議論を開始した。2024 年度のサマーセミナー参加や共同研究に向けた具体的な議論とそれに伴う MOU 締結に向けての審議が進み、MOU を締結する方針が承認された。

。

（２）ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流会

ベトナムのダナン大学看護学部との学生交流会を 2024 年 1 月 5　日にオンラインで実施した。本学からは国際交流グループの教職員が協力して運営を行い、ダナン大学からは学部長をはじめ、多数の看護学科教員や学部学生らの参加を得ることができた。

両大学の議論への意識を合わせるためにテーマを、グローバル課題である Nursing Care on integrated people-centered health services」にし、本学からは看護教員は「熱布パックケア」、学生は授業での取り組みから「フードロス・食品廃棄」について発表した。会の収録録画を公開し、オンタイムとオンデマンドで１年生、２年生が全員視聴した。 ダナン大学の参加者の方からは、「神戸市立看護大学とのオンラインセミナーに参加できて本当に感謝しています」「食品の無駄や損失への取り組みや、日本の伝統的な介護の実践について学ぶことができました。私たちは日本文化についても認識しているので、できるだけ早く日本と神戸市看護大学を訪問したいと思っています。」「将来的にはさらに世界的なオンライン交流が増えることを期待しています。」といった感想が聞かれ、両校にとって貴重な機会となったことがうかがえた。日本語-ベトナム語の通訳は看護師であり兵庫県立大学看護学研究科修士院生である So Hideko 氏に依頼し､双方の補完的な知識を得ることができた。

写真　ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流会

（３）企業との連携

2022 年４月にスタートアップ企業 Vitarrs（旧 T-ICU）と協定を結び、8 月 22 日に海外の災害支援に資する遠隔デバイスについて、教員や学生とともに意見交換を行った。

（４）日本で働く外国人看護師のキャリアの探究

神戸市の特別支援学校で働き､日本での受診経験がある ELT(English Learning Teacher)と兵庫県下で働く看護師と本学に来校したインドネシアの大学教員らと､キャリア開発や､本学への進学可能性やリカレント教育の可能性について検討した。 EPA（Economic Partnership Agreement：経済連携協定）で日本に来られ、姫路赤十字病院で働く看護師の話を伺った。EPA 制度で来日するまでの経緯、日本での経験、日本人の看護師と共に働く上での困難などを伺った。他にも神戸市内には一度 EPA で来日した後帰国し、再び日本の看護師として働いている者もいることがわかった｡またそれらの話から､自身のキャリア､家族、就職先施設からの期待などの理由から、目の前の仕事をこなすことで日が経ち、キャリアに対して相談するところや選択肢が多くないと感じていることがわかった｡一方で､日本に住む外国人保健医療者や居住者が、コロナ禍で国内に住む外国人移住者の対応をボ

ランティアとして行ってきたこともわかった。その中心となったネパール人看護師のヒアリングと合わせて考察すると、日本における外国人は急増しており、他方では、その影響が予想されるメガ災害は深刻な打撃を与え、対処が困難になるであろう。かなりの数の外国人を受け入れている日本では、特に危機や災害時に、移住者の健康と安全に対する懸念が高まることが予想される。日本には多くの外国人看護師や医師が在住しており、彼らは強力なボランティアとして同じ文化を持つ人々の命を救うことができる。同様に、メディアは災害リスク軽減における強力な利害関係者であり、インフォデミック(infofdemic)の時代において、自国の文化を理解したさまざまな年齢層に届く信頼できる必須情報を効果的に発信することが必要である。次に、グローバルに自国の健康問題に特化した遠隔医療サービスも最適化されるかもしれない。これは、特に医療施設を訪れる際に言葉や文化の壁を越えることに役立ち、また危機の際にも有用である。紹介医療施設は、患者の安全性とケアの質を向上させるために、遠隔医療アプローチを利用することができる。同様に、新たに日本に移住してきたばかりの人は国民皆保険制度を知らないことが多く、医療サービスに接触していないことが多いのは間違いない。これはまた、外国人が国民より高い疾病に罹患する理由のひとつでもある。危機発生時の膨大な事務手続きはサービス提供の遅れを引き起こすが、これは代替政策や柔軟な政策によって軽減することができるのではないか。 一方、平時の地域の中での外国人健康相談などのサポートのようなキャリアがあると、優先される人々がサービスを受けられなかったり、恩恵を受けられなかったりする理由や障壁、促進要因を見つけることができるのではないかということがわかった。

写真　インドネシアサヌディン大学の教員と本学学生の意見交換の風景

（５）English Extra

English Extra は年度初頭から継続して行っており、今年度これまでに前期 14 回、夏季休暇中 2 回、後期 14 回、春期休暇中 1 回の計 31 回開催した。また、Moodle を用いて英語学習のためのアドバイスの他､医療系の英語動画やネイティヴ教員による英語のコメント、図書館の新着英語教材などを継続して掲載し、学内の多様な方々にこの活動に参加してもらえるよう工夫している。登録者は現在、学部生、大学院生、教員を含む 59 名であり、前年度より増加している。

（６）異文化交流の推進

海外研修の経験を新年度のオリエンテーションで参加者が学部生に話す機会を設け、関心を持ってもらえることができた。今年度もシアトルを訪れた際に現地の大学生らと交流する機会があり異文化交流が推進された。ベトナム・ダナン大学の学生とオンライン交流会の中で、グループワークを発表し意見交換を実施した。　文化と国境を越えた看護の中で、オンラインで海外の看護師との交流・議論した。また、国際看護論の授業の中で、神戸市地域協働局の調査を紹介していただき学生が地域課題と異文化理解としての解決方法に関するグループワーク実施した。学生が多文化共生イベントで研究演習を実施した。

新カリキュラムでは語学科目でも英語と英語圏文化について専任のネイティヴ教員と日本人教員が扱い、学生たちの異文化理解を促している他、4 つの第二外国語科目の開講を通して学生たちがそれぞれの言語と文化について学ぶ機会を提供している。特に新カリキュラムのネイティヴ教員による 1 年生科目は前期を必修とし、後期は旧カリキュラムで 1 クラスにつき 37 名の 2 分級だった履修人数の上限を取り除いたため、前後期を通して 1 年生ほぼ全員が科目を履修し、英語や異文化に触れることができていることも確認できており、今後の交流を検討していく。

また、広報委員会と連携して、ホームページのリニューアルに合わせて英語ページについて検討し留学生の志願者に見てもらえるような工夫について協議した。

Ⅴ　保健師キャリア支援センターグループ

公衆衛生看護学分野　岩本 里織
いちかんダイバーシティ看護開発センター　磯濱 亜矢子

１．グループ概要

保健師キャリア支援センターは 2021 年 4 月に設置され、事務局を本学が担っている。主な活動内容は、兵庫県保健師人材育成ガイドラインに基づく人材育成研修や、キャリアアップを図るための相談･支援､保健師活動に関する調査研究や情報発信等、地域で活動される保健師の方々の資質向上につながる様々な取り組みを行っている。

２．グループメンバー

リーダー　　岩本里織
メンバー　　磯濱亜矢子、山下正、山田暢子、遠藤真澄

３．今年度の活動内容と実績

（１）保健師人材育成研修

１）新任期保健師研修会

①前期Ⅰ研修（オンライン研修）

1 年目相当（個別支援）

日時：2023 年 5 月 18 日（木）　9:30～12:00

内容：講義「個別支援」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉比佐子 氏

講義「個別支援としての家庭訪問（1 年目）」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課　職員　長谷川莉沙 氏

参加者数：79 名（新任期保健師 65 名、聴講者 14 名）

2 年目相当（地域診断）

日時：2023 年 5 月 23 日（火）　9:30～12:00

内容：講義「地域診断」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉比佐子 氏

講義「地域診断（2 年目）」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 主査 西原沙織 氏

参加者数：88 名（新任期保健師 81 名、聴講者 7 名）

3 年目相当（地域診断）
日時：2023 年 5 月 25 日（木）　9:30～12:00
内容：講義「地域診断に基づく事業計画と評価について」
講師：神戸大学大学院 教授 和泉比佐子 氏
講義「地域診断に基づく PDCA（事業計画と評価）（3 年目）」
講師：兵庫県保健医療部健康増進課 主査 西原沙織 氏
参加者数：66 名（新任期保健師 52 名、聴講者 14 名）

②前期Ⅱ研修
1 年目相当（個別支援）
日時：2023 年 9 月 6 日（月）　10:00～16:30
場所：神戸国際会館　9 階 大会場
内容：先輩保健師からの講話「2 年目保健師として伝えたいこと」
講師：明石市子ども局子ども健康課 保健師 橋本梨紗 氏
グループワーク「日頃の活動の振り返り」
「課題の取組について共有・意見交換」
参加者数：79 名（新任期保健師 63 名、ファシリテーター16 名）
2 年目相当（地域診断）
日時：2023 年 9 月 21 日（木）　10:00～16:30
場所：神戸国際会館　9 階 大会場
内容：先輩保健師からの講話「後輩保健師に伝えたいこと」
講師：伊丹市健康福祉部健康政策課 職員 加地優香 氏
グループワーク「日頃の活動の振り返り」
「課題の取組について共有・意見交換」
参加者数：98 名（新任期保健師 78 名、ファシリテーター20 名）
3 年目相当（地域連携）
日時：2023 年 9 月 27 日（水）　10:00～16:30
場所：神戸国際会館　9 階 大会場
内容：先輩保健師からの講話「新任期保健師に伝えたいこと」
講師：丹波健康福祉事務所企画課 職員 中井菜緒 氏
グループワーク「日頃の活動の振り返り」
「課題の取組について共有・意見交換」
参加者数：61 名（新任期保健師 50 名、ファシリテーター11 名）

③後期研修
1 年目相当（個別支援）
日時：2024 年 1 月 12 日（金）　10:30～16:00
場所：兵庫県民会館　11 階 パルテホール
内容：中堅期保健師からの講話「個別支援の実際」
講師宝塚健康福祉事務所 主査 島垣友絵 氏

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」
参加者数：79 名（新任期保健師 63 名、ファシリテーター16 名）
2 年目相当（地域診断）
日時：2024 年 1 月 18 日（木）　10:30～16:00
場所：神戸国際会館　9 階 大会場
内容：中堅期保健師からの講話「地域診断の実際」
講師：西宮市保健所地域保健課山口保健チーム 橋本愛美 氏
グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」
参加者数：95 名（新任期保健師 75 名、ファシリテーター20 名）
3 年目相当（地域連携）
日時：2024 年 1 月 26 日（金）　10:30～16:00
場所：中央区文化センター　1 階 多目的ホール
内容：中堅期保健師からの講話「PDCA に基づく保健活動」
講師：たつの市健康部地域包括支援課 保健師 原田佳奈 氏
グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」
参加者数：60 名（内訳：新任期保健師 47 名、ファシリテーター13 名）

２）プリセプター研修会
日時：2023 年 6 月 29 日（木）13:30～16:30
場所：中央区文化センター　1 階 多目的ホール
内容：講義「新任保健師の個別支援能力を高めるプリセプターシップ～新任期の強みや特性を活かして～」
講師　甲南女子大学看護リハビリテーション学部　教授　合田加代子 氏
グループワーク「新任期保健師の現状を踏まえたプリセプターとしての支援のあり方～個別支援能力の向上に焦点を当てて～」
助言者 甲南女子大学看護リハビリテーション学部　教授　合田加代子 氏
趣旨説明及びグループワーク
「新任期保健師現任教育計画の策定と活用について」
講師　兵庫県保健医療部健康増進課 主査　西原沙織 氏
参加者数：43 名（健康福祉事務所 16 名、中核市 11 名、市町 16 名（トレーナー保健師 4 名再掲））

３）地域ケアの総合調整研修
①公開講座
日時：2023 年 12 月 15 日（金）　13:30～16:30
場所：センタープラザ西館会議室　17 号室
内容：講義「地域活動において、科学的手法（調査研究）を用いて疑問や課題を明らかにする必要性とその手法」
講師：武庫川女子大学看護学部 教授 和泉京子 氏

実践報告会

①宍粟市「いきいき百歳体操自主グループの活動継続に関連する要因」
報告者：宍粟市健康福祉部福祉相談課 係長 吉田典子 氏

②淡路市「後期高齢者の健康課題の分析について」
報告者：淡路市健康福祉部健康増進課 課長補佐 水田明子 氏

③洲本市「保護者が抱えている子育てのしづらさや子育て環境における課題～保健師等が認識している課題を明らかにする～」
報告者：洲本市健康福祉部健康増進課 保健師 片井沙織 氏

④総評（サポート講師）
武庫川女子大学看護学部　教授　金谷志子 氏
関西看護医療大学看護学部 教授　伊木智子 氏
神戸市看護大学看護学部　講師　山下 正 氏

課題解決に向けた助言・指導
講師：武庫川女子大学看護学部　教授　金谷志子 氏
教授 和泉京子 氏
講師 松井菜摘 氏
神戸市看護大学看護学部 教授 岩本里織 氏
講師 山下正 氏

参加者数：16 名（健康福祉事務所 3 名、中核市 8 名、市 5 名）

②課題研修

保健活動における課題や疑問を選定し、科学的手法を用いて課題や疑問を明らかにするための計画書を作成する。計画に基づき調査等を行い、課題や疑問を明確化する。取り組みの成果について学術集会や報告会等の場を活用して公表し、意見交換を行い、成果に基づく方策など現場への活用を提案する。

期間：2022 年度～2023 年度

内容：サポート講師の助言のもと、チームで検討したいテーマに沿って調査や事業の検討を行い、根拠に基づいた保健事業の展開につなげる。

参加状況：3 市
①宍粟市：テーマ「高齢者保健」、サポート講師 武庫川女子大学
②淡路市：テーマ「高齢者保健」、サポート講師 関西看護医療大学
③洲本市：テーマ「母子保健」、サポート講師 神戸市看護大学

（２）保健師キャリア支援（再就業支援含む）

１）保健師キャリア相談

県内の保健師（保健師免許保有者）を対象として、活動に関する具体的な相談（事業、個別支援等）、スキルアップやキャリアラダーに関すること等保健師活動全般に関する相談窓口を開設している。今年度の相談実績は 5 件で、相談内容は、研修講師の紹介や、キャリアアップに関する相談などであった。必要に応じて相談ができる窓口をさらに周知する必要がある。

2023 年度の相談実績

番号	相談方法	相談概要
1	メール	対象者との人間関係の構築について
2	電話	休職復帰時の学習教材について
3	メール	仕事の適性について
4	メール	研修会の講師の紹介について
5	ZOOM	看護師から保健師への転職について
6	ZOOM	個別支援について
7	電話	研修会講師の紹介について
8	電話	求人の相談
9	ZOOM	キャリアアップについて

２）保健師就業・復職支援研修会

日時：2024 年 2 月 16 日（金）10:30～16:00

場所：センタープラザ西館会議室　17 号室

対象：行政保健師として求職中の者（新卒除く）

内容：講義「最近の保健・医療・福祉の動向と兵庫県における保健施策について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 主査 西原沙織 氏

講義「兵庫県における保健師活動」

講師:兵庫県保健医療部健康増進課 班長兼健康政策班主幹 岸本和子 氏

講義「神戸市の保健師活動」

講師：神戸市健康局健康企画課 担当係長 大澤和恵 氏

講義「市町における保健師活動の実際について」

講師：淡路市健康福祉部健康増進課 課長補佐 水田明子 氏

現職保健師との座談会（実地見学オリエンテーション含む）

助言者:兵庫県保健医療部健康増進課 班長兼健康政策班主幹 岸本和子氏
主査 西原沙織 氏
神戸市健康局健康企画課 担当係長 大澤和恵 氏
保健師 眞野愛梨 氏
淡路市健康福祉部健康増進課 課長補佐 水田明子 氏
神戸市看護大学 教員

参加者：8 名（受講者 2 名、聴講者 6 名）

３）オンデマンド研修

①先駆的保健活動の紹介

複数の自治体の活動を取材して準備中

②新任期保健師研修

a. 課題説明

1 年目～3 年目の課題の取り組み方について

新任期研修（前期Ⅰ）の抜粋版をオンデマンド配信

b. 先輩保健師の講話（2022 年度分のみ配信中。2023 年度分は準備次第配信予定）

・2 年目保健師の講話（2022 年 10 月に開催した新任期研修での講話）

テーマ：２年目の保健師として伝えたいこと

講師：宝塚健康福祉事務所 職員 元木晴香 氏

・3 年目保健師の講話（2022 年 10 月に開催した新任期研修での講話）

テーマ：後輩保健師に伝えたいこと～これまでの保健師活動を振り返って～

講師：姫路市保健所予防課 保健師　田川若奈 氏

・4 年目保健師の講話（2022 年 10 月に開催した新任期研修での講話）

テーマ：新任期保健師に伝えたいこと

講師：加東市健康福祉部健康課 保健師 吉田里奈 氏

c. 中堅期保健師の講話（2022 年度分のみ配信中。2023 年度分は準備次第配信予定）

・個別支援について（2023 年 1 月に開催した新任期研修での講話）

テーマ：個別支援の実際

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 職員 長谷川莉沙 氏

・地域診断について（2023 年 1 月に開催した新任期研修での講話）

テーマ：地域診断の実際について

講師：兵庫県伊丹健康福祉事務所 主査 西原沙織 氏

４．公衆衛生看護等に資する調査研究

現在、以下の研究課題の研究に取り組んでいる。

１）保健師のキャリア支援に関するニーズと支援体制に関する研究

２）職歴を考慮した新任期保健師の人材育成支援に関する研究

３）保健師の産休・育休復帰支援に関する研究

５．2023 年度の活動の振り返り

兵庫県保健師キャリア支援センターでの取組を開始して 3 年の節目を迎え、当センターが運営する活動の大枠は定着しつつある。今年度は事業実施にあたってコロナ禍の影響もほぼなくなり、対面を基本とした人材育成を進めることができた。新任期保健師研修会については、昨年度に引き続き、研修課題の実践時間を確保するスケジュール設定及びグループワーク、先輩からの学びの場を毎回企画したところ、有意義であったと大変好評であった。特に中堅期保健師によるテーマ別の講義は、研修として取り組んでいることが地域でどのように展開されているのかという具体的な理解から、研修課題に取り組む意義の認識につながっていた。また、地域ケアの総合調整研修では、今年度は公開講座に併せて実践報告会を行い、根拠に基づく保健活動の必要性の理解と実践への後押しにつながった。研修を通じて、活動の課題を明確にするとともに、行政機関と大学の協働体制の強化につなげていきたいと考える。また、保健師就業・復職支援研修会に

よる潜在保健師の活用を目指した研修も実施し、全ての研修において概ね高評価を得た。他県からも当センターの活動への照会があるなど、どの地域でも重要課題である人材育成について、さらに充実、定着させていくことが求められる。そのためには、県内の自治体保健師及び看護系大学教員の協力が不可欠であり、県内全体で人材育成を進めていく機運を一層高め、継続して質の高い研修を実施していくことが重要である。

今後は、活動を通じて把握したニーズをもとに、関係機関とも協議しながら進め、さらに充実した人材育成とネットワークの強化につなげていきたいと考える。

Ⅵ　地域保健支援グループ

いちかんダイバーシティ看護開発センター　磯濱 亜矢子
公衆衛生看護学分野　岩本 里織

１．グループ概要

地域保健支援グループでは、保健師等の専門職が行う地域の保健活動及び地域住民の健康を支援することを目指した活動を行っている。

現在の主な活動内容は、保健師の採用が増えた状況下での人材育成の支援や、地域の健康課題に基づく活動の検討などに取り組んでいる。

２．グループメンバー

リーダー　　磯濱亜矢子
メンバー　　岩本里織、山下正、山田暢子、遠藤真澄

３．今年度の活動内容と実績

（１）地域の保健活動への支援

１）神戸市新任期保健師人材育成支援事業（神戸市からの委託事業）

県下の自治体の保健師採用状況は、新卒、職歴を有する者（看護師、保健師等）、年度途中の採用等多岐にわたっており、一律に人材育成を行うことが難しい現状がある。しかし、公衆衛生看護活動において個別支援は基本であり、対象者と信頼関係を築き、生活者としての価値観を的確に捉えて支援につなげることのできる資質を育成することがとても重要である。

神戸市から委託を受けた「神戸市新任期保健師人材育成支援事業」を通して、新任期保健師の家庭訪問や健康相談における保健指導について具体的な助言指導を行い、保健師としての能力向上をはかるための支援を行った。具体的には、担当する保健センターの要請に基づき、個別支援（家庭訪問）計画について助言指導を行い、同行訪問を行っている。訪問後は新任期保健師及び指導保健師（または係長）と面談し、家庭訪問を振り返ることで、新任期保健師一人ひとりについて今後の個別支援における課題を整理し、今後の保健師活動につなげるよう助言指導を行った。今年度は対象保健師 4 名に対し、6 日 12 回の指導を行った。実施に対する評価については、昨年度と同様にトレーナー保健師の利用はとても役に立つものであり、多くの保健師がまた利用したいと回答していると神戸市より報告があった。その理由と

して、個別支援にあたって多角的視点につながったことや、自分自身が到達しているところと今後の課題について理解することができたことなどを挙げ、この取組により事例にじっくり向き合うことができたからこそ得られた学びであると認識していた。

2023 年度の支援状況

回数	相談方法	相談概要
1	面談	個別事例の計画指導
2	同行訪問	同行訪問
3	面談	振り返り
4	面談	個別事例の計画指導
5	同行訪問	同行訪問
6	面談	振り返り
7	面談	個別事例の計画指導
8	同行訪問	同行訪問
9	面談	振り返り
10	面談	個別事例の計画指導
11	同行訪問	同行訪問
12	面談	振り返り

２）神戸市新任期研修への講師派遣

神戸市からの依頼により、下記の研修の講師として支援を行った。

①ステップアップ研修

日時：2023 年 11 月 21 日（火）9:00～12:00

場所：神戸市職員研修所　第二研修室

対象：神戸市保健師（キャリアレベル A3 以上）

内容：講義「ファシリテーションによる事例検討会の進め方」

「多角的なアセスメントの視点、アセスメントを深める視点」

講師　　神戸市看護大学 教授 岩本里織 氏

グループワーク

参加者数：23 名

②地域診断研修

【第 1 回】

日時：2023 年 10 月 25 日（水）9:00～12:00

場所：職員研修所 第一研修室

対象：神戸市の新任期保健師（キャリアレベル A0～A2）

内容：講義「地域診断に必要な基礎知識について」

「アセスメント、健康課題の抽出について」

講師　　神戸市看護大学 講師　山下 正 氏

例示紹介及びグループワーク
ファシリテーター　神戸市看護大学 教授 岩本里織 氏
神戸市看護大学 講師 山下 正 氏
神戸市看護大学 特任講師 磯濱亜矢子 氏
参加者数：24 名

【第 2 回】
日時：2023 年 11 月 27 日（月）14:30～17:30
場所：神戸市役所四号館 1 階 本部員会議室
対象：神戸市の新任期保健師（キャリアレベル A0～A2）
内容：講義「アセスメント、健康課題の抽出について」
「健康課題に対しての目標設定、計画立案、実施評価について」
講師　神戸市看護大学 特任講師 磯濱亜矢子 氏
グループワーク
ファシリテーター　神戸市看護大学 教授 岩本里織 氏
神戸市看護大学 講師 山下 正 氏
神戸市看護大学 特任講師 磯濱亜矢子 氏
参加者数：21 名

（２）地域住民の健康課題に対する支援

2021 年 2 月に実施した「コロナ禍における神戸市西区学園都市地区の生活習慣と健康に関する調査」結果について再分析し、報告書をまとめた。調査では、学園都市地区の住民は健康づくりへの関心が高く、コロナ禍であっても定期的な医療機関受診や健康診断の受診を控えることなく、生きがいやはりを持って生活されている方が 7～8 割に上ることがわかった。また、インターネット等の利用や大学への要望等今後の地域貢献事業の示唆を得ることができた。対象地区の住民に対しては、概要版を配布し周知する予定である。

住民調査研究班：岩本里織（責任者）
共同研究者：片倉直子、加藤憲司、小山富美子、坪井桂子、藤岡神奈、船越明子、水川真理子、山下正
研究協力者：遠藤真澄
報告書作成者：岩本里織（責任者）、磯濱亜矢子、遠藤真澄、勝田玲子、水川真理子、山下正、山田暢子

４．2023 年度の活動の振り返り

神戸市への人材育成支援については、個別事例の支援能力向上への支援や、新任期から中堅期保健師を対象とした研修等を通して、大学の立場で行政機関の人材育成を支援し、協働して地域の人材育成に取り組んだ。また、地域住民の健康課題に関する実態を把握し、今後の地域貢献事業につなげる示唆を得ることができた。

今後も引き続き、様々な側面から地域保健活動を支援することで、大学の立場で専門職並びに地域住民の皆様の健康支援につなげていきたいと考える。

Ⅶ　臨床看護連携グループ

小児看護学分野　二宮 啓子

１．　グループ概要

本グループは、①看護職者が主体的に自分のキャリア開発を考え行動できるように、看護師の生涯教育支援と神戸市内の看護師の臨床看護実践能力の強化、②地域に看護人材を供給するために、看護師の就業継続支援や復職支援、③大学教員の臨床能力と神戸市民病院機構の看護職員の教育能力の向上を目指した神戸市民病院機構との相互連携システムの構築を目的に活動を行っている。

２．グループメンバー

リーダー　　二宮啓子

メンバー　　澁谷幸、高山良子、内山孝子、鈴木和代、新澤由佳、原朱美、佐藤智夫

３．2023 年度の活動内容及び結果

１）看護専門職講座

2023 年度がん看護市民公開講座として､「今を生きるコツ～よりよく生きるために～（講師：病院チャプレン・カウンセラーの沼野尚美氏)」を 10 月 7 日（土）に開催し、84 名（約半数が看護職・医療福祉関係者）が参加した。これまで 10 か所のホスピスで勤務し、3000 人以上の患者の生と死に寄り添ってきた講師の体験から、今を生きる人々に「大切な５つの生き方（前向きに生きる、ユーモアをもって生きる、感謝して生きる、ベッドの上でもできる趣味をもって生きる、家族の絆を育てて生きる)」を伝えた。アンケートの回収数（率）は、56 名（67%）であった。参加者の満足度は非常に満足した（46 名）と少し満足した（7 名）を合わせて 94%であった。仕事や今後の過ごし方に役に立つと回答した方は、非常に役に立つ（44 名）と少し役に立つ（10 名）を合わせて 96%と好評であった。参加者からの意見や感想としては、「豊かな死に向けての具体的な準備がしれてよかった。」や「今日からでも実行できる内容ばかりでやっていこうと思った。」等であった。また、西区のコミュニティータウン誌に 1 ページの記事として、取り上げられた。

２）兵庫県看護協会と連携した新人看護師育成に関する支援

2023 年度は兵庫県看護協会を介しての新人看護師教育の支援依頼がなかったため、新人看護師育成に関する支援は実施しなかった。

３）神戸市民病院機構と本学の相互連携システム構築の促進

神戸市西神戸医療センターより 2023 年度 2 年目の看護師研修に関する本学への協力依頼があった。依頼のあった 2 年目の看護師研修「救急時の対応」を 9 月 13 日・14 日に本学実習室Ⅲで開催した。研修自体は西神戸医療センターの看護部が実施したが、事前打ち合わせや会場・物品の手配等を行った。受講生・指導担当者から、「大学の実習室は病室の環境のようで臨場感があった」や「病院から離れて別の場所で研修することで研修に集中できた」等の感想が寄せられた。

5 月に市民病院機構の看護部長、副部長と本学教授との会議をオンラインで開催し、卒業生の適応状況や看護職者の大学院進学状況等の情報共有を行うとともに、市民病院機構と大学との人事交流の方法を検討した。その後も定期的に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により、会議の開催が途切れてしまった。また、看護系教員の臨床能力を高めるための臨床研修制度を活用した教員は、新型コロナウイルス感染拡大等により 10 月末で 1 人であったため、看護系教授の会において各看護学分野で臨床研修が可能な時期を提示し利用を促すように依頼したが、臨床研修制度を活用する教員を増やすことはできなかった。

また、神戸市立病院紀要の編集委員の依頼があり、看護論文 1 件の査読を行うとともに、12 月 21 日の編集委員会に出席した。

Ⅷ　災害看護グループ

災害看護・国際看護学分野　神原 咲子

１．グループ概要

災害看護グループは、災害や新たな疾病等の健康危機に備え、災害時における福祉避難所の支援などの本学の役割の検討を含め、災害看護における教育・研究・実践活動を行うグループとして結成された。2023 年度の主な活動は、災害への備えとして、須磨区避難所運営訓練、国民保護訓練、兵庫県自治体研修などへの協力をし、本学の災害看護対応や新たな地域ニーズを検討した。本看護系大学協議会の災害支援対策委員会の関西・近畿ブロック：兵庫小ブロックのリーダー校としての取り組みを通じて、本学及び兵庫ブロックの防災・減災に関する現状とニーズを把握し、今後の課題を明らかにした。

２．グループメンバー

リーダー　　神原咲子
メンバー　　池田清子、岩本里織、山岡由実、畑中あかね、
　　水川真理子、山下正、後藤由紀子

３．2023 年度の取り組み内容と結果

（１）各種避難防災研修等への協力とフィールドワーク調査

6 月 16 日に、まちの保健室で自助や地域防災をトピックスにした、「防災の日常化～日頃からできる安心づくり～」の講義を行い、地域住民 11 人の参加が得られた。

また、12 月 3 日の須磨区の防災訓練に学生５名と教員１名が参加協力した。この訓練は、白川防災福祉コミュニティーが主催で、学校への段ボールベッド・テントの組み立て、非常食の配布など避難所開設の初動対応の実際を訓練した。訓練中、学生は避難訓練や避難者・要援護者の受け入れを実演し、教員がプログラムの監修と実施後の講評と、一緒に避難する場合の心構えや日ごろの準備などについて解説をした。

訓練の中で、人はみなそれぞれの暮らしがあり、その中で安心な場所を考えるためにも訓練に参加することに意義があるということ、人によってそれは多様であり、支援者がそれに気づくことも難しいことから、自分自身の備えから始めることが重要であることを、具体例とともに話した。さらに、避難訓練でその様子を体験したことを、大学で作成したセルフケアノートを使って考えてもらった。そして、個別避難計画や地区防災計画をたてることの重要性を述べた。

須磨区が実施したアンケートでは、59 名中 57 名が今回の避難訓練は有意義であったと回答があった。自由回答から、参加者は南海トラフ地震への備え、避難所の重要性、役割分担、ペット同行避難などについて学び、有益だと感じていたことが分かった。多くの初参加者が防災意識の向上を実感し、訓練内容にも満足していた。しかし、訓練の緊張感不足や段ボールベッドの使いにくさが指摘された。また、小学生の参加が少なく、寒い時期の実施に対する意見もあったことが課題としてあがった。全体として、防災訓練の意義を再確認し、地域の協力の重要性を感じた意見が多く見られた。

他にも、2024 年に開催されるパラ陸上に向けた国民保護訓練に学生と教職員が 5 名参加した。本訓練においては、神戸市危機管理室と連携協力し、地域連携を促進することで、地域の障害者関係団体の 10 名が訓練に参加することができた。これらの訓練の実施や能登地震での教訓を踏まえて、県職員、防災士対象の兵庫県職員研修において、本学の教員が講師を引き受け、地域の新たなニーズへの対応を議論した。来年度、蓄積された具体的ニーズに対して分析し対策に活かす予定である。

授業では、市民総合防災センターの VR 教材について紹介し、災害看護訓練での利活用について検討し、公開講座などで学生からどのように利活用をすれば良いかの意見交換を行った。

写真 1. 区の備蓄を用いた避難体験

写真 2. 本学学生と参加者による要配慮者役割の体験

写真 3. 市民総合防災センター職員と本学学生との意見交換

（３）JANPU（日本看護系大学協議会）の活動

JANPU の会議に参加し、本学に期待される役割について各大学の担当者と議論しながら、着実に連携してきている。また COVID-19 の対応についてこれまでの内容をまとめつつ要請があれば活動ができる準備もできている。JANPU の防災マニュアルなどを参考にしつつ大学の防災体制を理解し、今後の地域の新たなニーズへの対応を検討している。

（４）科研費を用いた調査

神原が代表者となる科研費を用いた「災害リスクに対する認識を用いた合意形成と減災ケアの創出」ついての調査の成果物の、地区防災計画づくりのワークショップパッケージを「ぼうさいこくたい 2023」のなかで紹介した。参加者は 30 名で、今後使用したいという意見をいただき、高知県の女性防災リーダー講習において使用された。

（５）その他

2024 年 11 月に、第 8 回世界災害看護学会を本学で開催することが決まり、その準備として、関係団体と準備に向けた調整を行なった。

本学の災害看護・国際看護学分野が、世界防災研究所連合に加入することとなり、本学の災害看護の取り組みと国際共同研究の可能性を模索しており、来年度は多くの災害の研究者が来学する予定である。

Ⅸ リカレント教育グループ

慢性病看護学分野　池田 清子

１．チーム概要

看護師のリカレント教育事業は、2023 年度からグループに位置づけられている。本事業は、昨年に引き続き、地元創成看護を担う看護師リカレント教育プログラムとして開講した。プログラムのテーマは昨年と同じ「きらり、看護技術を学べる」である。

本事業の実施及び評価は、本学の教職員が担当した。

２．チームメンバー

リーダー　池田清子
メンバー　小山富美子、高山良子、畑中あかね、石橋信江、丸尾智実、二宮啓子、澁谷幸、内山孝子、新澤由佳、後藤由紀子
（事務職員）北正明、植村茉菜美、高橋仁美

３．事業概要と成果

本教育プログラムは、神戸市看護大学、神戸市民病院機構、兵庫県看護協会、各技術の専門家等の協力を得ながら、受講生の方々がそれぞれのニーズに沿って、最新の看護技術や知識を学べるものである。

期間は 2023 年 9 月 28 日から 12 月 4 日の約 2 か月であった。社会人が学びやすいよう講義中心の科目ではオンライン授業を積極的に取り入れ、技術演習は対面授業とした。

プログラムは「地域包括ケア」「キャリア開発」を必須科目とし、「フットケア」「キネステティク」「糖尿病看護面接技術」「エンド・オブ・ライフケア」「清潔ケア」「エンゼルケア」の選択科目で構成した。また、昨年と同様、転職、就職希望者にはキャリア相談の機会も設けた(図 1、2)。

受講生は 13 名でプログラムの途中で１名が辞退された。修了式に実施した受講生対象のアンケートからプログラムの成果としては、就職・転職への意欲が向上したのは 75%で、受講後に、就職・転職の情報サイトへの登録 4 名、ナースセンターへの登録 3 名、ハローワークの利用 1 名する等、就職・転職の行動につながっていた。看護実践への自信につながったのは 100%で、受講後に現場の看護実践で活用しようと考えている・活用した、授業で興味を持った事を本や資料で調べるなど現場の実践に生かそうとする行動につながっていた。

自由記載のコメントでは、「学びなおすことで学習意欲が高まり、より深く物事を考えら

れるようになった。」「忙しすぎる毎日を立ち止まり考える機会になった。」「自分の仕事優先で待てない自分がいた。患者優先、患者中心でなければならないと改めて思う。」等受講生の看護や就業への意識に変化があったことが伺えた。

また、今年度も受講生同志の関係は良好で、互いを理解し、高めあうことができていた。

今後の課題としては、定員確保、費用・マンパワー・時間的に持続可能なプログラムにすることがある。そのためには、(1) 広報の工夫、(2) 受講料の有料化、(3) 開講期間の見直し、(4) 見学実習の実施があげられる。

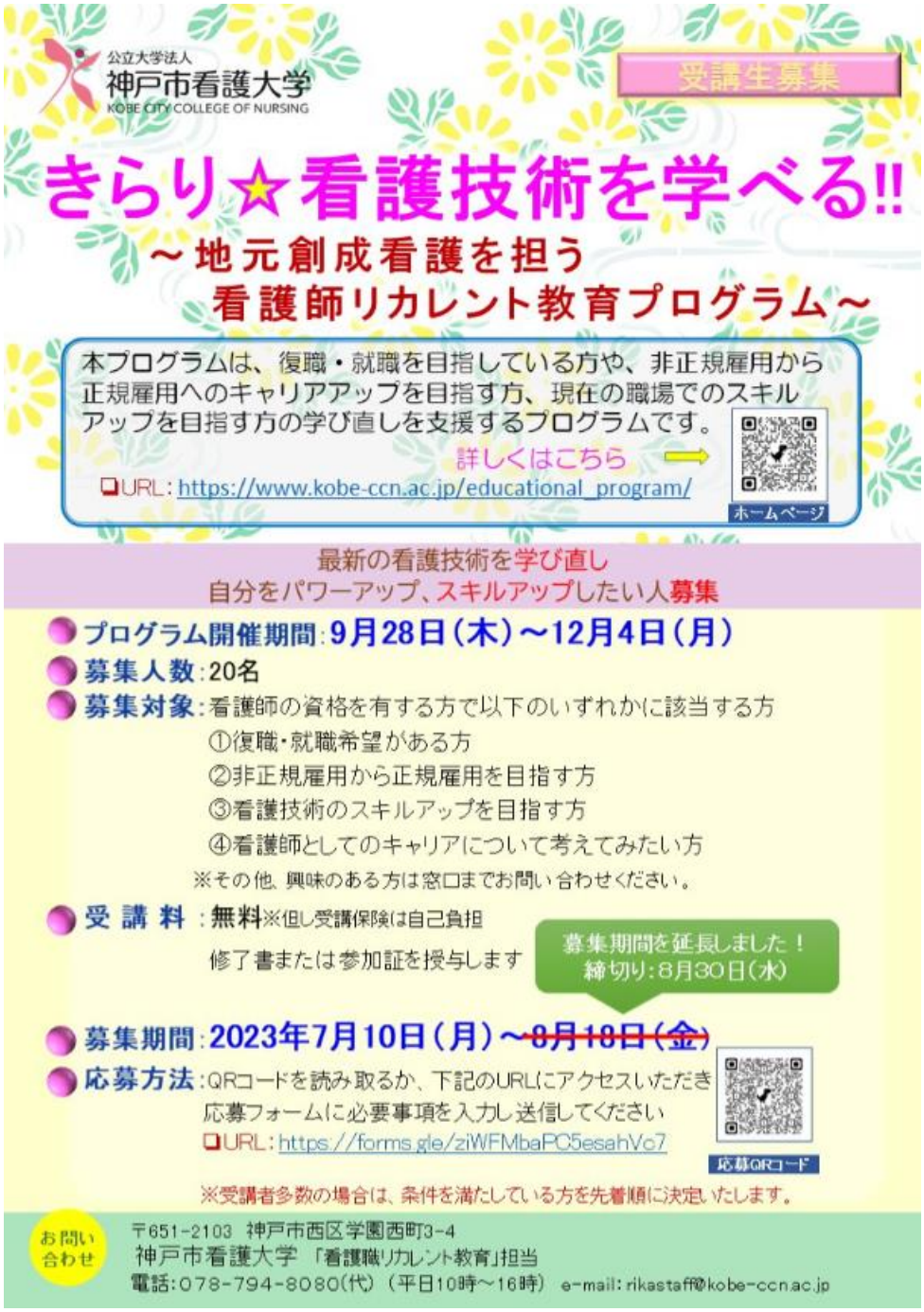


図 1　2023 年度リカレント教育プログラム募集チラシ

２０２３年度　地元看護を担う看護師リカレント教育　時間割表

⇒大学対面
⇒オンライン
※感染拡大状況によっては、対面授業がオンライン授業に変更になる可能性があります

2023年		1時間目			2時間目			3時間目			4時間目		
月日	曜日	10：00～11：00			11：10～12：10			13：10～14：10			14：20～15：20		
		科目名	形式	講師	科目名	形式	講師	科目名	形式	講師	科目名	形式	講師
9月28日	木							開校式		キャリア相談（14:00～14:40）			
10月2日	月	エンゼルケア		大垣	エンゼルケア		大垣	エンゼルケア		大垣			
10月4日	水							キャリア開発（1）		澁谷			
10月5日	木												
10月9日	月												
10月11日								地域包括ケア（1）		丸尾			
10月12日	木	エンド・オブ・ライフケア　【1日目】　9時～17時　（高山・外部講師）											
10月16日	月							フットケア　【１日目】　13時～17時　（池田・後藤・外部講師）					
10月17日	火	フットケア　【２日目】　9時30分～15時30分　（池田・後藤・外部講師）											
10月21日	土	エンド・オブ・ライフケア　【２日目】　9時～17時　（高山・外部講師）											
10月23日	月	地域包括ケア（2）		金中									
10月26日	木												
10月30日	月												
11月2日	木												
11月6日	月				清潔ケア		内山/澁谷	清潔ケア		内山/澁谷	清潔ケア		内山/澁谷
11月9日	木	キネステティク　【１日目】　9時30分～16時30分　（新澤・外部講師）											
11月13日	月				清潔ケア		内山/澁谷	清潔ケア		内山/澁谷	清潔ケア		内山/澁谷
11月16日	木	キネステティク　【２日目】　9時30分～16時30分　（新澤・外部講師）											
11月22日	水	糖尿病看護面接技術　【１日目】　10時～16時30分　（畑中ほか）											
11月27日	月	糖尿病看護面接技術　【２日目】　10時～16時30分　（畑中ほか）											
11月29日	水							キャリア開発（2）		澁谷			
11月30日	木												
12月4日	月							修校式					
		1時間目			2時間目			3時間目			4時間目		
		10：00～11：00			11：10～12：10			13：10～14：10			14：20～15：20		

図 2　2023 年度リカレントプログラム　時間割

業績一覧

いちかんダイバーシティ看護開発センター関連研究業績一覧

（2023 年度）

論文

(1) 坪井桂子, 石橋信江, 秋定真有,　蒲谷苑子（2023）:　認知症フレンドリー社会の創成に向けた多様なイニシアチブの活動, 神戸市看護大学もの忘れ看護相談；認知症の人にやさしいまち神戸の一拠点としての看護実践を通して. 老年精神医学雑誌 34(5), 503-509.

(2) 水川真理子 (2023): 在宅医療を支える遠隔チーム医療 慢性心不全患者における遠隔モニタリングシステムを用いた疾病管理. 日本循環器看護学会誌 18(2) 19-21 2023 年 7 月

学会発表

(1) 蒲谷苑子, 坪井桂子, 石橋信江, 秋定真有（2023）: 看護大学における「もの忘れ看護相談」のコロナ禍 3 年間の現状からみた支援のあり方. 日本老年看護学会第 28 回学術集会.

(2) 水川真理子, 谷知子, 片倉直子, 石橋信江, 畑中あかね, 磯濱亜矢子, 勝田玲子 (2024) : オンラインナーシング増悪予防プログラムが有効であった慢性心不全高齢患者の一症例. 第 88 回日本循環器学会学術集会, 神戸　2024 年 3 月

(3) 磯濱亜矢子, 岩本里織, 山下正, 山田暢子, 遠藤真澄（2023）: COVID-19 流行下に採用された新任期保健師の実態. 第 82 回日本公衆衛生学会総会, 筑波　2023/10-11 月

(4) 磯濱亜矢子, 岩本里織, 山下正, 山田暢子, 遠藤真澄, 山下久美, 西原沙織（2023）: 新任期保健師の職歴の違いによる保健師活動等の認識と望む支援について. 第 12 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 北九州　2024 年 1 月

その他

(1) 神戸市看護大学がん看護市民公開講座「今を生きるコツ～よりよく生きるために～」. ビバ！ニュータウン　2023 年 11 月 8 日号　vol822 (4) NPO 法人 ビバ・ニュータウン発行

センターの組織

2023 年度いちかんダイバーシティ看護開発センター組織

センター長　岩本　里織
副センター長　片倉　直子

地域連携グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	片倉　直子	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	片山　修	人間科学領域　　自然科学分野
	神原　咲子	基盤看護学領域　　災害看護･国際看護学分野
	丸尾　智実	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	水川　真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	中川　惠津子	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	勝田　玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

健康支援グループ＜オンライン健康相談班＞

	氏　名	所　　属
リーダー	岩本　里織	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	片山　修	人間科学領域　　自然科学分野
	坪井　桂子	健康生活看護学領域　老年看護学分野
	林　千冬	基盤看護学領域　　看護管理学分野
	井上　理絵	健康生活看護学領域　ウイメンスヘルス看護学分野
	小山　富美子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	磯濱　亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	畑中　あかね	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	水川　真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下　正	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	遠藤　真澄	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	関口　瑛里	健康生活看護学領域　精神看護学分野
	山田　暢子	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	宮島　朝子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

	勝田　玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

健康支援グループ＜慢性疾患重症化予防オンラインナーシング班＞

	氏　名	所　　属
リーダー	水川　真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	片倉　直子	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	谷　知子	専門基礎科学領域　　医科学分野
	石橋　信江	健康生活看護学領域　老年看護学分野
	磯濱　亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	畑中　あかね	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	宮島　朝子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	勝田　玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

在宅ケア支援グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	片倉　直子	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	片山　修	人間科学領域　　自然科学分野
	船越　明子	健康生活看護学領域　精神看護学分野
	小山　富美子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	丸尾　智実	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	水川　真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	大瓦　直子	健康生活看護学領域　在宅看護学分野
	勝田　玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

国際交流グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	神原　咲子	基盤看護学領域　　災害看護･国際看護学分野
	髙木　廣文	神戸市看護大学　　特任教員
	林　千冬	基盤看護学領域　　看護管理学分野
	山内　理惠	人間科学領域　　言語科学分野
	クロスビ　アダム	人間科学領域　　言語科学分野
	佐藤　隆平	療養生活看護学領域　急性期看護学分野
	樋口　佳耶	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	勝田　玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

保健師キャリア支援センターグループ

	氏　名	所　　属
リーダー	岩本　里織	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	磯濱　亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下　正	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	遠藤　真澄	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	山田　暢子	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野

地域保健支援グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	磯濱　亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	岩本　里織	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	山下　正	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	遠藤　真澄	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	山田　暢子	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野

臨床看護連携グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	二宮　啓子	療養生活看護学領域　小児看護学分野
	澁谷　幸	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	内山　孝子	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	原　明美	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	鈴木　和代	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	高山　良子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	岩井　詠美	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	佐藤　智夫	療養生活看護学領域　急性期看護学分野
	新澤　由佳	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	山本　陽子	療養生活看護学領域　小児看護学分野

災害看護グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	神原　咲子	基盤看護学領域　　災害看護･国際看護学分野
	池田　清子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	岩本　里織	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	畑中　あかね	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	水川　真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下　正	健康生活看護学領域　公衆衛生看護学分野
	後藤　由紀子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	花井　理紗	基盤看護学領域　　看護管理学分野

リカレント教育グループ

	氏　名	所　　属
リーダー	池田　清子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	澁谷　幸	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	二宮　啓子	療養生活看護学領域　小児看護学分野
	石橋　信江	健康生活看護学領域　老年看護学分野
	内山　孝子	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	小山　富美子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	丸尾　智実	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	高山　良子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	畑中　あかね	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	新澤　由佳	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	後藤　由紀子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野

ウクライナ支援プロジェクトチーム

	氏　名	所　　属
リーダー	神原　咲子	基盤看護学領域　　災害看護･国際看護学分野
	南　　裕子	神戸市看護大学　　名誉教授
	藤代　節	人間科学領域　　人文科学分野
	船越　明子	健康生活看護学領域　精神看護学分野
	水川　真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山岡　由実	大阪医科薬科大学看護学部　　精神看護学教授

フットケア支援プロジェクトチーム

	氏　名	所　　属
リーダー	池田　清子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	畑中　あかね	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野

神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター

2023 年度実績報告書

発行日　2024 年 7 月 1 日
発行者　公立大学法人　神戸市看護大学
〒651-2103　神戸市西区学園西町 3－4
TEL　078－794－8080　FAX　078－794－8086
編　集　神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター
表紙デザイン　手島美華
ISBN　978-4-9909462-5-8

©公立大学法人神戸市看護大学　無断転載を禁じます。

ISBN 978-4-9909462-5-8